

筑波大学博士(言語学)学位請求論文

認識更新標示「へー」の使用と相互行為の
進行性に関する会話分析的研究

関 玲

2019 年度

目次

第1章 序論	1
1.1 本研究の背景	1
1.2 受け手による認識更新標示	2
1.3 「へー」に関する先行研究と残された課題	4
1.4 本研究の目的	6
1.5 本論文の構成および概要	7
第2章 研究方法と研究データ	9
2.1 はじめに	9
2.2 会話分析(Conversation Analysis)	9
2.3 本研究にかかわる会話分析の基本概念	10
2.3.1 順番交替	10
2.3.2 隣接ペア	12
2.4 データの概要	13
2.4.1 対面会話	13
2.4.2 電話会話	14
2.5 トランスクリプトの記号	16
2.6 まとめ	18
第3章 話し手のTCUの途中に用いられる受け手の「へー」	20
3.1 はじめに	20
3.2 ニュース性のある情報として受け止めたことを標示する「へー」	21
3.3 「へー」とターンの取得とのかかわり	28
3.3.1 「へー」と話し手のTCUの途中で起こる「一時的」ターン交替	28
3.3.2 「へー」と話し手のTCUの途中で起こるターンの競合	35
3.4 まとめ	42
第4章 基本連鎖の第二部分に用いられる「へー」	43
4.1 はじめに	43

4.2	基本連鎖の第二部分に用いられる「へー」の相互行為上の働き	44
4.2.1	報告者のニュース性を強調するスタンスに同調を示す「へー」	44
4.2.2	基本連鎖の第二部分に用いられる「へー」と「ふーん」との比較	51
4.3	次なる連鎖を生み出す手立てとしての「へー」	56
4.3.1	第一部分のニュース性にかかわることを聞き出すことを可能にする「へー」	56
4.3.2	第一部分のニュース性にかかわらないことを聞き出すために利用される「へー」	69
4.4	まとめ	76
第5章	質問－応答連鎖の第三の位置に用いられる「へー」	78
5.1	はじめに	78
5.2	Y/N 質問－応答連鎖の第三の位置に用いられる「へー」	79
5.2.1	「想定外」の応答への反応として用いられる「へー」	80
5.2.2	Y/N 質問－応答連鎖の第三の位置に用いられる「ふーん」との比較	89
5.3	WH 質問－応答連鎖の第三の位置に用いられる「へー」	92
5.3.1	応答者がある情報を強調するスタンスに同調を示す「へー」	92
5.3.2	WH 質問－応答連鎖の第三の位置に用いられる「ふーん」との比較	97
5.4	まとめ	100
第6章	一連の連鎖が収束可能な位置に至った後に用いられる「へー」	102
6.1	はじめに	102
6.2	「一連の連鎖」とは	102
6.3	会話参加者の間に生じた認識の相違によって展開される一連の連鎖と「へー」	107
6.4	「へー」の受け手によって報告されるニュースを契機に展開される一連の連鎖と「へー」	111
6.5	「へー」と新たな話題の開始	120
6.6	まとめ	124
第7章	終章	125
7.1	はじめに	125
7.2	各章の概要	125
7.3	本研究の成果	127
7.4	今後の課題	129

参考文献	132
【英語文献】	132
【日本語文献】	138
各章と既発表論文・学会発表との関係	141

第1章 序論

1.1 本研究の背景

本研究は、会話分析(conversation analysis)の手法を用いて、日本語会話においてよく用いられる認識更新標示¹の1つである「へー」に着目し、「へー」が会話の中でどのように用いられ、また「へー」の使用によって相互行為上どのようなことが達成されているかを明らかにするものである²。

私たちは日常会話(ordinary conversation)を通して、挨拶、依頼、誘い、ニュースの報告などの様々な活動を行い、また、これらの活動は、話し手と受け手双方によって協働的に成し遂げられている。本研究が着目する認識更新標示「へー」というのは、話し手の発話を受け止める際に用いられる「受け手のトークン」(response token)の1つである³。

また、近年、会話分析の手法を用いて、「受け手のトークン」に焦点を当てた研究が多くなされている(Schegloff, 1982; Jefferson, 1984a, 1984b, 1993; Heritage, 1984, 1998, 2002; Goodwin, 1984, 1986a, 1986b, 1996; Local, 1996; Goodwin and Goodwin, 2000; Gardner, 2001; Sorjonen, 2001; 串田, 2002, 2006, 2009; Wilkinson and Kitinger, 2006; Bolden, 2006; Mori, 2006; Golato and Betz, 2008; 高木, 2008; 西阪, 2008, 2009; Stivers, 2008; Couple-Kuhlen, 2009; Hayashi, 2009; Aoki, 2010; Golato, 2010; Stivers and Rossano, 2010; Tanaka, 2010, 2013; 山本, 2013, 2016; Koivisto, 2015; Seuren et al., 2016; Weildner's, 2016; Endo, 2018 など)。上記の先行研究は、いずれも、「受け手のトークン」が産出されている連鎖上の「位置(position)」と「構成(composition)」(例えば、どのような韻律で発話されているか、単独で発話されているか、あるいは、他の言語要素と一緒に発話されているかなど)を重視し、それぞれのトークンの相互行為上の働きを明らかにしている。

¹ 「認識更新標示」がどのようなものを指すかについては、本章の1.2節で述べる。

² 実際の会話の中で、「へー」は様々な音調で発話される。本論文では、便宜上、研究対象を「へー」と表記する。また、会話のトランスクリプト上では、なるべく「へー」が実際に発話されている音調を表記している。

³ 第3章から第6章の分析で述べるように、「へー」の話者は「へー」を産出した直後に質問などを通して、新たな連鎖を開始することがある。この点から言えば、「へー」の話者を「受け手」と呼ぶのが適当ではないかもしれないが、ここでは、ひとまず、「話し手」と区別するために「受け手」という呼び方を採用する。また、実際の分析では、「へー」が用いられる連鎖環境によって、「へー」の話者の呼び方を個別に記す。

また、上記の先行研究を通して、「受け手のトークン」は相互行為の産物であり、相互行為の組織化に貢献していることが明らかにされている。

本研究では、こうした「受け手のトークン」に関する研究の流れを受け継ぎ、日本語会話に用いられる「へー」を対象に、会話分析の手法を用いて、実際の会話の中で「へー」が連鎖上のどの位置に用いられ、またどのように構成されているかを詳細に分析することで、「へー」が相互行為の組織化にどのように貢献しているかを明らかにする。

以下、1.2節では、受け手による認識更新標示とはどのようなものを指しているかを説明する。1.3節では、「へー」に関する先行研究を概観し、課題を述べる。1.4節では、本研究の目的を述べる。1.5節では、本論文の構成および概要について述べる。

1.2 受け手による認識更新標示

1.1節でも記したように、本研究は日本語会話でよく用いられる「認識更新標示」の1つである「へー」を研究対象としている。本節では、「認識更新標示」とはどのようなものを指しているかを述べていく。

会話をする時、私たちは、相手による新たな情報の提供に伴い、受け手として自身の認識(epistemic)を常に更新している。本研究では、認識が更新されたことを標示する言語形式を「認識更新標示」と呼ぶこととする。

この「認識更新標示」に近い概念として、Heritage(1984)における change of state token が挙げられる。Heritage(1984)は、英語の会話の中で、「現在の知識 (knowledge)、情報 (information)、志向 (orientation)、意識 (awareness)に関する話者の現在の状態に何らかの変化が起きたことを示す」際に用いられる ‘oh’ を change of state token としている。また、Heritage(1984)は、主に情報提供 (informing)と修復 (repair)⁴の後に用いられる ‘oh’ を検討しているため、この change of state token はその直前の発話とかかわるものとして理解される。しかし、実際に会話の中で、話者の認識の「状態」(state)に変化 (change)が起きたことを標示するのが、必ずしもいつもその直前の発話とかかわっているわけではな

⁴ Heritage(1984)では、この2つの位置を詳細に記述している。具体的には、「情報提供」に関して、①情報が提供された後、②質問によって引き出された情報が提供された後(question-elicited informings)、③情報提供に対して別の情報提供がなされた場合(counter informings)に訂正を行う発話の冒頭という3つの位置に用いられる ‘oh’ を詳細に検証している。また、「修復」に関して、①他者開始修復 (other-initiated repair)がトラブルを解決した後、②自分の理解が正しいかチェックし(understanding check)、それに対して相手が確認を与えた後、③相手が言っていないことに対して自分の理解を示すときという3つの位置の ‘oh’ を分析している。

い。本研究では、産出時点で認識が変化したことの標識とみなされる可能性がある **change of state token** に代えて、先行するやり取りを通して認識が更新されたことを示す標識という意味で、「認識更新標示」という用語を用いる。

以下では、認識更新標示を理解するために、これまでの **change of state token** に関する先行研究を簡単に概観する。

まず、英語の ‘oh’ に関するこれまでの一連の研究からは、大きく次の3つが明らかになっている。基本連鎖の第一部分において ‘oh’ は、基本的に現在行っている行為から突然異なる行為へシフトする際に用いられる(Jefferson, 1978; Heritage, 1984; Bolden, 2006)。また、基本連鎖の第二部分において ‘oh’ は、第一部分の行為(質問、評価)への反応として使用されており、第一部分の行為に応じて様々なスタンスを示すことができる(Heritage, 1998, 2002)。そして、基本連鎖の次のターンに用いられる ‘oh’ は、「連鎖を収束させる働き」をしているとされている(Heritage, 1984; Schegloff, 2007)。このように、1つの言語形式 ‘oh’ の使用に関して、それが用いられる連鎖上の「位置」に着目することで、相互行為上の働きが異なることが示唆される。

また、英語以外の言語についても、**change of state token** に関する研究が多く行われてきた。具体的には、ドイツ語 (Betz and Golato, 2008; Golato and Betz, 2008; Golato, 2010, Golato, 2012)、フィンランド語 (Koivisto, 2013; Koivisto, 2015a; Koivisto, 2015b; Koivisto, 2016)、ポーランド語 (Zinken and Ogiermann, 2011; Zinken, 2013; Weildner's, 2016)、アイルランド語 (Hilmisdóttir, 2016)、エストニア語 (Kasterpalu and Hennoste, 2016)、オランダ語 (Seuren et al., 2016)、デンマーク語 (Emmersten and Heinemann, 2010; Heinemann, 2016a, 2016b)、フランス語 (Baldauf-Qulliatre, 2016; Persson, 2015)などの言語で、**change of state token** に関する研究成果が挙げられている。また、これらの先行研究も、いずれも、それぞれの言語形式が用いられる「位置」に着目し、それぞれの言語形式の相互行為上の働きを明らかにしたものである。

例えば、ドイツ語の **change of state token** を対象とする Golato(2010)では、修復連鎖の第三の位置に着目し、‘ach’ と ‘achso’ の違いを分析している。その結果、‘ach’ は単に情報を受け止めることを示す際に用いられるが、‘achso’ は前の発話に含まれている行為への理解を明示的に示す際に用いられるということが明らかになった。また、フィンランド語の **change of state token** を対象とする Koivisto(2015)では、話者に何か理解のトラブルがあり、そのトラブルが相手の発話によって解決された時、つまり、修復連鎖の第三の位置に着目し、‘aa’ を「今理解した」ことを標示するものであるということを明らかにしている。

一方、日本語の会話における認識更新を標示する受け手の反応について、Tanaka(2010)では、受け手の反応の中で、「ああ、えっ、はあ、ほう、へー、ふーん」といった6つの受け手の反応は、英語の‘oh’の働きと重なる部分があると指摘している。また、この6つの受け手の反応に焦点を当てた先行研究として、Mori(2006)とTanaka(2013)が「へー」について、Hayashi(2009)が「えっ」について、Aoki(2010)とTanaka(2010)が「ふーん」について、Endo(2018)は「あ」と「ああ」について、一定の知見を提示している。

Mori(2006)とTanaka(2013)の「へー」の分析については、本研究の分析を提示する中で適宜言及する。ここでは、Mori(2006)とTanaka(2013)以外の先行研究の成果⁵を簡単に紹介する。Hayashi(2009)によると、「えっ」は前もってあった知識や前提、予想、志向から逸脱した何かにたった今気が付いたことを示すために用いられる。Aoki(2010)では、話者が「ふーん」を用いて何か新たな情報を受け止めたことを主張する(claim)が、それと同時に話者のスタンスや評価を保留すると述べている。また、Tanaka(2010)では、話者が「ふーん」を用いて会話に「参加している」スタンスを示しているが、現行する話題に関与していない(topical engagement)ことを示しており、「ふーん」と話題とのかかわりを明らかにしている。Endo(2018)では、話者が「あ」を用いて、知らなかった状態から今知ったという状態に変わったことを示すこと、また一方で、話者が「ああ」を用いて、自身の認識状態に変化は生じるが、相手に提供される情報に関して前提知識があることを主張していると論じている。

これらの認識更新標示に関する先行研究から、1つの認識更新標示の働きを分析するにあたり、連鎖上の「位置」を詳細に分析する必要があることが示唆される。そこで、本研究では連鎖上の「位置」に関して体系的に分析することによって、認識更新標示「へー」の働きの包括的な解明を目指す。

次節では、Mori(2006)とTanaka(2013)を含め、本研究の対象である「へー」に関する先行研究を取り上げて紹介する。

1.3 「へー」に関する先行研究と残された課題

ここでは、先行研究における「へー」に関する記述について概観したうえで、残されている課題を述べる。

⁵ 「へー」を研究対象としているMori(2006)とTanaka(2013)については、1.3節で詳しく紹介する。

従来の言語学の研究では、「へー」を「感動詞」⁶あるいは「あいづち」として扱っており、「へー」の意味機能を中心に記述が行われてきた(益岡・田窪, 1992; ザトラウスキー, 1993; 田窪・金水, 1997; 土屋, 2000; 富樫, 2005, 2012; など)。そのうち、益岡・田窪(1992: 60)は「へー」を「眼前の事態や相手の言ったことに対する意外感を表す」感動詞として述べており、ザトラウスキー(1993: 70)は、「へー」を「興味や関心を示す」機能を持つあいづちとしている。また、富樫(2005)は「へー」を「プラス評価を示す」、また「既存知識と矛盾なく関連付けられる新規の情報を獲得する」時に使用される感動詞として記述している。これらの先行研究の記述は「へー」の一般的な意味機能の理解に貢献する一方、この形式が実際に使用されている会話データを用いた研究は少なく、また、十分に「相互行為環境」という意味での文脈を踏まえたものはほとんどない。そのため、「へー」が具体的にどのような状況で、どのように用いられ、会話参加者に理解されているかということについて、これまで明らかにされていない。

それに対して、実際の会話データを扱う会話分析の手法を用いた研究では、言語形式が具体的に連鎖上のどの位置に用いられるかに着目し、その言語形式が会話の中でどのように用いられ、会話参加者に理解されるかということをも明らかにしている。

ここで、会話分析の手法を用いて「へー」を分析した Mori(2006)と Tanaka(2013)を紹介する。以下では、この2つの先行研究において既に明らかになっていること、そして何が課題として残っているか詳しく見ていく。

Mori(2006)は、「へー」の相互行為上の働きについて、その産出の位置や産出の仕方との関連性に焦点を当て、分析を行っている。Moriは、情報を提供する連鎖(informing sequence)の途中とその後のそれぞれの位置に用いられる「へー」の相互行為上の働きを分析し、従来指摘されていた「新たな情報を受け止めたことを標示する」という「へー」の働き (Iwasaki, 1997; Hayashi, 2001; 富樫, 2005 など)に加えて、それぞれの位置における「へー」の新たな働きを明らかにしている。

Mori(2006)によれば、情報を提供する連鎖の途中で話者が「へー」を用いることによって、情報を提供する中で、ある特定の情報をとりわけニュース性のあるもの(newsworthiness)として受け止めたことを標示したり、修復の開始(repair initiator)として使用したりすることがある。また、情報を提供する連鎖が収束可能な位置に至った後に話者が「へー」を用いることによって、単に新たな情報を受け止めたと示すだけではなく、新たな情報に対して何

⁶ 「間投詞」とも呼ばれている。

らかのスタンス標示あるいは評価をすること、情報を提供する連鎖を閉じて新たな連鎖を開始する際の標識として働くことを明らかにしている。さらに、「へー」の働きは、「へー」が産出される際のプロソディーとも深くかかわっていることが指摘されている。

この Mori(2006)の分析から、「へー」の相互行為上の働きを明らかにするにあたり、上に述べた連鎖上の「位置」から分析することが重要であると言える。しかし、Mori(2006)では、情報を提供する連鎖の途中とその後という 2 つの位置に用いられる「へー」のみを考察しており、実際の会話の中で観察される、これ以外の位置の「へー」については分析がない。そのため、上記の 2 つの位置以外に「へー」がどの位置で、どのように用いられているのか、さらに、「へー」の産出によって相互行為上どのようなことが成し遂げられるのかということが課題として残っている。

また、Tanaka(2013)は、会話参加者がいかに互いに「認識の一致(epistemic coherence)」を達成させるかに焦点を当てて分析を行っている。Tanaka(2013)は、「へー」は話者間の認識の一致が達成したことを示す際に利用可能な言語資源の 1 つであるということを描している。しかし、会話の中で生じた問題が解決できない状況、つまり、話者間の認識が必ず一致に至らなくても、「へー」が用いられる事例も観察される。それは具体的にどのような連鎖環境なのか、またそういった連鎖環境において「へー」がどのように用いられているかということが明らかになっておらず、課題として残されている。

以上のように、「へー」に関して、会話分析の手法を用いた Mori(2006)と Tanaka(2013)では既に一定的な知見が提示されている一方で、残された課題も存在する。これらの課題を踏まえて、続く 1.4 節では本研究の目的を記す。

1.4 本研究の目的

本研究は、Mori(2006)と Tanaka(2013)で明らかにされている知見を踏まえつつ、とりわけ、「へー」が用いられる「位置」を包括的かつ体系的に分析することを通して、「へー」の相互行為上の働きを包括的に解明することを目指す。具体的に、会話の中で繰り返し使用される以下の 4 つの連鎖上の位置⁷⁾に用いられている「へー」を研究対象とする。また、各位置に用いられる「へー」と各章との関係を括弧内で示している。

⁷⁾ それぞれ具体的にどのような位置なのかについては第 3 章から第 6 章で詳述する。また、「TCU」、「第三の位置」などの会話分析に用いられる概念については第 2 章で説明する。

- (1)話し手が TCU を産出している途中⁸ (第3章)
- (2)基本連鎖の第二部分 (第4章)
- (3)質問－応答連鎖の第三の位置 (第5章)
- (4)一連の連鎖が収束可能な位置に至った後 (第6章)

本研究の目的は上記の4つの位置において、「へー」がどのように用いられ、また「へー」が用いられることによって、相互行為上どのようなことが達成されるかを明らかにすることである。

1.5 本論文の構成および概要

本論文は以下の7章から構成される。

第2章では、本研究で用いる会話分析という研究手法および本研究にかかわる会話分析の基本概念について、本研究の分析と関連付けながら説明を行う。また、本研究で扱う会話データの詳細およびトランスクリプトの記号を紹介する。

第3章では、話し手のTCUの途中に受け手によって用いられる「へー」を取り上げる。本章では、まず、単独で用いられる「へー」について検討し、「へー」の産出によって、相互行為上どのような機会が生み出されるかを明らかにする。さらに、「へー」と他の言語要素と一緒に使用される場合を検討することによって、話し手がTCUを産出する途中の「へー」とターンの取得のかかわりについて論じる。

第4章では、基本連鎖の第二部分に用いられる「へー」を取り上げる。特に、本章では、「へー」はどのようなニュースを受け止めた際に用いられるかを分析することで、ニュースが報告された次のターンに用いられる「へー」の相互行為上の働きを明らかにする。また、「へー」の相互行為上の働きを深く理解するため、基本連鎖の第二部分に用いられる他の言語形式、特に「ふーん」との比較を試みる。さらに、「へー」の相互行為上の働きを明らかにしたうえで、第二部分において、「へー」の産出によって相互行為的にどのような機会が作り出されるか検討する。

第5章では、質問－応答連鎖の第三の位置に用いられる「へー」を取り上げる。この章では、質問者の認識がどのように質問を通して示され、またその認識がどのように応答によ

⁸ここで言う「話し手がTCUを産出している途中」とMori(2006)における情報を提供する連鎖の「途中」とどのような関係にあるかについて、また第3章で詳述する。

て更新されるかに焦点を当て、Y/N 質問-応答連鎖および WH 質問-応答連鎖の第三の位置に用いられる「へー」について論じる。また、それぞれの連鎖環境における「へー」の相互行為上の働きをより詳細に理解するために、「ふーん」との比較を行う。なお、「情報を提供する」行為を達成するには、2つの可能性が考えられる。1つは、情報を提供する話者が自ら情報を提供する場合、もう1つは、他の会話参加者に質問にされて、その質問に答える形で情報を提供する場合である。第4章は、前者の場合を検討するもの、第5章は、後者の場合について検討するものである。

第6章では、「一連の連鎖」(連鎖組織上関連付けられているひと連なりの連鎖)全体が収束可能な位置に至った後に用いられる「へー」を取り上げる。分析では、「へー」が用いられる2つの環境：①会話参加者の間に生じた認識の相違によって展開される一連の連鎖、②「へー」の受け手によって報告されるニュースを契機に展開される一連の連鎖を取り上げ、「へー」の話者が「へー」を用いて相互行為的にどのようなことを成し遂げているのかに焦点を当て、記述を行う。

第7章では、各章の内容を整理し、本研究で得られた成果および課題を述べる。

第2章 研究方法と研究データ

2.1 はじめに

第1章で述べたように、本研究は、会話分析という手法を用いて認識更新標示「へー」の相互行為上の働きを明らかにするものである。本章では、本研究で用いる会話分析という研究方法と研究データについて概説する。2.2節では、会話分析という手法について簡単に説明する。2.3節では、本研究にかかわる会話分析の基本概念を説明する。2.4節では、本研究に用いる会話データの概要を述べ、2.5節では、トランスクリプトの記号を紹介する。

2.2 会話分析 (Conversation Analysis)

会話分析は、1960年代に社会学者である Sacks, Schegloff and Jefferson によって土台が築かれた1つの相互行為研究の方法である。Sacksらは、会話そのものは、会話参加者の極めて秩序立ったやり方・方法・手続きによって組織化されていることに目を向け、会話を組織するために、参加者によって用いられているやり方・手続き・方法を解明するための方法を開発した。

会話分析が他の研究法と異なる点として、「発話」に対する捉え方と分析視点の2点が挙げられる。まず、会話分析では、「発話」を「行為(action)」として捉える。つまり、ある「発話」がなされた後、どのようなことが発話されたかという「発話」の内容ではなく、会話参加者がその「発話」を通してどのようなことを達成しようとするのかという「行為」を正確に捉えることが会話分析では重要となる。また、会話分析では、分析者の視点から会話を観察するのではなく、常に会話参加者自身が何に志向しているかを捉えなければならない。つまり、会話分析では、常に会話参加者自身が一つ一つのふるまいにおいて、どのようなことに志向してどのような「行為」を達成しようとするのか、ということを観察する必要がある。

Schegloff(1984)によれば、相互行為の中の発話は、話し手の意図を起点として生じるのではなく、相手の先行発話を起点として生じる。先行発話は、その次にどんな行為がなされるべきかについて一定の期待を作り出し、この期待を満たす形で発話が組み立てられることによって、ある行為が受け手に認識可能になる。このように、相互行為の連鎖における「位置(position)」と発話の「構成(composition)」(Schegloff, 2007)に注目して行為の認識可能性を記述することは、会話分析のもっとも基本的な方針となっている。

「へー」の相互行為上の働きを明らかにするために、本研究においても会話分析の手法に則り、「へー」が連鎖上のどの「位置」に用いられるか、また、どのような韻律で発音され、他のどのような言語要素と一緒に発話されているかどうかという「構成」に着目して分析を進めていく。

2.3 本研究にかかわる会話分析の基本概念

本節では、本研究にかかわる会話分析の基本概念を説明する。具体的に、2.3.1 節では、順番交替に関する概念について説明し、2.3.2 節では隣接ペアについて説明する。なお、会話分析の基本概念に関する詳細な解説は、高木・細田・森田(2016)や串田・平本・林(2017)を参照されたい。

2.3.1 順番交替

Sacks, Schegloff & Jefferson(1974)は、会話参加者たちが発話を行う際に、「順番交替システム(turn taking system)」と呼ばれる規則に沿ってふるまっていることを発見した。以下では、「順番交替システム」にかかわる基本的概念として「TCU」、「ターン」、「TRP」を説明した後、「順番交替システム」の規則群を説明する。

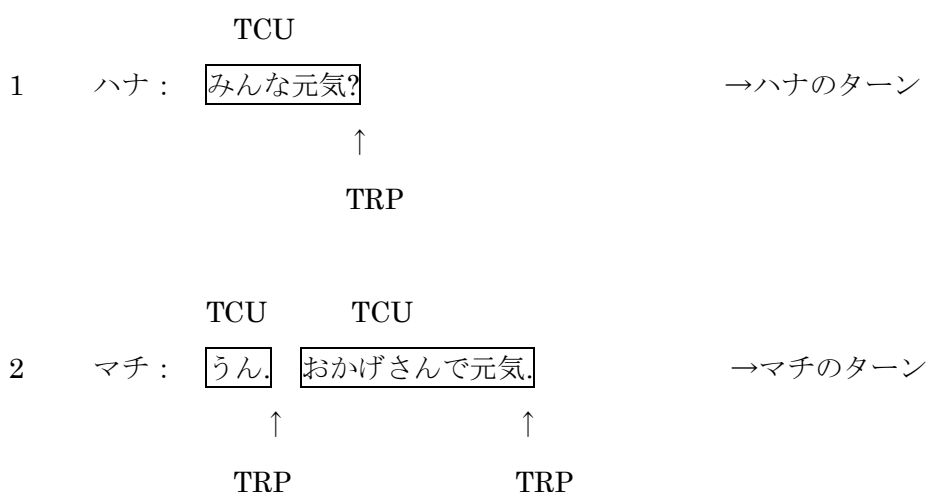
会話分析で用いられる単位として、順番(ターン)を構成する単位を指す TCU (Turn Constructional Unit)がある。Sacks らによると、会話は、話す順番を参加者自身がその都度誰かに割り振ることや、自己選択することで交替する順番交替システム(turn-taking system)で成り立っている。このシステムにおいて、ターンを構成するものが TCU であり、語、句、節、文という様々な要素が TCU となる。基本的には、この TCU の完結可能点に「順番の移行が適切となる場所」である TRP(transition relevance place)が配置され、次話者の割り当てや自己選択がなされる。例として次の事例を見てみよう。

(1)[callhome_0862_1:09]¹

- 1 ハナ： みんな元気?
- 2 マチ： うん.おかげさんで元気.
- 3 ハナ： うん.暑い?

¹ 断片の表題の読み方は、本章の 2.4.2 節で説明する。

1行目の発話「みんな元気?」は1つのTCUによって1つのターンが構成されている。そのTCUの末尾となる「元気?」の後には「順番の移行が適切となる場所」であるTRPが配置されており、その後2行目でもう一方の話者にターンが交替している。1行目のように、1つのTCUによって1つのターンが構成される場合もあれば、複数のTCUによって1つのターンが構成される場合もある。例えば、2行目「うん.おかげさんで元気。」と3行目「うん.暑い?」には2つのTCUが含まれている。



以上、順番交替システムにかかわる基本概念について説明した。以下では、順番交替システムの規則群について、高木・細田・森田(2016: 66-67)の記述を引用して説明する。

1. 現在の発話が最初のTCUの完結可能な点、すなわち、最初の「順番の移行が適切となる場所(TRP)」に至ったとき、以下のルールがこの順序で適用される。
 - a) もし現在の話し手がそれまでに次の話し手を選択しているならば、その選択された者が次に順番を取って話す権利と義務を有する。ここで順番が替わる。
 - b) もしa)の規則が適用されなかったら(すなわち、それまでに現在の話し手が次の話し手を選択しなかったら)、現在の話し手以外の者が自分で自分を次の順番を取る権利を有する。ここで順番が替わる。
 - c) もしa)もb)も適用されなければ(すなわち、現在の話し手が次の話し手を選択することもなく、現在の話し手以外の者が自分を次の話し手として選択することもなければ)、現在の話し手が話し続けてよい(続けなくてもよい)。
2. 最初のTRPでa)もb)も適用されず、c)が適用されて、現在の話し手が話し続けたと

すれば、次の TRP で 1a)~c)が再び適用される。そして最終的に順番が移行するまで次の TRP で同じことが繰り返される。

TCU の概念は、本論文第 3 章の話し手の TCU の途中に用いられる受け手の「へー」と深くかかわっている。また、分析は、常に当該の発話が TCU の完結可能点に至っているかどうか、発話の順番が収束可能な位置に至っているかどうか、順番交替が可能かどうかなどに着目しながら進めていく。

2.3.2 隣接ペア

隣接ペアは、会話で用いられる発話同士の結びつきの基本的な単位のことである。典型的な隣接ペアとして、「挨拶」－「挨拶」、「依頼」－「受諾/拒否」、「誘い」－「受諾/拒否」、「質問－応答」などが挙げられる。以下では、Schegloff and Sacks(1973)が示した隣接ペアの 5 つ特徴について、高木・細田・森田(2016: 97)の記述を引用して説明する。

- 1) 2 つの発話からなる。
- 2) この 2 つの発話は隣接している。
- 3) この 2 つの発話はそれぞれ別の話し手によって産出される。
- 4) ペアの第一部分(first pair part: FPP)と第二部分(second pair part: SPP)という順序がある。第一部分はやり取りを開始するような発話タイプ(質問、依頼、申し出、誘い、など)、第二部分は直前の順番に反応するような発話タイプ(応答、承認、拒否、同意、非同意、など)である。
- 5) 第一部分はそれを第一部分とするペアのタイプ(「質問」－「応答」のペアタイプ、「依頼」－「受諾」のペアタイプ、「誘い」－「受諾」のペアタイプ、など、ペア自体が類型化されている)の第二部分が産出されることを適切とする。

本論文の第 4 章で取り扱う「ニュース報告－ニュースの受け取り」、そして第 5 章で取り扱う「質問－応答」連鎖環境は、隣接ペアの概念にかかわるものである。また、分析の際には、ペアの第一部分である FPP がペアの第二部分である SPP の産出にどのように影響を与えるかといった隣接ペアの視点を取り入れる。

また、第 5 章で取り扱う「質問－応答」連鎖の「第三の位置」(Third Position)というのは、「質問－応答」連鎖という隣接ペアの次に来るターンのことを指している。

断片(2)を例にこの「第三の位置」の概念を示すと、以下のようになる。

(2)[callhome_0862_1:09] 【断片(1)再掲】

- | | | |
|---|------------------|--------|
| 1 | ハナ： みんな元気？ | ←FPP |
| 2 | マチ： うん.おかげさんで元気. | ←SPP |
| 3 | ハナ： うん.暑い？ | ←第三の位置 |

以上では順番交替と隣接ペアについて概要をまとめた。これ以外の概念については、分析に使用する際に必要に応じて説明を加えることにする。

2.4 データの概要

本研究では、日本語母語話者による日常会話を分析する。会話の資料には、筆者が収録した日本語母語話者同士による対面会話(約 190 分)と電話会話(約 30 分)、および TALKBANK(<https://talkbank.org/>)内の Call Friend Japanese Corpus と Call Home Japanese Corpus の電話会話(MacWhinny, 2007)を用い、これらの会話データの中に見られる「へー」を取り上げ、分析対象とした。以下では、それぞれの会話データの概要について述べる。

2.4.1 対面会話

本研究で用いる対面会話は、2014年の6月～7月に収録した大学生・大学院生(計6組、各組2人、友人同士)による日常会話である。以下の表1に協力者および収録の情報をまとめている。

表1 対面会話の収録情報

データ	協力者	性別	身分	収録日	収録時間
①	A&L	女	大学院生	2014年6月	32分
②	B&Y	女	大学院生	2014年7月	30分
③	C&K	女	大学生	2014年6月	32分
④	H&U	女	大学生	2014年6月	31分
⑤	M&O	女	大学生	2014年6月	31分
⑥	N&S	女	大学院生	2014年6月	30分

対面会話のデータは、会話だけでなく会話参加者の非言語行動も観察できるよう、録音以外にビデオカメラによる録画も行った。会話提供の協力者を募り、録音と録画によるデータ収集の趣旨と方法、プライバシーの保護について説明し、協力者の承諾を得たうえで収録した。協力者がリラックスして会話ができるように、収録場所を選び、録音・録画中は収録者が立ち会わないこととした。また、会話の話題に関しては協力者たちに特に指示を与えず、自由に会話してもらうように伝えた。また、事前に30分程度の収録時間であることを協力者らに伝え、収録を始めて30分経過後で収録室に入って会話を中断させ、収録を終了するようにした。

2.4.2 電話会話

対面会話に加えて、本研究では電話会話をデータとして利用した。研究に用いた電話会話は、筆者が収集した2組の会話(計33分)と、Call Friend Japanese Corpus および Call Home Japanese Corpus である。

筆者が収集した2組の電話会話は主に協力者Tに協力してもらった。具体的には、Tに事前にICレコーダーを貸しておいて、Tが友人に電話するときに収録してもらうよう依頼した。電話会話の収録に協力した協力者の情報および収録の情報は以下の表2にまとめている。

表2 会話電話の収録情報²

データ	協力者	性別	身分	収録日	収録時間
⑦	D&T	女	大学生	2018年6月	14分
⑧	R&T	女	大学生	2018年7月	19分

Call Friend Japanese Corpus および Call Home Japanese Corpus は The Talk Bank Project(MacWhinny,2007)の一部として公開されているものである。Call Friend Japanese Corpus はアメリカに在住・滞在している日本語母語話者同士による電話会話を収録したコーパスであり、Call Home Japanese Corpus はアメリカに在住・滞在している日本語母語話者が日本在住の親族、家族、友人にかけた電話会話を収録したコーパスである。いずれのコーパスにおいても、1会話はおよそ15分から30分程度の長さで行われている³。

² データ⑦と⑧のTは同一人物である。

³ 表3にもあるように、15分間以下の会話も数件見られた。

以下の表3では、本研究で取り上げるコーパス会話のデータに関する情報をまとめる。そのうち、「話者名」についての情報は次のように設定する。公開されている会話データから「話者名」が特定できるものに関しては、会話の中で実際に用いられる「話者名」を採用する。そして、会話データから「話者名」が特定できないものに関しては、仮名を使用する。また、「話者に関する情報」については、会話データの内容から話者間の「人間関係」を判断したうえで、その情報を記載する。そのうち、「友人同士」の関係にある話者に関しては、話者の「性別」の情報を記載する。

表3 本研究で用いるコーパス会話のデータに関する情報

コーパス名 ⁴	データ番号	話者名および話者に関する情報	データの長さ ⁵
callfriend	1841	ヨシ(男)とレナ(女)	29分59秒
callfriend	2167	アヤ(女)とユキ(女)	29分59秒
callfriend	1773	リク(男)とルナ(女)	16分17秒
callhome	0862	ハナ(娘)とマチ(母)	14分59秒
callhome	0924	コウ(夫)とヒナ(妻)	14分59秒
callhome	0986	ヨウコ(叔母)とアズサ(姪)	14分59秒
callhome	0988	タク(夫)とミホ(妻)	15分0秒
callhome	1012	ヒデ(夫)とミヨ(妻)	14分59秒
callhome	1041	テツ(父)とヒロ(息子)	14分58秒
callhome	1069	タツ(夫)とユメ(妻)	6分44秒
callhome	1370	ナミ(姉)とキヨミ(妹)	14分59秒
callhome	1461	マユ(姉)とサエ(妹)	29分0秒
callhome	1586	マオ(娘)とモリ(母)	29分59秒
callhome	2053	マイ(娘)とハル(母)	29分59秒
callhome	1201	ミオ(女)とダイ(男)	14分58秒
callhome	1966	ユリ(女)とキナ(女)	18分54秒
callhome	2074	カズカ(女)とムツコ(女)	15分08秒

⁴ 以下では、便宜上、Call Friend Japanese Corpus を callfriend、そして Call Home Japanese Corpus を callhome と表記する。

⁵ 「データの長さ」とは、ホームページで公開されている会話の時間の長さを指す。

callhome	2199	ケイコ(女)とマユミ(女)	29分59秒
----------	------	---------------	--------

以上、本研究で用いる会話データについて説明した。ここで、会話の断片を取り上げる際の表題について説明する。

収録した会話から分析箇所を抜き出し、断片と呼ぶ。断片の表題は以下の例のように表記する。

[A&L_就職_30:58]

↑ ↑ ↑
A B C

A：筆者が収録した会話データの話者名

B：断片の主な話題

C：会話全体の中で断片の1行目が開始する時間

それから、コーパスから抽出する断片に関して、表題は以下の例のように表記する。

[callhome_0862_1:09]

↑ ↑ ↑
A B C

A：コーパス名

B：断片が入っているコーパス会話の番号

C：会話全体の中で断片の1行目が開始する時間

2.5 トランスクリプトの記号

会話データの転記(トランスクリプト)は Gail Jefferson によって開発されたシステムをもとに、日本語向けに整理された西阪・串田・熊谷(2008b)を主に参考に行っている。本論文が用いる記号は以下の通りである。

[発話の重なりの開始位置
] 発話の重なりの終了位置

(m.n)	間合いの秒数
(.)	0.2秒以下の短い間合い
発話::	直前の音が延ばされている
=	二つの発話が密着している
h	呼気音、笑い声などの破裂音を示す
.h	吸気音、息継ぎや笑いなどを示す
<u>発話</u>	下線部分に強勢がある
° 発話°	囲まれた部分の音が相対的に小さい
.	直前の部分が下降調抑揚である
,	直前の部分が継続を示す抑揚である
?	直前の部分が上昇調抑揚である
∩	直前の部分が半上昇調抑揚である
—	直前の部分が平板調抑揚である
↑	直後の音調が極端に上がっている
↓	直後の音調が極端に下がっている
-	直前の音が中断されている
(発話)	聞き取りが難しい発話
¥発話¥	笑いながら発話されている
<発話>	顕著にゆっくり発話されている
>発話<	顕著に速く発話されている
→	分析対象が含まれているターン
(())	トランスクリプト作成者の注釈

分析に関わる背景情報などは、必要に応じて断片の直前または本文中に記す。また、筆者が収集した会話に関して、データ中に現れる人名は全て仮名であり、地名や組織名などについても、分析に影響しない範囲で別の名称あるいは記号に変更している。

さらに、先行研究で紹介した通り、「へー」の相互行為上の働きを明らかにすることにあたり、プロソディーも考慮しなければならない。そのため、トランスクリプトを作成する際に、以下の断片(3)のように、分析対象の「へー」に関して、「へー」が実際発音されている音調を記号および注釈で表すこととする。

(3)[callhome_0862_1:26]

- 1 マチ： なんかヨーロッパも暑いって話だよ.フランスでなん-[どっかなんか.]
 2 ハナ： [あほんと:] ∴.
 3 マチ： すごい暑いんだって.
 → (緩やかな上昇調)
 4 →ハナ： へ: ∴.

なお、記述を行う際に、分析にかかわる「へー」の音調に関して、音声分析ソフト Praat⁶を使用し、「へー」のピッチ曲線を作成している。例えば、断片(1)の4行目の「へー」のピッチ曲線は以下の図1の通りである。

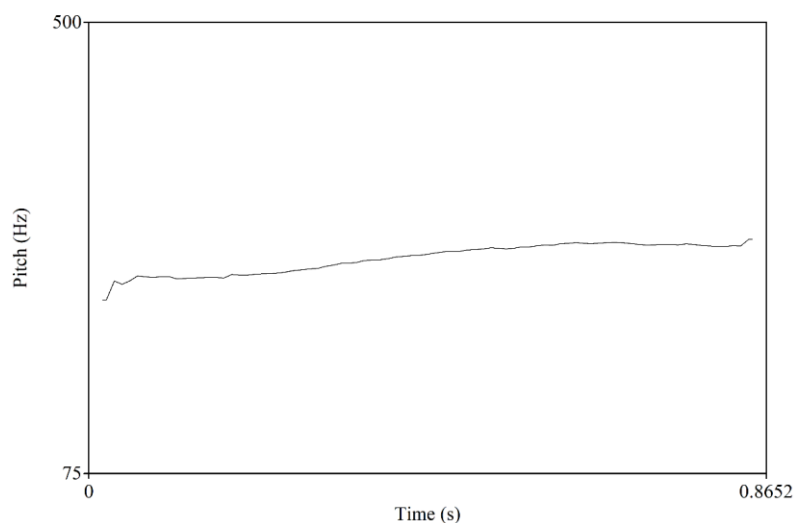


図1 断片(1)の4行目の「へー」のピッチ曲線

2.6 まとめ

以上、本研究で用いる「会話分析」という手法の特徴と、本研究にかかわる会話分析の基本概念について述べた。そして、本研究に用いる会話データの概要およびトランスクリプトの記号について説明した。次章から、具体的な会話事例を用いて、話し手のTCUの途中に

⁶ Praat はアムステルダム大学の Paul Boersma 氏と David Weenink 氏によって開発されたオープンソースのソフトウェアである。詳しい情報は <http://www.fon.hum.uva.nl/praat/>を参照。

受け手によって用いられる「へー」(第 3 章)、基本連鎖の第二部分に用いられる「へー」(第 4 章)、質問-応答連鎖の第三の位置に用いられる「へー」(第 5 章)、一連の連鎖が収束可能な位置に至った後に用いられる「へー」(第 6 章)を分析し、「へー」の相互行為上の働きについて論じていく。

第3章 話し手のTCUの途中に用いられる受け手の「へー」

3.1 はじめに

本章では、話し手がTCUを産出している途中に、受け手によって用いられる「へー」を取り上げ、「へー」の相互行為上の働きを明らかにする¹。

先行研究の中で既に指摘されているように、「へー」は何らかの新たな情報を受け止めたことを示す標識(news receipt)である(Iwasaki, 1997; Hayashi, 2001; 富樫, 2005; Mori, 2006)。実際、会話の中で、話し手が何らかの新たな情報を提供している途中に、「へー」は新たな情報を受け止めたことを示すために用いられることがしばしばみられる。本章は、このような、話し手が何らかの新たな情報を提供するためのTCUを産出する途中に、受け手によって用いられる「へー」を研究対象とする。

また、第1章で述べたように、Mori(2006)は情報を提供する連鎖(informing sequence)の途中²に用いられる「へー」について分析をしており、一定の知見を提示している。Mori(2006)によれば、情報を提供する連鎖の途中で、情報を受け止める話者(以下「受け手」)が「へー」を用いることによって、ある特定の情報をとりわけニュース性のあるもの(newsworthiness)として受け止めたことを標示したり、修復の開始(repair initiator)として使用したりすることがある。

しかし、Mori(2006)では、話し手が自ら情報を提供する連鎖環境のみを検討している。それに対して、本章では、話し手が自ら情報を提供する連鎖環境以外、他の会話参加者に質問されて、その質問に答える形で話者が情報を提供する連鎖環境も含めて検討する³。また、

¹ 本章では、便宜上、情報を提供する話者を「話し手」、そして、情報を受け止める話者(「へー」の産出者)を「受け手」と呼ぶ。また、話し手が単一のTCUを産出するだけで情報を提供する行為を達成している場合もあれば、複数のTCUを産出することを通して情報を提供する行為を達成している場合もある。いずれの場合においても、情報を提供するために用いられる一つ一つのTCUが完結可能な点に到達することが観察可能である。本章で扱う対象は、話し手が、1つのTCUの完結可能な点に到達する前に、受け手によって用いられる「へー」である。

² Mori(2006)では、「情報を提供する連鎖の途中」という言い方を用いているが、基本的に本章で検討する「話し手のTCUの途中」と一致している。

³ 第1章でも述べたように、「情報を提供する」行為を達成するには、2つの可能性が考えられる。1つは、情報を提供する話者が自ら情報を提供する場合、そしてもう1つは、他の会話参加者に質問にされて、その質問に答える形で情報を提供する場合である。本章は、この2つの連鎖環境における「へー」を研究対象とする。

Mori(2006)では、「へー」が単独で使用される場合について分析が行われているが、「へー」と他の言語要素と一緒に使用される場合については特に取り上げられていない。そこで、本章では、Mori(2006)において明らかにされている知見を踏まえつつ、特に、「へー」が他の要素と一緒に使用される場合を取り上げて検討したい。また、本章では、特に「へー」が用いられることによって、相互行為の連鎖がどのように影響されるかに着目し、分析を進めていく。

以下、3.2節では、単独で使用される「へー」を取り上げ、Mori(2006)で明らかにされている知見を検証しつつ、「へー」の使用と相互行為の連鎖の展開に着目し、分析を行う。3.3節では、「へー」と他の言語要素と一緒に使用される場合を取り上げ、「へー」がどのように使用されているかを分析する。3.4節では、本章で明らかにしたことをまとめる。

3.2 ニュース性のある情報として受け止めたことを標示する「へー」

本節では、話し手がTCUを産出している途中に、「へー」が単独で使用される事例を取り上げる。先述したように、Mori(2006)は「へー」がニュース性のある情報として受け止めたことを標示するために用いられるということを既に指摘している。本研究で収集したデータの観察からも、同様のことが確認される。

以下では、実際の会話例を用いてこの主張を検証していくとともに、「へー」の使用と相互行為の連鎖の展開とのかかわりに焦点を当てて記述していく。

まず、断片(1)を見てみよう。

(1)[callhome_1069_0:08]((アメリカに滞在するタツと日本にいるユメとの電話会話である。2人は夫婦である。断片の直前では、タツは「最大で15分しゃべれる」と電話ができる時間の長さを説明した。))

- 1 タツ： え:と:(0.9)なに?あっそっか:::haha,うん,別にあの:(0.9) 特に用事は
2 ないんだけど.
3 ユメ： うん
4 タツ： うん.¥こーやってただで電話(国際電話)かけれるもんだからね¥.
5 ユメ： ん:[::
6 タツ： [¥別に喜んでか[けてる.¥
7 ユメ： [>えっどういふものなの?<これは.
8 タツ： これはねえ::とねペンシルバニア大学::が:_

- 9 ユメ： うん
- 10 タツ： なんか(0.3)ネイティブスピーカー外国あの英語
- 11 以外の:[ノンネイティブスピーカーの(0.3)あの研究
- 12 ユメ： [うん
- 13 タツ： データを集めたいからて言うんで、
 → ((平板調))
- 14 →ユメ： へ:.....
- 15 タツ： で,(0.2)友達(.)が:こ-あの:コンピューターの(1.2)あのパソコン
- 16 通信でこんなのがあつて教えてくれた。
- 17 ユメ： うんうんうんあつそう..h[h じゃ話した内容なんでもいいわけ?別に[:.
- 18 タツ： [そう。 [そう、
- 19 タツ： なんでもいいの.日本語でしゃべれば[日本語のネイティブスピーカーが
- 20 ユメ： [あ:そう.
- 21 タツ： 日[本語
- 22 ユメ： [じゃ()くんじゃべろうかなんて hehe

タツは、1-6 行目において、「ただで電話かけれるもんだから」を挙げて「今電話している」理由を説明している。その説明が完結可能な点に達することが予測できる位置において、ユメは7行目でタツの発話と重なって、やや速いスピードで「えっどういものなの?」とターンを取得し、質問する。また、この質問は、「ただで電話かける」という説明を聞いたユメが、なぜ無料(ただ)で電話がかけられるかについて理由を問うもの、つまり、電話をかけるまでの経緯について説明を求めるものとして理解される。実際、タツもそのように理解を示しており、8-16 行目において、電話をかけるまでの経緯について説明している。

ここで、14 行目のユメの「へー」がどのように用いられるかに注目したい。まず、「へー」が産出される位置を確認する。「へー」が産出される直前の13 行目のタツの「研究データを集めたいからて言うんで」という発話は、文法的に完結していない上に、音調も発話末尾が完全に下がり切らず、まだ発話が続くように聞こえる。つまり、「へー」は話し手タツのTCUの「途中」に産出されていることが確認できる。その一方、タツは、「データを集めたいからて言うんで」を言った後に、1つの区切りを入れて、受け手に反応を示す機会を与えてい

る⁴。実際、受け手ユメはそのことを理解し、14行目で、平板調のイントネーションで発話される「へー」(図1)用いてタツの発話を受け止めている。

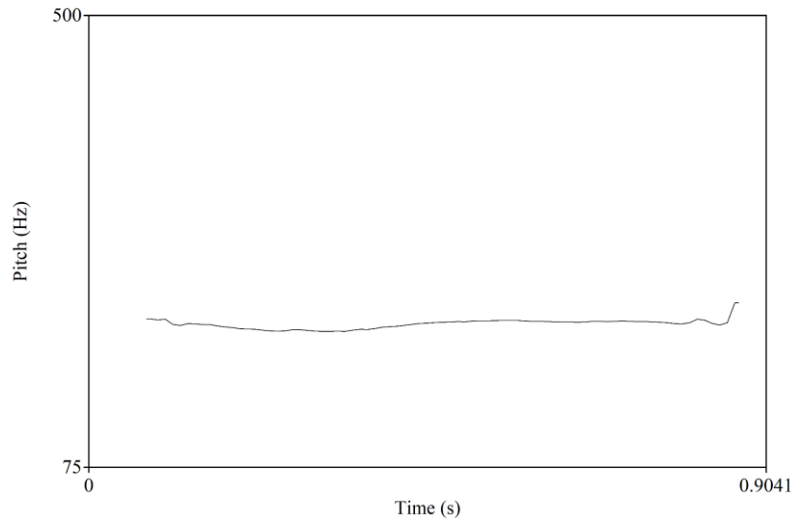


図1 断片(1)の14行目の「へー」のピッチ曲線

さて、ユメは「へー」を産出する前に、9,12行目においてそれぞれ「うん」という反応を用いてタツの発話を受け止めている。また、9,12行目の「うん」が用いられる位置というのも「へー」と同様にタツがTCUを産出している途中である。では、なぜユメは異なった反応を示すのだろうか。ユメの質問に対してタツは8行目から答え始める。そして、8行目において提供される「これはねえ::とねペンシルバニア大学が」という情報と、10,11行目において提供される「ネイティブスピーカー外国あの英語以外の:」という情報は、その後にくる「ノンネイティブスピーカーのあの研究データを集めたいからて言うんで」のための準備として聞こえる。それに対して、「ノンネイティブスピーカーの研究データを集めたい」という発話はニュースの核心的な部分を提示するものとして理解可能である。ユメはタツの答えを聞きながら敏感に反応を示し、8,10-11行目の情報を「うん」で、単に「情報を受け止めた」ことを示すが、「ノンネイティブスピーカーのあの研究データを集めたいからて言うんで」の発話を「へー」で、ニュースの核心的な情報としてを受け止めたことを標示し

⁴ 西阪(2008)では、このような、話し手が何らかの形で何らかの区切りを作ることで、受け手に反応を示す機会を与えるような場所を「反応機会場」と呼んでいる。本章で検討する「へー」の多くはこのような「反応機会場」が作られた後に産出されるものである。また、話し手によって「反応機会場」が作られていないにもかかわらず、話し手が何らかの発話を産出している最中に「へー」が用いられることもある。本章は、上記の2つの場合における「へー」を研究対象としている。

ていると考えられる。

また、ユメは「へー」を言った後、それ以上のことを産出していない。それはユメが、「へー」の反応を示す位置がまだ「話し手のTCUの途中である」ということをよく理解しているためだと考えられる。そして、そうすることによって、ユメは話し手にTCUの続きを産出してもらうように機会を与えている。実際、タツは、15行目で、「で」を用いて、明示的に前の話の続きを言うことを予告した(小出, 2008)うえで、TCUの続きを産出している。

このように、話し手のTCUの途中において、受け手は「へー」を用いて、ある特定の情報をニュース性のあることとして受け止めたことを標示することによって、話し手にTCUの続きを産出してもらうように機会を与えているといえる⁵。

以下の断片(2)からも同様のことが観察される。

(2)[C&K_パン_24:22](Kはあるデパートの飲食店でバイトしており、Cはコンビニでバイトしている。断片の前で、2人はバイト先からもらう食べ物について話している。その話の中で、Cは最近コンビニからもらう食品の廃棄物をたくさん食べているので、そろそろ「食中毒」が心配だと言った。それに対して、KはCに「あまり食べすぎないほうがいいよ」とアドバイスした。そのアドバイスに対して、Cは1行目で「まあ週二ぐらい」と食べる頻度を下げることがを応じる。また、4行目でコンビニからどのような食品をもらうかを「パンとか」と例として挙げた後、自ら「までも全部よくないか」とコンビニの食品の廃棄物への評価をしている。XパンおよびYパンはパンの種類である。))

- 1 C: だからまあ,(0.2)まあ週二ぐらい?
 2 K: うん
 3 (0.3)
 4 C: パンとか.[までも全部よくないか.コンビニのやつだ° と° .
 5 K: [° うんうん°
 6 K: なんかXパンはやばいていう[° んだよね° .
 7 C: [↑えっそうなん?
 8 K: うん

⁵ この意味で、「へー」の働きは、Schegloff(1982)が、「継続子(continuer)」と呼ぶものに近い。ただ、継続子は、順番交替が可能な場所で、あえて順番を取るのを控えるものである。それに対して、「へー」が産出される位置はそもそも順番交替が可能な場所ではないので、継続子ではないと考える。

- 9 (0.9)
- 10 C: え:なんで?
- 11 (0.3)
- 12 K: え:なんか(.)[前に:
- 13 C: [全部?あの学食パンまで?
- 14 (0.8)
- 15 C: やわからんけど, [¥>そんな食べねけど,[Xパン<hh¥.
- 16 K: [うん [なんかフワフワさせる
- 17 K: ための[::
- 18 C: [hhh(0.2)[¥↑そうなん,知らんかった::¥
- 19 K: [それが:
- 20 K: そう,なんか(0.7)てか,うちのお母さんがもう X パン,<X パン>
- 21 もう絶対食うなみたいな人で;
- (上昇調)
- 22 →C: へ.....
- 23 K: なんか食べるならせめて Y パンとか;
- 24 (0.2)
- 25 C: うん:
- 26 K: がいいよって言ってて;でなんかその:ま自分で買うようになって
- 27 から[別に気にせず食べれたんだけど[::(0.2)こないだなんか(.)でも
- 28 C: [う:ん [う:ん
- 29 K: ネットだから,どこまでほんとかわかんないけど[::(0.6)でもなんかほんと
- 30 C: [うん
- 31 K: X パンのその(0.2)¥ふんわり成分¥みたいなものが[::(0.5)なんか
- 32 C: [° うん°
- 33 K: その(0.4)¥>中国<でも禁止されてるみたいな¥

食品の廃棄物を食べるのがよくないという話が終わった後、Kは6行目で「なんか X パンはやばいていうんだよね」と新たな話題を提供する⁶。その話題提供に対して、Cは声を

⁶ Kが6行目で「X パン」という話題を提供しているのは、Cが4行目で「パン」に言及したこ

上げて「えっそうなん?」と驚きを示している(7行目)。Cの驚きの反応に対して、Kは8行目で「うん」と受け止めたことを示すが、「Xパンがやばい」ことに関して特に情報を提供していない。そのため、0.9秒の間合いが生じた(9行目)後、Cは10行目で「え:なんで?」と明示的に「Xパンがやばい」ことの理由について問う。その質問に対して、Kは12行目で「え:なんか」と答え始めようとする。しかし、そこで、Cは「全部?学食パンまで?」とKの発話と重なって、新たな質問をする。Kはその質問に特に反応を示さないため、14行目で0.8秒の間合いが生じる。そのような状況の中で、Cは15行目で「やわからんけど、そんな食べねけど」と自ら質問をキャンセルする。

16行目でKは「なんかフワフワさせるための⁷」と言い、なぜXパンが「やばい」かの説明を再開しようとする⁷。しかし、そこでCが18行目で声を上げて「そうなん,知らなかった:」と驚きを示しているため、Kの説明がいったん中断される。Kは20行目でCの驚きの反応に対して「そう」と端的に肯定したうえで、「なんか」と言い、この後何らかの説明を行うことを予告する。そして、0.7秒の間合いの後、Kは修復マーカ―「てか」を用いて、これまでの発話内容と異なることを導入することを予告する(若松・細田, 2003)。実際、Kは「てか」を言った後に、16行目で言った「フワフワさせるための」の内容に関連することではなく、「うちのお母さん」のことを持ち出している。そして、Kの「もう絶対食うなみたいな人で:」の発話の後に、Cは上昇調のイントネーションで発話される「へー」(図2)を用いて反応を示している。ここも、Kの発話は文法的に完結していないうえに、発話末尾が完全に下がり切っていないため、まだ発話が続くように聞こえる。つまり、22行目の「へー」も話し手のTCUの途中に用いられていることが確認できる。

とと関連していると考えられる。

⁷ 実際、19行目でKは「それが:」と17行目の続きを産出している。

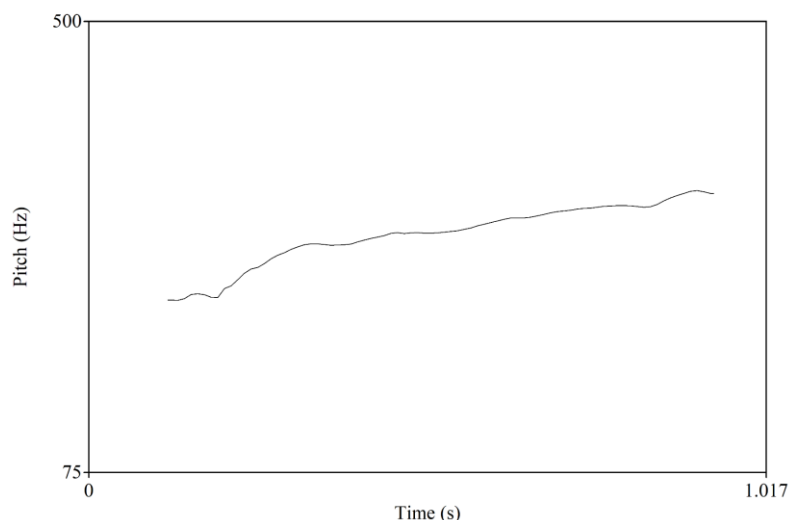


図2 断片(2)の22行目の「へー」のピッチ曲線

ここで注目したいのは、Kの20-21行目の発話の組み立て方である。KはXパンを言った後に、もう一度ゆっくりとしたスピードで「Xパン」を言うことを通して、「Xパン」のことを際立たせている。そのうえで、Kは「もう絶対食うなみたいな人で:」のように、「絶対」という程度副詞を用いて、「Xパン」の「やばさ」を際立たせている。Kはこのように発話を組み立て、自分が6行目で報告した「Xパンはやばい」ことを際立たせて、「今ここ」で語っていることにニュース性があることを強調している。また、断片(1)と同様に、話し手は「もう絶対食うなみたいな人で:」を言った後に、区切りを入れて受け手に反応を示す機会を与えている。CはKが強調していることを理解し、22行目で上昇調の「へー」を用いて、Kの発話に対してニュース性のある情報を受け止めたことを標示しているといえる。さらに、発話の音声から、Cがこの上昇調の「へー」を用いることで、驚きのスタンスも表していることが読み取れる。それを裏付けるのは、Cの身体的ふるまいである。CはKの21行目の発話が産出されている途中に、Kを見つめて、ただ聞いているようにふるまっているが、「へー」を産出すると同時に、目を大きくして、上半身も少し後退している。このようなふるまいの変化から、Cは「へー」を産出するときに、驚きのスタンスも表していると認識することができる。このように、話者は「へー」を用いて、ある情報を取りわけニュース性のあることとして受け止めたことを標示すると同時に、「へー」の音調を操作することによって、驚きのスタンスを表すことも可能である。

また、断片(1)と同様に、Cは「へー」を言った後に何も産出せず、KにTCUの続きを言うよう機会を与えている。実際、Kが23行目で「なんか食べるならせめてYパンとか」と

21 行目の発話を続けている。つまり、この断片においても、話者が「へー」を用いて、話し手の特定の情報をニュース性のあることとして受け止めたことを標示することによって、話し手にTCUの続きを産出してもらうように機会を与えている。

以上、話し手のTCUの途中で、受け手によって用いられる単独の「へー」について分析した。「へー」の産出者は、「へーすごい」など「へー」に続けて他の表現を用いることもしばしばある。では、「へー」と他の言語要素と一緒に使用される場合、「へー」はどのように用いられ、また「へー」の使用によって相互行為の連鎖がどのように影響を受けるのだろうか。次節では、その問題を取り上げる。

3.3 「へー」とターンの取得とのかかわり

本節では、「へー」と他の言語要素と一緒に使用される事例を検討する。分析を通して、話し手がTCUを産出している途中で受け手によって用いられる「へー」は、ターンの取得とかかわっていることがわかった。以下ではその詳細を見ていく。

3.3.1 「へー」と話し手のTCUの途中で起こる「一時的」ターン交替

3.2節では、受け手が単独の「へー」を産出することによって、話し手にTCUの続きを産出してもらうように機会を与えると論じた。それに対して、話し手がTCUを産出している途中で、受け手が「へー」を他の言語要素と一緒に用いることによって、「一時的」なターン交替を可能にすることができる。以下、実際の会話例を用いて説明していきたい。まず、断片(3)を見てみよう。

(3)[M&O_工学コース_11:46]((MとOは大学の3年生である。断片の前では、2人はOの「ゼミ選考」について話した。その話の中で、Oは「自分が入ろうとする工学コースの人数が少ない」ことを言及した。そのことに対して、MはOに「なぜ少ないのか」と質問した。Oはその質問に対して、Oは、まず「数学が苦手の意識を持つ人が多いから、工学という選択肢を排除する」と説明し、続けて「すごい面白いのに、やってること面白いのに、なんかやっぱりなんだかんだ結構計算するから、そこでもう無理だみたいな感じで、選択肢排除する人がすごい多い」と不満げな様子を見せながら説明した。その説明を聞いたMは1行目で「何をするの?」と質問する。))

1 M: 何をするの?

2 (0.5)

第3章 話し手のTCUの途中に用いられる受け手の「へー」

- 3 O : °でも° (0.3)そうほんとなんか研究室によってさまざますぎて:
4 (0.5)
- 5 O : [一言で説明すんのいつも大変で,なんか .hh (0.2)工学コースって
6 M : [は::::
- 7 O : なんか環境工学ってなに?みたいなのはある.
8 (0.5)
- 9 O : えっと::he.hh
(約17秒、15行の会話内容省略。Oがなかなか答えを産出しないため、Mは答えの候補特に「環境」に関連する「ダム?」と「護岸工事」を挙げる。その挙げられた候補に対してOがそれぞれ受け止めた反応を示す。)
- 25 O : うん(.)流域(1.0)保全とかわかんない。¥ちょっとそこらへん。↑自分そっち
26 じゃないん[だけど,¥
- 27 M : [あっ[↑どこにいるの?何をするの?
28 O : [hhh
- 29 O : えっと自分食品系¥なんだけど¥
- 30 M : .hh あ::[::::
- 31 O : [もうなんか食品工学で,()食品何か機能性食品の
32 O : 開発とかだと化学コースなのね.
33 (0.2)
- 34 M : °は° ↑ほ::[::::
- 35 O : [あと生物コースもあるかな.
36 M はいはいはいはい.
37 O : °でも° 工学はそういうんじゃないくて:(.)プロセスとかどうし-どういう
38 ふうに冷凍したら:,
- 39 M : うん
40 (0.2)
- 41 O : なんかこう(0.2)あんまりそういう栄養損なわずに
42 できるかとか[どう
→ ((平板調))
- 43 →M : [↑へ::面白そ::[::]
44 O : [ね::] どういうふうにその米粉とかもこまっ(0.2)

ここで、「へ::面白そ::」という反応が産出されるタイミングに注目したい。断片(1)(2)では、「へー」が、話し手に反応を示す機会が与えられた後に用いられている。それに対して、この断片では、話し手 O が「あんまりそういう栄養損なわずにできるかとか」を言った後に、特に区切りを入れずに、「どう」とTCUの続きを産出しようとしている。つまり、ここでは、話し手がTCUを産出している最中に、Mが「へ::面白そ::」と反応を差しはさんでいるのである。このようなやり方を通して、Oの発話が「あんまりそういう栄養損なわずにできるかとか」に至った時点、Mにとって既にニュース性のある情報が提示されたことがより強調される。

また、ここで、Mは、「へ::面白そ::」という発話を通して、明示的に「評価」という行為を行っている。断片(1)(2)では、「へー」が産出された後、話し手は、TCUの続きを産出している。ここでは、話し手Oは受け手であるMに「へ::面白そ::」という反応をされた後、すぐにTCUの続きを産出するのではなく、「ね::」と言って、Mの評価に対して明示的に「同意」を示している(Pomerantz, 1984)⁸。このように、この断片において、話し手がTCUを産出している途中で、「評価」－「同意」という行為連鎖が生じており、一時的な「ターン交替」が起こっているのである。

では、なぜOがMの評価に明示的に同意を示すのだろうか。断片についての背景説明にあったように、Oは工学コースを「面白い」、そして「やっていることが面白い」ことをMに伝えている。Mの「面白そう::」という評価は、まさにOが伝えようとすることである。Oが「ね::」と同意を示すことは、自分が伝えようとするものが相手に理解されたことを示していると考えられる。また、Goodwin(1986b)においても、話し手がTCUを産出している途中で、受け手が「評価」を行い、話し手がその「評価」に対して同意を示す現象を取り上げている。Goodwin(1986b: 211)によれば、話し手は、そのように同意を示すことによって、その「評価」を、割り込みとしてではなく、その後に生み出す自身の行為の土台として利用可能な1つの出来事として取り扱っているのである。ここも、OはMの「面白そう::」という評価を、自分の44行目以降の行為展開のための土台として利用していると言える。49,51行目において、Oは「うん面白いんだよ」と「面白い」ことを明示的に主張したうえで、「だからなんかみんなもっと興味持ったらいいのと思うんだけど」と、工学コースを選択する人数が少ないことに対する意見を述べている。Oがこのように行為を展開してい

⁸ また、ここで、OがMを見つめて人差し指でMを指しながら「ね::」を言っていることから、Mの評価に明示的に同意を示していることがわかる。

るのは、Mの「面白そ…」という評価を土台として、利用していると考えられる。

最後に強調しておきたいのは、このような「ターン交替」はあくまでも「一時的」に起こっていることである。というのは、「へー」の話者も、「へー」の受け手(ここでは話し手のこと)も、「評価」－「同意」という行為連鎖が行われる位置というのを、「話し手のTCUの途中」であることを志向しているからである。実際、「へー」の話者Mは「へ…面白そ…」を言った後に、それ以上のことを展開していない。また、話し手Oは44行目で「ね…」と同意を示した後、すぐに42行目で中断された「どう」を繰り返してTCUの続きを産出することで、元の連鎖の軌道に戻している。

以下の断片(4)においても、話し手がTCUを産出している途中にもかかわらず、受け手が「へー」と他の言語要素と一緒に用いることによって、「一時的」にターン交替の現象を引き起こしていることが観察される。

(4)[callhome_2074_8:09]((アメリカにいるK(カズカ)と日本にいるM(ムツコ)との電話会話である。この会話をする前に、Mは手紙で大学に受かったことをKに報告した。会話の全体的内容から、Mは大学に入って、将来的に「先生になる」ということが読み取れる。断片の前、MはKがきつといい先生になると言った後、なぜそう思っているか理由を説明した。その話が終わった後に、次の断片の会話が始まる。断片に出ている「おお娘よ」という本は「先生になる」ことと関連しているため、Kは1行目で本的话题を提供していると思われる。))

1 K: あの…本でさ;あれ読んだ?

2 M: ん?

3 K: おお娘よ.

4 (0.5)

5 K: え:っなんだっけ.娘よなんとかっていうのと,.hh おかあ(.)

6 えっとね[三重県[の人で;

7 M: [うん [うん

8 M: ん…

9 K: 三重県の人で;え:と…あのう高校の先生なんだけど;こう-[あのう国語の

10 M: [うん

11 K: 先生なのね.

12 (0.2)

Kは1-3行目において、「おお娘よ」という本の話題を提供し、Mに読んだかどうかを確認する。その確認に対して、Mが特に何も反応を示さない(4行目で0.5秒の間合い)ため、Kは5行目から自ら本の詳細、特に本の著者について語り始める。そして、Kによって本の著者の出身地、職業について詳細に語られた後、Mは13行目で「え:カズカさんよく知ってるね:」と評価する。

Kは14行目で「その本ね」と言い、これからも本のことについて語ることを予告したうえで、20行目まで本の著者と自分が勤めている日本語学校の校長との関係を報告している。その報告に対して、Mは22行目で「あほんとに::?」を用いて驚きの反応を示す。その反応に対して、Kは23行目で「うん」と承認を与える。そして、24行目でMは「すごいつながり:」とKが報告した本の著者とKが勤めている日本語学校の校長先生との関係について評価をしている。

25行目でKはまずMの24行目の評価を「うん」と受け止めたことを示した後、続けてやや速いスピードで「それで」と言い、ターンを維持したうえで、「その人ねもうすぐね、あのアメリカにも来るんだけどさ」とこれまで語った本の著者がアメリカに来ることを報告している。また、この報告の後、Kは区切りを入れて、Mに反応を示す機会を与えている。実際、0.1秒の間合いの後、Mは「へ::そうなんだ」と反応を示している。

上に述べたように、Kは14行目から20行目まで、本の著者と自分が勤めている日本語学校の校長との関係をMに伝えている。このような中で、「今ここ」でKによって報告される「その人ねもうすぐね、あのアメリカにも来るんだけどさ」という情報は、Mにとって「ニュース性のある」こととして理解されるだろう。そのため、Mは27行目で「へ::」を用いてKの報告をニュース性のある情報として受け止めたことを標示していると考えられる。また、ここで、Mは「へ::」だけではなく、「へ::」の後にすぐ「そうなんだ」を用いて、Kが報告したことを「今ここで初めて知った」情報として受け止めたことを示している。

Mの「へ::そうなんだ」という反応に対して、Kは28行目でまず「うん」とMの「へ::そうなんだ」という反応を受け止め、「来年ね」と本の著者がアメリカに来る理由を述べている⁹。Kが「うん」を用いて、Mの「へ::そうなんだ」という反応を受け止めたことを示すのは、KがMの「へ::そうなんだ」という発話を実質的なターンとして扱っているからだと考えられる。このように、この断片においても、話し手のTCUの途中で、受け手が「へー」

⁹ しかし、Kは「来年ね」を言った後に、25行目の報告の続きではなく、「あの::友達だから遊びに来るんだけどさ」と言い、25行目の報告をやり直している。この発話の分析については再度3.3.2節で行う。

と他の言語要素と一緒に使用することによって、「一時的に」ターン交替を引き起こしていることが観察される。

しかし、注意すべきなのは、断片(3)(4)において、「へー」の話者が、「へー」の最後の母音をあまり長く引き延ばさずに¹⁰、すぐに次の発話(「面白そう…」と「そうなんだ」)を発しているということである。その理由として考えられるのは、「へー」の産出の仕方によっては、「へー」の受け手(話し手)が「へー」という発話をどう理解するかが異なる可能性があるということである。3.2 節で述べたように、受け手が単独の「へー」を用いることによって、話し手に TCU の続きを産出してもらうように機会を与えている。また、3.2 節でみた断片(1)(2)における「へー」はいずれも母音が長く引き延ばされている¹¹。このように、「へー」の母音が長く引き延ばされると、「へー」の受け手(話し手)として、TCU の続きを産出してよいという理解が生まれ、実際、断片(1)(2)のように、すぐに TCU の続きを産出してしまいう可能性がある。断片(3)(4)の「へー」の話者は、「へー」の母音をあまり長く引き延ばさずに、すぐに次の発話を産出することを通して、話し手がすぐに TCU の続きを産出することを防いでいると考えられる。そして、そうすることによって、上述したように、「へー」の話者(受け手)は「一時的に」ターンを取得し、ターン交替を引き起こすことを可能にしている。

これまでの分析をまとめると、話し手が TCU を産出している途中で、受け手は、「へー」の母音の長さを操作し、他の言語要素と一緒に使用することによって、「一時的」にターン交替を引き起こすことを可能にしているといえる。

では、話し手が TCU の途中において、母音が長く引き延ばされている「へー」と他の言語要素と一緒に使用される場合、会話参加者はどのようにふるまうのだろうか。次節では、その問題を取り上げる。

3.3.2 「へー」と話し手の TCU の途中で起こるターンの競合

まず、断片(5)を見てみよう。断片(5)は断片(4)の再掲である。ここで、注目したいのは 30 行目の M の発話である。

¹⁰ 断片(3)の 43 行目の「へー」と断片(4)の 27 行目の「へー」はいずれも 0.3 秒で発話されている。

¹¹ 断片(1)の 14 行目の「へー」は 0.8 秒で発話され、断片(2)の 22 行目の「へー」は 0.9 秒で発話されている。

(5)[callhome_2074_8:09]【断片(4)再掲】

- 1 K: あの::本でさ:,あれ読んだ?
- 2 M: ん?
- 3 K: おお娘よ.
- 4 (0.5)
- 5 K: え:っなんだっけ.娘よなんとかっていうのと, .hh おかあ(.)
- 6 えっとね[三重県[の人で;
- 7 M: [うん [うん
- 8 M: ん::
- 9 K: 三重県の人で:,え:と::あのう高校の先生なんだけど:,こう-[あのう国語の
- 10 M: [うん
- 11 K: 先生なのね.
- 12 (0.2)
- 13 M: .hh え:カズカさんよく知ってるね::.
- 14 K: その本ね,[うちのこう-うちのね,あの日本語学校に来てる人のね,
- 15 M: [うん
- 16 M: うん::
- 17 K: あの:(.)校長先生来てんだけど,
- 18 (.)
- 19 M: うん[うん
- 20 K: [その人のね,あの:::(.)>友達<なの.
- 21 (0.3)
- 22 M: あ↑ほんとに::?
- 23 K: うん.
- 24 M: すごいつながり:.
- 25 K: うん.>それで<その人ねもうすぐね,あのアメリカにも来るんだけどさ,
- 26 (.)
- ((平板調))
- 27 M: ↑へ:::そうなん[だ.
- 28 K: [う:ん.来年ね,あの::友達だから遊びに来るんだけどさ,
- 29 (.)

- ((平板調))
- 30 →M : へ:.....[:>すごい<.]
- 31 K : [で:あの]本::あのう送ってくれてさ,みんな[なで読んでたんだけどさ,
- 32 M : [うん
- 33 (0.3)
- 34 K : [や:なかなかいいよ.hehehehe[hh
- 35 M : [°ん° [え:私もなんかテレビとかよくやってて:
- 36 K : う:ん
- 37 M : 読みたいな:とかも思っ[てた.
- 38 K : [う:ん
- 39 (.)
- 40 K : よん-読んできなよあれ.

Kは28行目で「来年ね」と言うことで、25行目で報告した本の著者がアメリカに来る話の続きを言おうとしている。しかし、Kはその後、25行目の続きではなく、「あの::友達だから遊びに来るんだけどさ」と、25行目の報告をもう一回やり直している。そして、このやり直された報告においては、Kが「友達だから遊びに来る」という情報を新たに付加している。そうすることによって、Kは、本の著者がアメリカに来ることを報告しているだけではなく、「友達だから遊びに来る」ということで、本の著者と個人的なつながりがあることを示唆している。また、3.3.1節で述べたように、Mは本の著者がアメリカに来るという情報を既にニュース性のあるものとして受け止めている(27行目)。本の著者と個人的なつながりがあるという情報は、Mにとってさらにニュース性の高いものとして理解されるだろう。実際、Mは30行目で、「へー」を用いてKの報告をニュース性のある情報として受け止めたことを標示したうえで「すごい」と言い、27行目の「そうなんだ」と比べてより明確に評価をしている¹²。

ここで、注目したいのは「へー」が産出された後の話し手(「へー」の受け手)Kの反応である。KはMの母音が長く引き延ばされた「へー」の後半と重なって、31行目で継続標識「で:」を用いてこの後前の話の続きを産出することを予告したうえで、実際にTCUの続き

¹² Kの発話と重なっているためMはやや速いスピードで発話しているが、これはその重なりを解消するものと考えられる(Schegloff, 2000)。

を産出している。つまり、KはMの発話がまだ終わっていないにもかかわらず、自身の発話の続きを産出しているのである。そのため、一時、MとKの間でターンが競合する現象が起こっているように見える。

では、なぜMの発話がまだ続いているにもかかわらず、KはTCUの続きを産出しているのだろうか。上で見たように、TCU産出の途中で受け手が「へー」を単独で産出した場合、「へー」が完結した時点で、話し手(「へー」の受け手)はTCUの続きを再開する。また、このような単独で用いられる「へー」は平板調のイントネーションで発話され、かつ母音が長く引き延ばされることを見た。つまり、30行目の長く引き延ばされている「へー」を聞いたKは、これを単独で使用される「へー」とみなして、「へー」の母音がまだ引き延ばされている途中にもかかわらず、TCUの続きを産出したものと考えられる。また、このことから、Kにとって、K自身が28行目で述べたことは単独の「へー」で受け止められれば十分であると理解していることもわかる。そのため、Mの「すごい」という評価がなされた後、Kはわざわざ立ち戻ってその評価に対する反応を示すことがなく、本の著者に関する話を続けている。

最後に、もう1つの事例を見てみたい。

(6) [A&L_就職_30:58]((AとLは就職活動を行っている。断片の直前では、Aは自身の就職活動についての悩みをLに報告した。その話が終わった後に断片の会話が始まる。1行目の「試験」というのは、Lが受験する予定の「教採」(教員採用試験)のことである。))

- 1 A: 試験いつだっけ_
 2 (0.2)
 3 L: 7月の::(0.4)C県は19日[で,(0.5)土曜日で>三週目<の土曜日で,D県が(0.5)
 4 4週目の
 ((C県:Lの故郷))
 5 (0.2)
 6 A: うん
 7 L: 土曜日.
 8 (2.0)
 9 A: [どっちかな::_
 10 L: [()
 11 (0.4)

- 12 L: ()でも一回帰ってこいと親うるさいから、
 13 (0.8)
 14 L: それだけは_(0.3)譲れないみたいな。
 15 A: うんうん[::
 16 L: [お父さんが。
 17 (1.8)
 18 A: それはどうなんだろうね。
 19 (0.6)
 20 L: °ん:::°
 21 (0.4)
 22 A: その:::(0.4)お父さんが言うから(1.0)<そういう>(1.2)
 23 選択をするのか[:
 24 L: [°ん:::°
 25 (0.5)
 26 A: 自分がお父さんといたいから:(0.3)C県に行くのか。
 27 L: ん:::°
 28 (0.8)
 29 L: でも親の:::(0.7)あんまりわたしがこれこれしたいって言ったこと
 30 今まで親が(.)これしなさいみたいななかったんですよ。
 31 A: ん:::
 32 L: なんか私が大学は:(0.3)〇〇がいいって言ったら,(0.2)
 33 先生に反対されてたんですけど(0.6)それでもお父さんが
 34 先生頼み込んでくれて受けさせてくれた[から、
 ((〇〇:Lが通っている大学名))
- ((平板調))
- 35 A: [へ:::°:[↑すご:::い。
 36 L: [でも::
 ((Lは「でも」を言う前にうなずいている))
- 37 (0.3)
 38 L: この教採に関しては:::(0.3)一回やっぱC県で働いてちゃんと
 39 (1.1)

- 40 A: ん…
 41 (0.2)
 42 L: 恩返しをしなさいみたいな
 43 (0.3)
 44 A: ふんふんふん.
 45 (2.3)
 46 A: なるほど.
 47 L: うん(0.3)だったので,

Aの1行目の「試験いつだっけ」という質問に対して、Lは3-7行目で7月に受験する予定の「C県」(Lの出身県)の試験と「D県」の試験がそれぞれいつ行われるかについて詳細に答えている。その答えを聞いたAは、9行目で「どっちかな:」と、教採の試験を受けた後のLがどちらに行くかについて、自問する形でLの考えを引き出そうとする。それに対して、Lは12-16行目において、父親のことを挙げ、故郷に帰る可能性を提示している。それを聞いたAは18行目で、「それはどうなんだろうね」と言い、Lが父親を理由にして帰ろうとすることに対して、疑問を提示している。その疑問に対して、Lは特に具体的に答えず、20行目で小さい声で「ん…:」と言っている。そして、Aは22-26行目で、Lが故郷に帰る理由について2つの可能性(「お父さんが言うから」と、「自分がお父さんといたいから」)を挙げて追求する。

それに対して、Lは29-30行目でまず端的に「これまで親がこれしなさいみたいななかったんですよ」と答え、Aが挙げた「お父さんが言うから」という可能性を否定する。そして、32-34行目で、Lは自分の大学受験のことについて「先生に反対されたが、お父さんが頼み込んでくれた」というエピソードを挙げることを通して、父親が自身の意図に反して故郷に帰ることを強制しているわけではないことを示唆する。

Lが「お父さんが言うから」故郷に帰ろうとする可能性に対して疑問を提示した(18行目)Aにとって、32-34行目で挙げられているエピソードは、驚くべきこととして受け止められるだろう。そのため、Aは35行目で「へー」を用いてLが提供した情報を意外性のあるもの、つまりニュース性のあるものとして受け止めたことを標示している。また、Aは「へー」を言った後、すぐに「すご:い」と、Lのお父さんを評価している。この評価の発話は、AがLの語ったエピソードを驚くべきことであったと受け止めていると裏付けている。

では、Aの「へ……:すご:い」という反応を、Lはどのように受け止めているのだろうか。まず観察できるのは、Lが「へー」が引き延ばされている途中で、うなずきを用いて反応を示している。そうすることによって、Lは「へー」という反応を特に問題のないものとして扱っており、それを承認している。そして、Aが「へー」を産出し終わったと認識可能な位置において、Lは、TCUの続きを産出してよいと理解し、「でも:」を用いて、TCUの続きを実際に産出している。そのため、Lの「でも:」という発話とAの「すご:い」という発話と重なる状況となっている。そのような状況の中で、Aは声を上げ、そして、拍手をしながら、「すご:い」を産出することを通して、明示的にLのお父さんへの評価を行っている。このようにして、Aはここで確実にターンを取得している。Lも、Aがターンを取得しようとすることを理解し、「でも:」で始めようとするのをいったん中止にしている。そして、37行目で0.3秒の間合いが生じていることから、Aがこれ以上反応を示さないことは公然化される。それを踏まえて、Lは38行目で「この教授に関しては…:」と言い、36行目で中止にした話の続きを言っている。

ここで、Aが明示的に評価を行っているにもかかわらず、Lは特にそれに反応を示さず、34行目で中断した自分の発話の続きを産出していることについて考察したい。上に述べたように、Aは18行目で、Lが父親を理由にして故郷へ帰ることに対して疑問を提示している。そのことは、AがLの父親に対する否定的な評価を含むものとして理解可能である。その後、Lが自身の大学受験のエピソードを挙げていることは、Aが示している父親への「否定的評価」に反論しているように聞こえる。そのような状況の中で、Aはなるべく早い位置で、Lがまだ発話を産出しているにも関わらず、「へ……:すご:い」というポジティブな評価を産出することによって、Lの父親に対して自分が否定的な評価をしているわけではないことを明確に示していると思われる。しかし、もしそこで、LがAのポジティブな評価に同調する反応を示したら、Aの提示した疑問に否定的な評価が含まれていたことを「承認」することとなる。そして、それによって、Aの提示した疑問に否定的な評価が含まれていたことがかえって公然化されてしまう。そのようなことを避けるために、LはあえてAの評価に対して何も反応を示さず自分の発話の続きを産出していると考えられる。

以上分析したように、話し手がTCUを産出している途中で、受け手がイントネーションを長く引き延ばす「へー」を他の言語要素と一緒に使用することによって、一時的にターンを競合する現象を引き起こしても、必ずしも「へー」の受け手がそれに対して反応を示すことによって生じる一時的なターン交替に至るわけではない。それは、「へー」の話者がどのように「へー」を産出するかということと、「へー」の受け手がどのように「へー」を理解

しているかと深くかかわっている。「へー」の話者が「へー」の母音を長く引き延ばした場合、「へー」の後に他の言語要素が続いたとしても、「へー」の受け手(元の「話し手」)はそれを単独で生じる「へー」と理解し、自身の発話を続けることに志向する。

3.4 まとめ

本章では、話し手のTCUの途中に受け手によって用いられる「へー」について検討した。本章では、まず、「へー」が単独で使用される場合を検討した。分析を通して、話者は「へー」を用いて、話し手の特定の情報をニュース性のあることとして捉えたことを標示することによって、話し手にTCUの続きを産出してもらうように機会を与えていることがわかった(3.2節)。次に、「へー」を他の言語要素と一緒に使用する場合も検討した。話し手がTCUを産出している途中に、受け手は、「へー」を他の言語要素と一緒に使用することによって、「一時的」にターン交替を引き起こすことを可能にする場合がある(3.3.1節)一方、ターン交替までは引き起こさない場合もある(3.3.2節)と論じた。いずれの場合においても、「へー」の話者がどのように「へー」を産出するか、そして「へー」の受け手がどのように「へー」を理解するかによって、相互行為の連鎖の展開が異なっていることを示した。

次章では、基本連鎖の第二部分に用いられる「へー」を検討していく。

第4章 基本連鎖の第二部分に用いられる「へー」

4.1 はじめに

本章では、基本連鎖の第二部分に用いられる「へー」を取り上げ、この位置に用いられる「へー」の相互行為上の働きを明らかにする。

第2章で述べたように、「基本連鎖」には「依頼－受諾/拒否」、「質問－応答」、「挨拶－挨拶」などといった様々なタイプの連鎖が含まれている。本章で検討する「基本連鎖」は以下のようなものである。第一部分で、第一部分の産出者は自ら何らかの事柄に関する情報(話者自身の経験、他の人に聞いた情報など)をニュースとして報告し、そして、第二部分で、受け手はその報告されたニュースを受け止める。つまり、「ニュースの報告－ニュースの受け取り」という連鎖である。また、本章では便宜上、第一部分の産出者、すなわちニュースを報告する話者を「報告者」、第二部分の産出者、すなわちニュースを受け止める話者を「受け手」と呼ぶ。

「へー」がニュースを受け止めたことを示す標識である(news receipt)ことは先行研究の中で既に指摘されている(Iwasaki, 1997; Hayashi, 2001; 富樫, 2005; Mori, 2006 など)。しかし、これらの先行研究では、「へー」がどのようなニュースに対して用いられるかについて特に記述されていない。また、日本語会話で、第一部分で何らかのニュースが報告され、第二部分でそれを受け止める際、「へー」以外にも「あ本当」「あそう」「ふーん」などの言語形式を用いて受け止めることも観察される。ここから、「へー」が用いられる場合と他の言語形式が用いられる場合とでどのように異なるかという疑問が生じる。

そこで、本章では、「へー」がどのようなニュースを受け止めた際に用いられるかを分析することで、ニュースが報告された次のターンに用いられる「へー」の相互行為上の働きを明らかにする。また、「へー」の相互行為上の働きを詳細に理解するために、基本連鎖の第二部分に用いられる他の言語形式として、特に「ふーん」を取り上げ、比較を試みる¹。さらに、「へー」の相互行為上の働きを明らかにしたうえで、第二部分において、「へー」の産

¹ 「ふーん」を取り上げて「へー」と比較するのは、「ふーん」の分析をするためではなく、あくまでも「へー」の働きをより詳細に理解するためである。また、より妥当な記述のため、下記の分析の中で、他の言語形式、例えば、「あ本当」、「あそう」などが用いられている場合と「へー」とどのように異なるかについても分析する。

出によって相互行為的にどのような機会が作り出されるか検討する。

4.2 基本連鎖の第二部分に用いられる「へー」の相互行為上の働き

本節では、まず、2つの断片の分析を通して、基本連鎖の第二部分に用いられる「へー」の相互行為上の働きを論じる(4.2.1節)。次に、基本連鎖の第二部分に用いられる「ふーん」と「へー」を比較することで、4.2.1節で論じた「へー」の相互行為上の働きをより詳細に理解する(4.2.2節)。

4.2.1 報告者のニュース性を強調するスタンスに同調を示す「へー」

Mori(2006)では、「へー」は単にニュースを受け止めたことを標示しているだけでなく、「へー」を用いることによって話者のスタンスあるいは評価も示されると指摘されている。しかし、Mori(2006)では、「へー」によって具体的にどのようなスタンスあるいは評価が示されるかについては詳細に記述されていない²。そこで本章では、Mori(2006)の指摘を踏まえ、受け手は、「へー」を用いることで、ニュースを受け止めたことを示すだけでなく、報告者が示したニュース性を強調するスタンスに対して、同調を示していることを明らかにする。以下では、実際の会話データを用いてこの主張を検証していく。まず、断片(1)を見てみよう。

(1)[callhome_0862_1:09] ((日本に在住する母親(マチ)とアメリカに在住する娘(ハナ)の間の電話会話である。))

- 1 ハナ： みんな元気?
- 2 マチ： うん.おかげさんで元気.
- 3 ハナ： うん.[暑い?
- 4 マチ： [>お母さんだって今<
- 5 (0.2)
- 6 マチ： ん?
- 7 ハナ： 暑い[:?
- 8 マチ： [>あ:つい暑い暑い暑い<.もう 40 度近いよみんな.

² Mori(2006:1181)は、話者は、特定のイントネーションの特徴を持つ「へー」(徐々に上昇し、長く引き延ばされているもの)を用いることによって、ニュースに対する「感心、驚き、懐疑」を表していると記述している。

- 9 ハナ： ↑ほんと::_[(同じだ)ねじゃ。
 10 マチ： [うん
 11 (0.2)
 12 マチ： え?
 13 (.)
 14 ハナ： 同じだね。
 15 マチ： おんな->今でもハアちゃんのところ<暑い?
 16 (0.2)
 17 ハナ： 今日とね:明[日は涼しくなるんだって。
 18 マチ： [うん
 19 (0.2)
 20 マチ： あっ↑そ:う。
 21 ハナ： うん
 22 マチ： なんかヨーロッパも暑いって話だよ.フランスでなん-[どっかなんか.]
 23 ハナ： [あほんと:]::_
 24 マチ： >すごい<暑いんだって。
 → (緩やかな上昇調)
 25 →ハナ： へ:.....[:
 26 マチ： [うん.
 27 (0.3)
 28 ハナ： すごい涼しかったんだよ.ろく-5月とか-あっ6月3日。
 29 (0.7)
 30 ハナ： [ぐらい。
 31 マチ： [あ↑そ::う。
 32 ハナ： うん.

ハナは家族の近況(1行目)を聞いた後、3行目で「暑い?」と天気についての質問をすることによって、新たな話題を提供している。マチはハナの質問に対して、8行目で「あ:つい暑い暑い暑い.もう40度近いよみんな。」と、「暑い」ことを強調しながら答えている。この答えをハナは9行目で「ほんと::」と、新たな情報として受け止めた後、「(同じだ)ねじゃ」とマチの答えを踏まえたうえで確認を要請する。しかし、ハナが「(同じだね)」と発すると同

時に、マチはハナの「ほんと∴」に対して「うん」と応答しており（10行目）、この応答はハナの発話と重なっている。そのため、マチはハナの発話を正確に聞き取れておらず、12行目で「え?」と修復を開始する。ハナはマチの修復開始を聞き取りの問題として扱い、14行目でもう一度自身の9行目の「同じだね」を繰り返すことで、修復を行う。また、「ね」をつけることによって、マチから「協調」を引き出そうとしている(森田, 2008)。それに対して、マチは15行目で、ハナが用いた「同じ」という言葉を繰り返そうとしているように見える。しかし、それを「おんな」まで言って中断し、やや早いスピードで「今でもハアちゃんのとこ暑い?」と新たな質問をする。ハナはその質問に「今日とね:明日は涼しくなるんだって」と答える(17行目)。また、その答えはマチによって「あっ↑そ:う」(20行目)と受け止められる。さらに、その反応がハナによる「うん」で承認され、15行目より開始された「質問-応答」連鎖は収束可能な位置に至っていることが公然化される。

そのような位置において、マチは22行目で「なんか」と言い、ターンを取得する(鈴木, 2000)。その後、マチはそれまでの話題と関連する話題として、ヨーロッパの天気を取り上げる。ここで、マチは「よ」を用いて、現在話している話題について自分がよりよく知っている立場であるという認識的スタンス(益岡・田窪, 1992; Hayano, 2011)を示している。つまり、ここで取り上げられている「ヨーロッパの天気」を、マチはハナに「ニュース」として報告しているのである。また、マチは続けて「フランスでなん・どっかなんか」と、具体的な国名を挙げることで、ニュースの詳細について報告を続ける。受け手であるハナもマチの報告を「ニュース」として理解し、23行目でマチが発話している途中に「あほんと∴」を用いてマチの報告をニュースとして受け止めている。マチは、ハナの「あほんと∴」という反応を聞いた後、24行目でやや早いスピードで「すごい」を発話し、そして続けて「暑いんだって」と、22行目のニュースの報告をさらに続ける。そして、その報告が終わった直後、ハナは25行目で、緩やかな上昇調のイントネーションで発話される「へー」(図1)を用いてマチの報告を受け止めている。

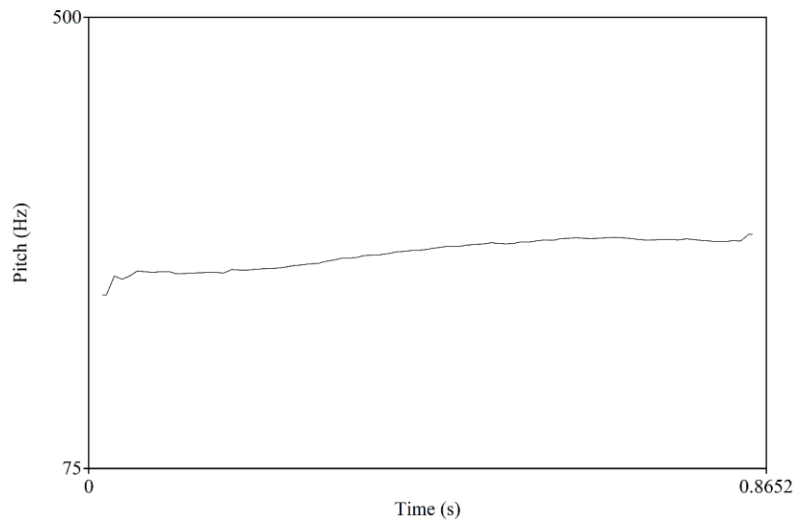


図1 断片(1)の25行目の「へー」のピッチ曲線

ここで、マチの22,24行目のニュースの報告に対して、ハナが23行目と25行目で異なる反応をしていることに注目したい。22行目でマチはヨーロッパの天気を「暑いって話だよ」と、ただ「ヨーロッパ」が「暑い」というニュースを報告しているが、24行目で「すごい暑いんだって」のように、「すごい」という程度副詞を付け加え、またその程度副詞を強く発音することによって、「暑さの程度」を際立たせた形で、「今ここ」で報告するニュースにニュース性があることを強調するスタンスを示しているのである。この発話に対して、23行目と同じように再び「あほんとう」という形式を繰り返してニュースを受け止めたことを示すのではなく、「へー」を用いることによって、報告者のニュース性のあることを強調するスタンスに同調を示していると言える。また、ハナの「へー」という反応は26行目でマチによって「うん」と明確に受け止められている。このことから、報告者マチにとって、ハナの「へー」の反応が適切だったことが裏付けられる。

受け手が「へー」を用いて報告者が強調するニュース性に同調を示すことは、以下の断片(2)からも確認できる。

(2) [callfriend_2167_14:28]((会話の内容から、アヤとユキの夫はそれぞれ違う会社に勤めているが、現在アメリカに留学していると推測される。1行目の発話の中に出てくる「三菱商社」はアヤの夫が勤めている会社のことだと推測される。また、「そっちに」というのはユキの夫が留学している学校のことを指している。))

1 アヤ: .hh ↑>なんか三菱商社<の一年生が一人(.)行かない?そっちに. hh

- 2 (0.2)
- 3 アヤ： だっていう話を聞いたような[気がする。
- 4 ユキ： [あ::でもね一年生とか::の人って
- 5 全然接[触がなくて:::
- 6 アヤ： [そっかそっか
- 7 アヤ： ん:::
- 8 ユキ： ん::[:
- 9 アヤ： [hh 一人行ったみたいだよ.[ほんとに。
- 10 ユキ： [あっ
- 11 ユキ： ほん[と:::
- 12 アヤ： [ん::
- 13 (0.3)
- 14 ユキ： そ::ね,今年はね,35::人だったって。
- 15 アヤ： ほんと[::.
- 16 ユキ： [去年は 55 人ぐらいいいたんだ[って。
- ↗ (急に上昇した後には下降しまた上昇する)
- 17 →アヤ： [へ:::(h):(h):
- 18 ユキ： ♪そうそう,[そう.♪
- 19 アヤ： [hh ㄱ(h)-日本人?
- 20 ユキ： そうだよ::.
- 21 (.)
- 22 アヤ： ↑55?
- 23 ユキ： そ:う.減ったの.hehe
- 24 アヤ： すごすぎる。
- 25 ユキ： .hh だからまとまりがないとかいうか::.

アヤは 1,3 行目でユキに「三菱商社の一年生」がユキの夫が通っている学校に行っているかについて尋ねたが、ユキは「一年生と全然接触がない」(4,5 行目)という理由を挙げ、「知らない」スタンスを示している。アヤはそのスタンスを「そっかそっか」(6 行目)と受け止め、9 行目で「一人行ったみたいだよ.ほんとに。」と、「ほんとに」を後置し、情報源の正しさを強調することで、ユキにもう一度「一人が行った」ことを報告する。ユキはこの報告に

ついて11行目で「ほんと……」と、ニュースとして受け取ったことを示す。そして、それがアヤによる「ん……」(12行目)で受け止められ、9行目からの「ニュースの報告ーニュースの受け取り」連鎖はいったん収束可能な位置に至っていることが認識可能である。次のターンにおいて誰もターンを取得しないため、0.3秒の間合いが生じていると思われる。

そのような環境の中で、ユキは14行目で「そ…ね」と言い、ターンを取得したうえで、「今年はね、35…人だったって」と言う。ここでは特に、何が「35人」なのか明確に言っていないが、前の文脈から、「(自分の)夫が通っている学校の日本人学生」の人数を報告していると推測される³。また、ユキは引用マーカー「って」(Hayashi, 1997; 山口, 2009; 加藤, 2010など)を用いており、夫に聞いたことからの引用という形で報告していることを明示的に示している。その報告に対して、アヤは15行目で「ほんと…」を用いて、ユキによる報告をニュースとして受け止めたことを示す。また、ユキは16行目で続けて「去年は55人ぐらいいたんだって」と、去年の日本人学生の人数を報告する。そしてアヤはこの報告を17行目で「へー」で受け止めている。

断片(1)と同様、受け手アヤはユキの14行目と16行目の報告に対して、それぞれ異なる(15行目の「ほんと…」と17行目の「へー」)反応で受け止めている。ここで、報告者の報告の仕方に着目し、なぜこのように受け手の反応が異なるのか検討してみよう。16行目のユキの「去年は55人ぐらいいたんだって」という報告は、一見すると、報告者ユキが特に何かを「強調」して話しているものではない。しかし、報告者のターンのデザインと16行目の発話が産出される位置に注目すると、報告者が何を強調しているのか見えてくる。まず、ターンのデザインについて、ユキは14行目で「今年は35人」と報告したうえで、16行目で「去年は55人」と報告している。14,16行目のそれぞれのターンに「は」が使用されること、また「今年」と「去年」の人数がそれぞれ具体的に述べられていることから、今年的人数と去年の人数を比較して、去年の人数を際立たせることで、「去年」の人数が「多かった」ことを強調しているように見える。また、位置について、ユキは、14行目で「今年」の人数を報告したうえで、16行目で「去年」の人数を報告している。「今年」の人数を報告した後、わざわざ「去年」の人数を持ち出して報告することから、報告者ユキが「去年」の人数をニュース性があることとして強調しているように聞こえる。そして、受け手アヤはこのような報告者の報告の仕方に対して敏感に反応を示している。15行目では「ほんと…」と

³ 15行目のアヤの「ほんと…」という反応から、アヤは特に何の人数について報告しているかという問題を問題にしていないことが観察される。

単に14行目の報告をニュースとして受け取ったことを示すが、17行目では「へー」と16行目の報告をニュースとして受け取ったことを示すだけでなく、報告者のニュース性のあることを強調するスタンスに同調を示しているのである。

また、ここで記しておきたいのは、「へー」の音調である。17行目の「へー」のピッチ曲線(図2)を見てもわかるように、この「へー」の話者アヤは、音調を急に上昇させた後、急に下降させ、また上昇させるように操作している。この音調の操作、また実際の音声から、アヤは、ここでこの特徴的な音調の「へー」を用いて、報告者が強調するニュース性、すなわち去年の人数の「多さ」に対して「驚き」のスタンスを示しているように聞こえる⁴。つまり、受け手アヤは報告者が強調するニュース性に対して、「へー」という言語形式だけではなく、音調まで操作することによって、「同調」を示しているのである。

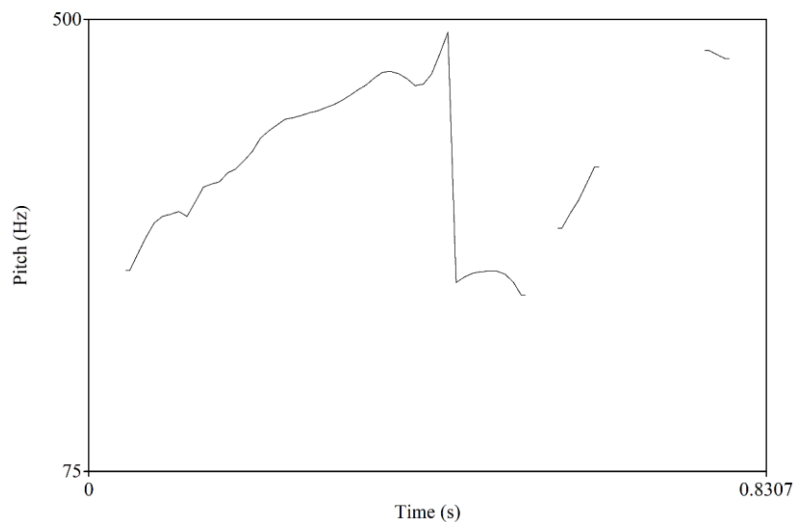


図2 断片(2)17行目の「へー」のピッチ曲線⁵

さらに、アヤの「へー」という反応を聞いた後、ユキは18行目で「そうそうそう」と、

⁴ 話者が「へー」を用いて先行発話に対して「驚き」を示すことは、多くの先行研究で記述されている(益岡・田窪, 1992; 田窪・金水, 1997など)。ここで、強調しておきたいのは、「へー」が用いられると、必ずしも「驚き」を示すわけではないことである。上記で述べたように、話者は「へー」の音調を操作することを通して、「驚き」のスタンスを示している。つまり、「驚き」のスタンスは単に言語形式によって示されるのではなく、その言語形式が用いられる位置や環境、そして、どのように産出されているか(音調)を総合的に考察しなければならない。例えば、断片(1)の25行目の「へー」は、特に話者の「驚き」のスタンスを示していないと言える。

⁵ 図2のピッチ曲線の後半に切れている部分があるが、これは話者が「へー」の後半、笑い混じりで発音しているためである。

「そう」を3回繰り返してアヤの反応を強く肯定している。その反応は、断片(1)の「へー」を承認する「うん」(26行目)と異なっている。ユキは、「そうそうそう」を用いて、アヤの「へー」という反応を強く肯定することによって、アヤの「へー」の反応がまさに自身が期待していた反応と一致していることを強く主張している。つまり、「へー」という反応が報告者にとって適切だったということが観察可能である。

以上、断片(1)と(2)を用いて、受け手は「へー」を用いて、報告者によって報告されたニュースを単に受け止めたことを示すだけではなく、報告者が強調するニュース性に同調を示していることを検討した。

4.2.2節では、ニュースが報告された第二部分に用いられる「へー」と「ふーん」の比較を試みる。「ふーん」との比較を通して、上記で述べた「へー」の相互行為上の働きをより詳細に理解できると考える。

4.2.2 基本連鎖の第二部分に用いられる「へー」と「ふーん」との比較

まず、基本連鎖の第二部分に「ふーん」が用いられている断片(3)を見てみよう。

(3)[callhome_1370_11:28]((ナミ(姉：アメリカ)とキヨミ(妹：日本)は姉妹である。断片の前では、ナミはキヨミをアメリカに遊びに来るように誘っている。キヨミはその誘いを受け入れ、もう一人の友達も一緒に行きたいと言っていることを伝えた。しかし、その後キヨミの友達に関するやりとりが特に行われることがなかった。断片の直前では、ナミはキヨミに今住んでいる場所(19行目の「ダラス」)を紹介している。1行目の発話は、ナミ自身が住んでいる場所への評価として理解できる。))

- 1 ナミ： すごくいいとこだから。
- 2 (0.4)
- 3 キヨミ： うん。
- 4 ナミ： うん。
- 5 キヨミ： .hh[h>サ]トコ<っていうね.;
- 6 ナミ： [あのう]
- 7 (.)
- 8 ナミ： ん?
- 9 キヨミ： サトコっていう友達がいる[のね。
- 10 ナミ： [うん

- 11 キヨミ： 2個下なんだけど[さ；
 12 ナ ミ： [うんうん
 13 キヨミ： .hhh で家出るときはその子と一緒にしようっていったの；
 14 ナ ミ： うん；
 15 キヨミ： でその子がね,行きたがってた。
 →→((平板調))
 16 →ナ ミ： ふ…ん。
 17 (0.2)
 18 キヨミ： うん。
 19 ナ ミ： ダラス別に来てもいいけど,ナミ姉ちゃんも今ほら身重だからさ；
 20 キヨミ： うん,[うんうん。
 21 ナ ミ： [で11月に引っ越しさ、

ナミは、1行目で「すごいいいところだから」と、「だから」を用いて、これまでの話をまとめ上げているように聞こえる。その発話に対して、キヨミは3行目で「うん」のみと受け止め、それ以上連鎖を拡張させようとしな。さらに、その反応が4行目でナミによる「うん」によって受け止められることによって、ナミ自身の住んでいる場所の紹介に関する連鎖はいったん収束されたと認識可能である。

そのような環境の中で、キヨミは5行目で吸気し、これから何かの発話をするスタンスを明示したうえで、やや速いスピードで「サトコ」と言い、ターンを取得する(Schegloff, 2000)。一方、ナミも、キヨミが吸気している間に「あのう」と言い、ターンを取得しようとするが、それをやめてキヨミにターンを譲る。しかし、「あのう」という発話はキヨミの「サトコ」という発話と部分的に重なっているため、ナミはキヨミの発話を明確に聞き取ることができなかった。それで、ナミは、キヨミの「ていうね:」という発話が終わった後に、「ん?」と修復を開始する(8行目)。キヨミはナミの修復開始を聞き取りの問題として扱い、9行目で自身が5行目で言った「サトコ」の名前を繰り返して、「っていう友達がいるのね」と「サトコ」のことを話題として導入し、これから「サトコ」のことを話すことを予告している。そして、11行目でキヨミは「2個下なんだけどさ」とサトコの特徴を簡単に説明した後、13,15行目でサトコがアメリカに行きたがっていることをナミに報告している。そして、ナミは16行目でその報告を平板調のイントネーションで発話される「ふーん」で受け止めている。

ここで、「ふーん」と「へー」の違いについて考察したい。先述したように、断片(1)、(2)では、報告者がニュースを報告する時に、そのニュースにニュース性があることを強調するスタンスを示している。断片(1)では、報告者マチは「すごい」という程度副詞を使用することで、ヨーロッパの「暑さの程度」を際立たせている。また断片(2)では、報告者ユキは「去年」の人数を「今年」の人数と比較することで、「去年」の人数の多さを際立たせている。そのように、受け手は報告者によって示されるニュース性を強調するスタンスに同調するために「へー」を用いている。しかし、断片(1)、(2)と比べて、(3)では、報告者キヨミは単に友達「サトコ」のことをナミに報告しており、報告する中で特にニュース性があることを強調しているわけではない。そのため、断片(3)では、受け手は「へー」ではなく、「ふーん」によって報告者が報告したニュースを受け止めたことのみを示していると考えられる⁶。

「ふーん」と「へー」の違いを検証するために、もう一例を見てみたい。

(4)[callhome_1012_7:41]((アメリカにいるヒデと日本にいるミヨとの会話である。2人は夫婦である。))

- 1 ヒデ： こっちはさ;
- 2 ミヨ： うん.
- 3 ヒデ： ここふつつかんぐらい(.)朝あの食べに:(0.3)あもう出ればさ;
- 4 ミヨ： うん
- 5 ヒデ： もうひっや::ってもうまるで9月[10月のような]さ:
- 6 ミヨ： [° ん:::]
- 7 ミヨ： ん::: ↑ ↓ [::: =]
- 8 ヒデ： [9月か秋晴れっていう感じ.]
- 9 ミヨ： =hehahaha[ha=
- 10 ヒデ： [寒い.
- 11 ミヨ： .hhhh や今日も朝勤め行ってきたけど,
- 12 ヒデ： うん
- 13 ミヨ： 5時:::半からだったさ,

⁶ 話者が「ふーん」を用いて特に話者の評価あるいはスタンスを示さないことは Aoki(2010)においても述べられている。本研究で検討する事例も Aoki の論点を裏付けていると考えている。しかし、Aoki(2010)では、「ふーん」の位置を分けて考えているわけではないため、「ふーん」の産出する位置によって「ふーん」の相互行為上の働きがどのように異なるかについて検討する余地がある。

その報告をニュースとして受け止めている。

ニュースが報告され、その報告が「ふーん」によって受け止められると、「ニュース報告ーニュースの受け取り」連鎖が収束してもよい位置に至っていると考えられる。しかし断片(4)では、ミヨは26行目で「6(h)時(h)す(h)ぎ(h)からもう日が昇るとともに暑くてさ」と言い、もう一度ニュースを報告している。なぜそのようなことが生じているのだろうか。

ミヨは21行目で、まず時間を「6時すぎるんだけど」と明示的に言っただけで、24行目で「その頃からもう暑い」ことを報告している。「(朝の)6時すぎ」というのは、一日の中で「早い」時間帯であるため、一般的にその時間で既に「暑い」とは考えにくい。ミヨはここであえて時間を明示的に提示し、「その頃からもう」暑いということを述べることによって、「暑くなる時間帯が早い」ということを際立たせるように発話をデザインしていると思われる。つまり、報告者ミヨは「暑くなる時間帯が早い」ということを「ニュース性のある」こととして強調しているのである。このように、報告者はここで報告しているニュースにニュース性があることを強調して述べているが、一方で受け手ヒデは、単に「ふーん」とニュースを受け止めたことのみを示している。このような反応は、やはり報告者にとって問題となり、ミヨは27行目で「6(h)時(h)す(h)ぎ(h)からもう日が昇るとともに暑くてさ」と、21,24行目の報告をもう一度やり直している。この27行目のやり直された発話においては、ミヨが「暑くなる時間帯が早い」ことを強調していることが観察される。具体的に言うと、ミヨは笑いながら「6時すぎ」を産出している。笑いながら時間帯を言っていることから、その時間帯が笑えるほど早いという話者のスタンスがより明確に示されている。また、「6時すぎから」を言った後、ミヨはすぐに「もう日が昇るとともに」と言い換えている。話者がここでわざわざ言い換えをしているのは、「日が昇るとともに」という言い方は、「6時すぎから」という言い方よりも「時間帯の早さ」がより認識されやすいためだと考えられる。以上のように、このやり直された発話において、ミヨは「暑くなる時間帯が早い」ことを強調するスタンスをより明示的に示している。

そのような報告者のニュース性を強調するスタンスが含まれている報告を受けたヒデは、28行目で「ふーん」ではなく、「へー」という反応でニュースを受け止め、またそれと同時に、報告者が「暑くなる時間帯が早い」というニュース性を強調するスタンスに同調を示している。27行目の反応と異なり、ミヨは30行目で28行目の反応を特に問題とせず、「本…:…当…:…にも…:…」と言い、自身が語ったこと全体に対して評価をすることで、語りを終わらせようとしている。

上記の分析からわかるように、「ふーん」は報告されたニュースのみを受け止めたことを

示す際に用いられるが、それに対して、「へー」は報告されたニュースを受け止めたことを示すだけでなく、ニュース性を強調する報告者のスタンスに同調を示す際に用いられる。

ニュースが報告されると、その次のターンではニュースを受け止めることが期待される。この時、ニュースの受け手がどのようにニュースを受け止めるかということには、ニュースの報告者が自身の発話についてどのようなスタンスを示すかということが深くかかわっている。報告者は、ニュースを報告する際に様々なスタンスを示しており、そのスタンスは受け手がそのニュースをどのように受け止めるべきかガイドするものとなる。そして、受け手はそれに敏感に応じるようなスタンスを示すことが期待される。本節では、報告者がニュースを報告する際に、ニュース性があることを強調するスタンスを示す場合を検討した。分析を通して、報告者によって示されるニュース性を強調するスタンスに同調を示す際に、「へー」は利用可能な手続きであることがわかった。

また、経験上、私たちは、ある報告されたニュースを聞いた後、受け手としてそのニュースをよりよく理解するために質問を行ったり(例えば、ニュースに関して疑問を持っていれば、その疑問を提示する)、あるいは、ニュースに関連する話を聞き出したりすることもよくある。このような場合、会話参加者は、どのようにニュースを受け止めたことを示し、また、どのようにしてニュースに関連する話を聞き出すのだろうか。そして、「へー」はどのように用いられるのだろうか。次節では、これらの問題を取り上げる。

4.3 次なる連鎖を生み出す手立てとしての「へー」

4.2 節では、「ニュースの報告ーニュースの受け取り」といった基本連鎖の第二部分で話者が「へー」を用いることで、第一部分で報告者のニュース性のあることを強調するスタンスに同調を示しているという働きを明らかにした。本節では、基本連鎖の第二部分で、ニュースの受け手はまず「へー」を用いて第一部分で報告されたニュースを受け止めたことを示すが、続けてすぐに第一部分と何らかの関連性を持つことを聞き出すような事例を取り上げて分析する。まず、4.3.1 節では第一部分のニュース性にかかわることを聞き出すことを可能にする「へー」について論じる。次に4.3.2 節では、第一部分のニュース性にかかわらないことを聞き出すために「へー」が利用される事例を検討する。

4.3.1 第一部分のニュース性にかかわることを聞き出すことを可能にする「へー」

まず、断片(5)を見てみよう。

(5) [callhome_0986_7:01]((叔母(ヨウコ)と姪(アズサ)との電話会話である。断片の中に出て
いる「マドカ」はアズサの姉である。アズサと電話する前に、ヨウコはマドカと電話してい
た。断片の直前で、ヨウコはプールに入ったアズサに「痒いの大丈夫だった」かについて聞
いた。アズサはその質問に対して「うん」と肯定的に答えた。その会話が終わった後に、ア
ズサは1行目で自身のプール体験を語り始める。))

1 アズサ： でもね、

2 ヨウコ： うん

3 アズサ： アっちゃんたちとね、[行ったね、

4 ヨウコ： [うん

5 アズサ： ホテルのね、

6 ヨウコ： うん

7 アズサ： プールはね、すごいね、深くてね、アっちゃんちおぼれそうだった。

8 ヨウコ： hehhh.hh アズサまだ泳がれへん(.)かな?

9 (0.2)

10 アズサ： うん.

11 (0.3)

12 ヨウコ： あっ(0.2)ほんとに:?

13 (1.0)

14 ヨウコ： もう泳げるんちゃう?

15 (0.7)

16 アズサ： え?

17 ヨウコ： もう泳げるんちゃう?

18 (0.5)

19 アズサ： やちよつと浮き輪やって.

20 ヨウコ： あっ(0.2)まだか::.

21 (0.3)

22 ヨウコ： マドカは泳げんの?

23 (0.4)

24 アズサ： え?

25 ヨウコ： マドカは泳げ[んの?

26 アズサ： [マアちゃんはねつま先で立ってた.

- 27 ヨウコ： あっ
 28 (0.7)
 29 ヨウコ： そ::か::.....
 30 (0.6)
 31 アズサ： だってね::,
 32 ヨウコ： うん
 33 アズサ： あのね,深さがね,[確かね 1.5メートルぐらい.
 34 ヨウコ： [° ん°
 35 (0.6)
 —→ ((緩やかな上昇))
 36 →ヨウコ： へ::.....=でもマドカ 1.5 で背伸びしたらなんとか口が出るわけ.
 37 (0.3)
 38 アズサ： うん.
 39 (.)
 40 ヨウコ： 大きくなったね::.
 41 (0.2)
 42 アズサ： うん.
 43 (.)
 44 ヨウコ： ね:アズサは今何センチ?

アズサは1行目から、プールに行ったことをヨウコに報告している。また、7行目でアズサは「プールは深くて、おぼれそうだった」ことを報告する。その報告に対して、ヨウコは8行目でアズサの報告を面白いことだと思っているという理解を笑いによって示し、続けて、「アズサは泳がれへんかな」⁷と確認を求めることで、アズサが報告した「おぼれそうだった」ことについて話しを掘り下げようとする。ヨウコの確認に対して、アズサは10行目で「うん」と肯定的に答える。その答えに対して、ヨウコは12行目で「あっほんとに:?!」と発話末の音調を上げることで、アズサの答えに対する意外性を表している。この反応から、ヨウコにとってアズサが「泳げない」ことは想定と異なっていることが読み取れる。しかし、

⁷ 「～へん」は関西方言であり、「～ない」という意味である。また、「泳がれへん」は「泳げない」と同じ意味である。

アズサはこの反応に対して特に何も反応を示さず、13行目で1.0秒の間合いが生じる。そして、ヨウコは14,17行目で「もう泳げるんちゃう?」（「もう泳げるのではないか?」）⁸と、8行目の質問を少し変えることで質問をしている。また、この質問は、ヨウコ自身が想定していることをアズサに確認を求めるものとして理解できる。この質問に対して、アズサは19行目で「やちょっと浮き輪やって」と答え、明示的に自分が泳げないことを主張する。アズサの答えを聞いたヨウコは20行目でまず「あっ」を用いて自身の認識に変化があったことを示し(Endo,2018)、「まだか」を言うことでアズサが泳げないという事実を承認している。

その後、ヨウコは22,25行目でアズサの姉である「マドカ」が泳げるかどうかについて質問する。その質問に対して、アズサは26行目で「マアちゃんはずま先で立っていた」と答える。そして、その答えがヨウコによる「あっそっか」（27,29行目）と受け止められることによって、22行目から始まる質問-応答連鎖はいったん収束可能な位置に至っていることが認識できる。

0.6秒の間合い(30行目)の後、アズサは31行目で「だってね」と言い、何かの理由を述べようとすることを予示することで、ターンを取得する。また同時に、「だって」によって何かのことについて自身の正当性を主張しようとするスタンスも示している(日本語記述文法研究会, 2009: 77)ように聞こえる。そして、アズサは続けて33行目で、「あのね、深さが、確か、1.5メートルぐらい」とプールの深さを明確な数字(「1.5メートル」)を提示することで、ヨウコに報告している。ここで、アズサは、プールの深さをただ報告しているのではなく、「1.5メートル」という具体的な数字を提示して「プールが深い」ことを強調しているのである。また、そうすることによって、自分がなぜこのプールで泳げないかということの正当性が主張されているように聞こえる。以下では、なぜそのように聞こえるかの理由を述べる。

アズサは7行目でプールの深さを「すごいね、深くてね」のように、程度副詞「すごい」を用いて「プールが深い」ことを強調しているが、具体的にどのぐらい深いかについて説明していない。また、7行目の報告がなされた後、ヨウコはアズサによって強調されたプールが深いことについて特に何かの反応を示さず、「アズサまだ泳がれへんかな」と質問する(8行目)。さらに、アズサが泳げないと答えた(10行目)後、ヨウコは「あっほんとに?」（12行目）と意外性を表す反応を示したり、「もう泳げるんちゃう?」（14,17行目）とさらに確認をし

⁸ 「～ちゃう」は関西方言であり、上昇イントネーションを伴うと、「～のではないか?」という意味となる。

たりすることを通して、「アズサが泳げない」ことに対して疑問を示している。そういったやり取りの後、アズサが31行目で、ヨウコの疑問を打ち消すため、自分がこのプールで泳げなかった正当な理由があることを主張するのは適切だろう。そして、その正当性を主張するために、アズサはここでプールの深さを明確な数字(「1.5メートル」)で提示するという手立てを利用している。このように、アズサは31,33行目において、受け手ヨウコに単にプールの深さを報告しているだけではなく、「プールが深い」ことを強調する。また、自分がそのような「深いプール」で泳げないことは無理もないことであると強調していると言える。言い換えれば、ここでアズサは、プールの深さをニュース性があることとして強調している。受け手ヨウコはアズサが強調していることを理解し、36行目で「へー」を用いてアズサの報告を受け止めたこと示し、それと同時に、アズサのニュース性のあることを強調するスタンスにも同調を示している。

「へー」がどのように用いられているか検証したうえで本節で注目するのは、ヨウコが「へー」を言った後、間髪を入れずに次の新しいTCUを産出していることである。以下の図3に示しているように、ヨウコは「へー」を産出した直後、次のTCUとして「でも」を発している。では、話者はなぜこのようにターンを組み立てる必要があるのだろうか。

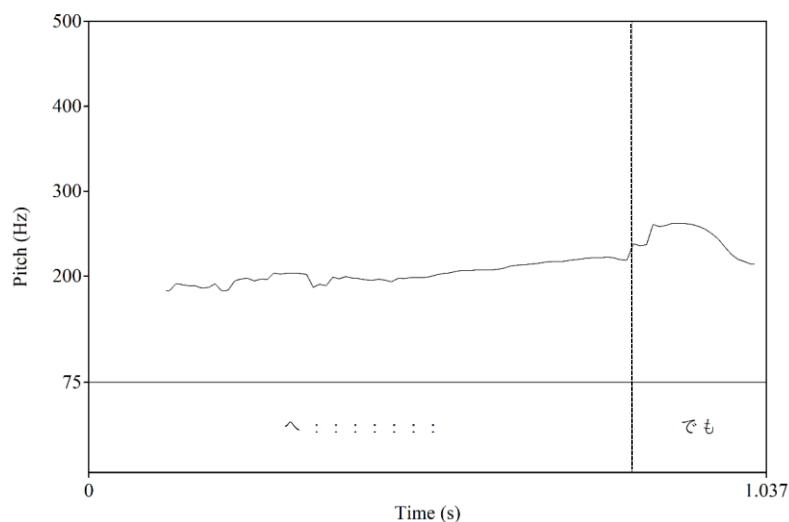


図3 断片(5)の36行目の「へ:.....でも」のピッチ曲線

まず、新しいTCUの「でもマドカ1.5で背伸びしたら何とか口が出るわけ」はどのようなものなのかを見てみよう。ヨウコによる「マドカは泳げんの」という質問(22,25行目)に対して、アズサは26行目で「マアちゃんはずつま先で立ってた」と答えている。また、31,33

行目では、アズサが「プールが深い」ことを強調する。ヨウコが「へー」を言った直後に産出する「でもマドカ 1.5 で背伸びしたら何とか口が出るわけ」という TCU は、上記で述べた情報を踏まえたうえで産出されていると理解される。つまり、ヨウコは、「マアちゃんはずつま先で立っていた」(26 行目)ことから、アズサが「1.5 メートル」と強調するプールで「マドカ」は「背伸びしたら何とか口が出る」⁹という疑問を差し出していると思われる。このように、ヨウコが「へー」を用いてニュースを受け止めたことを示した後に産出する新しい TCU は、アズサによって強調されたニュース性にかかわるものとして理解できる。つまり、この新しい TCU が産出されることは偶然ではなく、相手が強調するニュース性を理解したうえで、その強調されたニュース性に対して疑問を提示する発話として産出されているのである。また、このよう発話は、前の報告がなされた次のターンにおいて産出されるのが適切であろう。

次に、話者がなぜ間髪を入れずに新しい TCU を産出する必要があるかについて考察してみたい。先ほど述べたように、前のニュース報告に関連付けられている新しい TCU は、ニュース報告がなされた次のターンでの産出が適切である。また、先述したように、第一部分で何かニュースを報告した場合、その次のターンにおいて、受け手として何らかの形でその報告されたニュースを受け止めることが期待される。そのような環境の中で、受け手ヨウコは 36 行目でまず「へー」とニュース報告を受け止めたことを示している。また、「へー」によってニュース報告が受け止められたことに伴い、31 行目から始まる「ニュースの報告ーニュースの受け取り」連鎖がいったん収束可能な位置に至っていると認識できる。つまり、「へー」が産出された後、順番の移行に適切な場所(TRP)に至っていることが公然化され、順番交替することが会話参加者の相互行為の焦点になる。ヨウコはそのことを理解し、間髪を入れずに新しい TCU(ニュース報告に対する疑問)を産出することによって、相手がターンを取得することを制して、自身のターンスペースを確保していると考えられる。

なお、ここで記しておきたいのは「へー」の音調特徴である。図 3 のピッチ曲線に示しているように、ヨウコは「へー」の音調を最後まで上げたまま次の TCU の「でも」という単語を産出している。このように 1 つ目の TCU が完結するか否かの時点で 2 つ目の TCU を産出することができるのは、「へー」の音調特徴と深くかかわっていると考えられる。Mori(2006: 1191)によれば、「へー」は平板調か上昇調のイントネーションのいずれかで発

⁹ ここで、ヨウコは、「(マアちゃんが)つま先で立っていた」(26 行目)ことを「背伸びしたら何とか口が出る」に言い換えていると考えられる。

音されるが、下降調のイントネーションで発音されることはない。これは、「へー」の話者が、「へー」の平板調あるいは上昇調のイントネーションを利用して、つまり、「へー」のイントネーションを下げずに、「へー」の母音を延長したまま次の TCU につなげることができることを意味する。断片(5)では話者がまさに「へー」の下がらないイントネーションを利用し、「へー」の母音を延長したまま、間髪を入れずに次の TCU を産出していることが観察される。

基本連鎖の第一部分で何かのニュースが報告されると、第二部分ではそのニュースを受け止めることが期待される。その際に、受け手がどのようにニュースを受け止めるかということは、第一部分の報告者が示すスタンスに深くかかわっている。上述したように、第一部分で報告者がニュース性のあることを強調するスタンスを示す場合、第二部分でその強調するスタンスへの同調を示すために、「へー」は利用可能な言語資源の 1 つである。また、「へー」によってニュースが受け止められたことに伴い、それまでの「ニュースの報告—ニュースの受け取り」連鎖はいったん収束可能な位置に至っていることが公然化される。つまり、「へー」の産出によって、次の新たな連鎖に移行する機会が作り出される。これにより、相互行為の焦点も「ニュースを受け止める」ことから「順番交替」に変わる。受け手はそのことを理解しており、またそのことに敏感に反応しているため、「へー」を用いてニュースを受け取った後に、「へー」の下がらない音調の特徴を利用して間髪を入れずに次の新たな TCU を産出することで、第一部分のニュース性にかかわることを聞き出すことを可能にしている。

以下の断片(6)からも、断片(5)と同様の現象が観察される。

(6)[callhome_0988_11:13]((アメリカに留学しているタク(夫)と日本にいるミホ(妻)との電話会話である。この電話会話は、タクがミホにアメリカ人の家でホームステイをしていた話を中心に行われている。また、断片前の会話から、タクがホームステイしている家の家族全員がキリスト教徒であることがわかる。断片の前に、タクはアメリカのキリスト教会で礼拝する話をした。その話が終わった後に、断片の会話が始まる。))

- 1 タク： ↑そ:れでね:[俺一人しゃべりまくってっけどね,
- 2 ミホ： [うん
- 3 ミホ： うん
- 4 タク： あの:::::クリスチャンブックセンターみたいな連れてってくれたのよ.
- 5 ミホ： う::ん

- 6 タク： す::ごいよ.あの:いわゆるキリスト教<用品>い
 7 (0.2)
 8 ミホ： う:ん
 9 タク： 絵とかさ;
 10 ミホ： う:ん
 11 タク： ん::いっ(0.2)ば:いあんのよ.
 12 (0.5)
 → (緩やかな上昇)
 13 →ミホ： へ::::::=[大きいとこの:?
 14 タク： [° ん°
 15 タク： 大きいね::.
 16 ミホ： なに?そんな田舎でそゆうのがあるわけ[:?
 17 タク： [あ:るんだよ.あそういうところが.
 18 タク： モールみたいなところがあつてさ;
 19 ミホ： うん
 20 タク： ば:かでかいんだよ.あそういうとこまた.だーンっと.
 21 (0.7)
 22 ミホ： へ::[:
 23 タク： [す:ごいよ.
 24 (1.0)
 25 ミホ： へ::[:
 26 タク： [うん.もうちょっとあの:クリスチャンセンター

タクは1行目で音程を上げて「それでね:」を言い、ターンを取得したうえで、「俺一人しゃべりまくってけどね」と言うことで、この後何かの話をすることを予告している。受け手ミホは3行目で「うん」とタクに話を続けるよう促している。そして、4行目でタクは「クリスチャンブックセンターに連れてってくれたのよ」とホームステイ先での出来事を報告する形で、「クリスチャンブックセンター」の話題を提供している。この話題は、ミホにとって「ニュース」として受け止められることとして理解される。

タクは6行目で続けて「す::ごいよ」と「す」を強く発音したうえでその音を引き延ばすことで、「クリスチャンブックセンター」への評価、つまり「すごい」ことを強調している。

また、このように強調することによって、この後「クリスチャンブックセンター」の「すごい」ことに関する説明をすることを予告している。実際、タクは「すごいよ」を言った後に、間髪を入れずに(「クリスチャンブックセンター」の中にある)「キリスト教用品」について説明し続けている。また、説明の中で、タクは、11行目において「絵がいっぱいある」ことを、「いっ(0.2)ば::い」と「い」を言った後に0.2秒の間合いを入れ、また「ば」を長く引き延ばして「いっぱい」を際立たせることで、「クリスチャンブックセンターがすごい」ことを強調している。さらに、タクは発話末に「よ」をつけることによって、受け手にここで「受け止められるべき」ことが語られたと示している(Morita, 2012; 森田, 2017)。つまり、次に受け手によってタクの報告を何らかの形で「受け止める」ことを示すことが期待される。しかし、受け手はすぐに「受け止める」ことを示さないため、12行目で0.5秒の間合いが生じる。間合いの後、ミホは13行目で「へー」を用いてタクの報告したニュースを受け止めている。また、「へー」が用いられる理由は上記で分析した通りで、ミホはタクによって「すごい」というニュース性のあることを強調するスタンスへの同調を示すために用いられると考えられる。

次に注目したいのは「へー」が産出された後のミホの行為である。「へー」によって報告されたニュースを受け止められたことに伴い、「ニュースの報告—ニュースの受け取り」連鎖は収束可能な位置に至ったことが公然化される。つまり、次の新たな連鎖に移行する機会がそれによって作り出されるのである。そこで、ミホは断片(5)の受け手ヨウコと同様に、その機会を利用し、間髪を入れずに次の新たなTCUを産出することによって、自身のターンスペースを確保している。また、下記の図4のピッチ曲線にも示しているように、ここも、「へー」の話者は自身のターンを維持するために、「へー」の下がらないイントネーションを利用し、「へー」の母音を延長したまま、次の新たなTCUとして「大きい」を発している。そして、ミホが次に産出するTCUである「大きいとこなの?」によって尋ねていることは、ほかならぬ、タクによって強調された「クリスチャンブックセンターがすごい」ことにかかわるものである。タクが報告の中で、「ブックセンター」に「キリスト教用品がいっぱいある」ことを強調して言っている。その報告を受けたミホは、「大きいとこなの?」と質問を用いて、タクが強調するニュース性を理解したうえで確認を求めている。以上のように、受け手は、「へー」の産出によって作り出される次の新たな連鎖に移行する機会を利用することで、第一部分のニュース性にかかわることを聞き出すことを可能にしているのである。

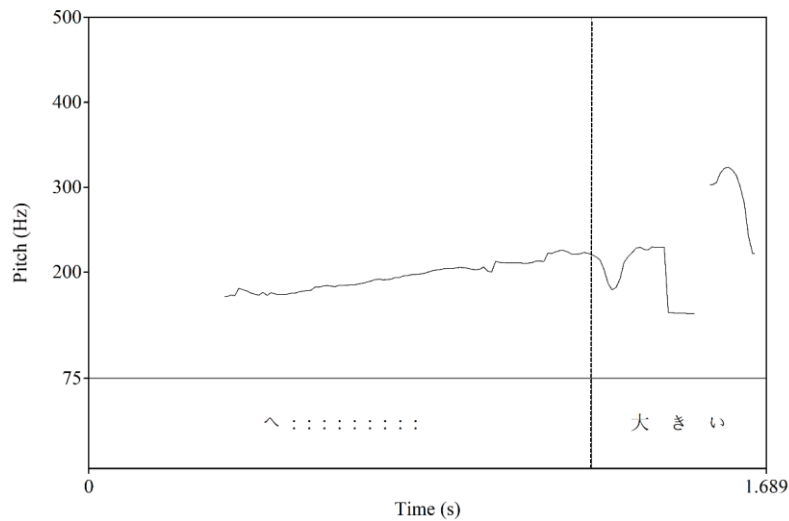


図4 断片(6)の13行目の「へー……大きい」のピッチ曲線

上記の断片(5)(6)では、「へー」の話者は第一部分と関連することを聞き出すために、「へー」の母音の引き延しや音調の調整を利用し、ターンスペースを確保したうえで次の第一部分のニュース性にかかわる新しいTCUを産出している。一方、次の断片(7)では、「へー」の話者は吸気をすることで、ターンスペースを確保したうえで、第一部分のニュース性にかかわることを聞き出している。その詳細を見てみよう。

(7)[callhome_1586_11:41]((日本にいる母親(モリ)とアメリカにいる娘(マオ)との会話である。「チサト」はマオの兄弟である。断片の前、モリはマオに「腰が悪い」ことを報告した。その話が終わった後に次に会話が始まる。))

- 1 モリ： チサト::もね,
- 2 マオ： う:ん.
- 3 モリ： 潜りに(.)行くの.
- 4 (.)
- 5 マオ： あそう.
- 6 モリ： う:ん
- 7 (.)
- 8 マオ： ん::[:
- 9 モリ： [あっちこっち行くんだって.
- 10 マオ： あほんと[:.

- 11 モリ： [うん.沖縄に行ってね:]
 12 マオ： うん:
 13 モリ： そんで ee あの:hh(0.2)じ-ん来年の2月つったかパラオに行くつったよ。
 →((緩やかな上昇))
 14 →マオ： へ::: .hh 来年の夏はこっち来ないのかな:::[:]
 15 モリ： [ん:::[:]まあ
 16 マオ： [一遍誘ってみよう
 17 と思っ[て:]
 18 モリ： [ん:::姉ちゃんの都合だっって言って[たよ。
 19 マオ： [うん::h
 20 モリ： 行きたいんだけど姉ちゃんどうのこのつってるからってゆってた。
 21 [忙しいって。
 22 マオ： [うん:だから来年なつ:::[.h 夏にはね,[今場所(0.2)行きたいとこ
 23 モリ： [ん:: [ん::
 24 マオ： 決めたから:[そこで潜るのもできるから::,
 25 モリ： [うん
 26 モリ： うん
 27 マオ： あのうフロリダの先っちょなのね。
 28 (.)
 29 モリ： あ:そう。
 30 マオ： うん.そ[(0.2)こに:],
 31 モリ： [ん:::]
 32 モリ： うん
 33 マオ： 行こうと思って。
 34 モリ： ああ:::

モリは1-3行目において「チサトもね,潜りに行くの」¹⁰とマオの兄弟であるチサトの話題

¹⁰ ここで、モリは「チサトも」を用いて話題を導入している。この話題の前に、モリは自身の体の状態について説明しており、そこで「お父さんも旅行したりして、4、5日歩けなかったの」という話があった。このように「お父さんの旅行」の話があったため、モリがもう一人の家族である「チサト」の話を導入する際に、「も」を用いていると考えられる。

を持ち出し、「潜りに行く」ことを報告する。マオはその報告を5行目で「あそう」と受け止めている。また、その反応をモリは6行目で「うん」と承認する。8行目でマオは「ん……」ともう一度モリの報告を受け止めたことを示す。そして、モリは9行目で自ら「あっちこっち行くんだって」と、「んだって」を用いて、チサトから聞いたことの引用であると明示的に示す形で、「チサトが潜りに行く」ことについて詳細を付加する。その報告に対して、マオは10行目で「あほんと:」とモリが報告したことをニュースとして受け止めている¹¹。

また、「あっちこっち行くんだって」という報告がなされているため、その後モリによって具体的に「あっちこっち」の場所が挙げられることが予測される。実際、モリは11行目で「うん」とマオの10行目の反応を承認したことを示した後、「沖縄に行つてね」と具体的な地名を挙げることで、「あっちこっち」の説明をする。そして、13行目で「そんで」を用いて前の発話の「続き」であることを際立たせたうえで、「あの来年の2月つったかパラオに行くつたよ」と、チサトに聞いたことを引用して、チサトが「パラオに行く」ことをマオに報告する。その報告が終わった後に、マオは「へー」とモリの報告を受け止める。

ここで、この位置で「へー」がどのように用いられているかを詳細に見てみたい。モリは13行目の発話末に「よ」をつけることによって、受け手に「受け止められるべき」ことが語られたことを示している(Morita, 2012; 森田, 2017)。そのために、次のターンで受け手として報告者が語ったことに対して何らかの「受け止める」反応を示すことが期待される。また、モリは報告する際に、「パラオ」と強く発音することで、「パラオ」に行くことを受け手に強調しているように聞こえる。なぜモリが「パラオ」に行くことを強調する必要があるのだろうか。チサトが潜りに行く「あっちこっち」の場所として、11行目で報告されている日本国内の「沖縄」に比べて、海外の「パラオ」に行くことは予想しにくく、珍しいことであると考えられる。すなわち、これはよりニュース性の高いこととして理解されやすいだろう。このような環境の中で、受け手マオは14行目で「へー」を用いてモリの報告を受け止めたことを示すと同時に、報告者のニュース性のあることを強調するスタンスにも同調

¹¹ ここで、マオが5行目と10行目で、モリの報告に対してそれぞれ異なった反応(5行目:「あそう」; 10行目:「あほんと:」)をしていることについて少し考察しておく。マオは「チサト」の兄弟として、「チサト」が「潜りに行く」ことをよく知っていると推測できる。また、断片の22-27行目で、マオはアメリカで潜る場所を決めたという話が、この推測は裏付けられると考える。従って、1-3行目で報告されたことに対して、マオは「あそう」と受け止めている。それに対して、モリが9行目で報告する「(チサトが潜りのために)あっちこっち行く」ということは、マオにとってニュースとなるため、その報告を「あほんと:」(10行目)とニュースとして受け止めたことを示している。

を示しているのである¹²。

そして、ここで注目したいのは、マオが「へー」を産出した後の行為である。マオは「へー」を産出した後に、短い吸気をすることでこの後何かの話をするを受け手に知らせて、ターンスペースを確保していると思われる。そのうえで、マオはすぐに「来年の夏はこっち来ないかな……」と次の新しい TCU を産出している(図 5)。このように、マオはここで、吸気をするという手続きを利用して自身のターンを維持しているのである。

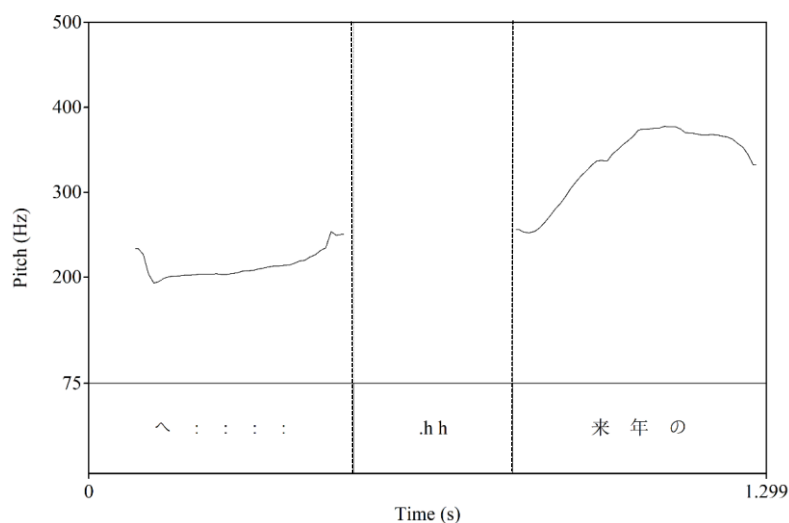


図 5 断片(7)の 14 行目の「へ…….hh 来年の」のピッチ曲線

また、断片(5)(6)と同様に、受け手が「へー」を言った後に産出する新しい TCU は、第一部分において強調されたニュース性と全く関係のないものではなく、そのニュース性と深く関連付けられているものである。モリは 1 行目からチサトが潜りに行くことについて報告し始めているが、その後報告の詳細を徐々に明らかにしていき、13 行目では、具体的に時期(「来年の 2 月」)および場所(「パラオ」)の情報を提供している。マオが 14 行目で、「来年の夏はこっち来ないのかな」という質問しているのは、それまでの情報を踏まえたうえで、そして報告者モリが強調するニュース性を理解したうえでできていると考えられる。そのように、「来年の夏はこっち来ないのかな」という質問がなされる位置として適切と言える。

この断片からも、「へー」の話者は「へー」の産出によって作り出された新たな連鎖に移

¹² この「へー」を 5 行目の「あそう」と 10 行目の「あほんと::」(注 11)と比較すると、「へー」が話し手によって強調されるニュース性のあることに同調を示すために用いられることが明確である。

行する機会を利用し、これにより第一部分と関連することを聞き出すことが可能となることが観察されている。

以上3つの断片の分析からわかるように、ニュースが報告された後の第二部分において、受け手は「へー」を用いて、ニュースを受け止めたことを示すと同時に、報告者によって示されている強調的スタンスにも同調を示している。また、「へー」の産出によって次の新たな連鎖へ移行する機会が作り出されるが、一方で、「へー」の話者は、その機会が訪れる直前に、「へー」の母音の引き延ばしや音調の調整、あるいは吸気をする手続きを利用して、ターンの交替を回避し、ターンを維持したうえで、第一部分のニュース性にかかわることを聞き出すことも可能である。

しかしながら、「へー」の産出の仕方によって話者が「次のTCU」を確保することを可能にするということは、その次のTCUで、第一部分のニュース性にかかわらないことを聞き出すために利用することも可能ということになる。次節では、第一部分のニュース性にかかわらないことを聞き出すためにいかに「へー」を利用しているかを見ていく。

4.3.2 第一部分のニュース性にかかわらないことを聞き出すために利用される「へー」

前節では、「へー」の産出によって、次の新たな連鎖へ移行する機会が作り出されるため、「へー」の話者はその機会を利用し、「へー」を産出した直後に、続けて第一部分のニュース性にかかわることを聞き出すことを可能していると述べた。本節では、「へー」の話者が第一部分のニュース性にかかわらないことを聞き出すためにいかにして「へー」を利用するかを検討する。

まず、「へー」の話者が「今ここ」で思い出したことを聞き出すために「へー」を利用する事例を見てみよう。

(8)[callhome_0924_11:53]((アメリカに留学しているコウと日本にいるヒナとの電話会話である。2人は夫婦である。断片の前で2人の娘の様子(あまり元気ではないこと)について話していた。その会話が終わった後に次の断片の会話が始まる。))

- 1 コウ: [こ:こはね:,
- 2 ヒナ: [.he.hehe
- 3 ヒナ: うん
- 4 コウ: すごいよ:.=としよ-としよ-図書館もすごいしね:,

- 5 ヒナ： うん.
- 6 (0.2)
- 7 コウ： あのうサービスがすごいんだよ.
- 8 (0.3)
- ▶ ((緩やかな上昇調))
- 9 →ヒナ： へ………=h[あつ<お部屋は>:何人?
- 10 コウ： [うん [例えばさ
- 11 (0.3)
- 12 ヒナ： ふ[たり:?
- 13 コウ： [ん?
- 14 (.)
- 15 コウ： 部屋[一人.
- 16 ヒナ： [>二人部屋?<
- 17 (.)
- 18 ヒナ： あつ<よかった>ね………[::=すごいね………[::].
- 19 コウ： [うん. [もう図書館もね;
- 20 (0.2)
- 21 ヒナ： うん
- 22 コウ： <コンピュータールーム>あっちゃこっちゃにあつてさ,
- 23 ヒナ： うん
- 24 コウ： あ要するにマックとか IBM とかね.
- 25 ヒナ： うん
- 26 コウ： で連[続よう-
- 27 ヒナ： [>選択できるんだ.<
- 28 (0.4)
- 29 コウ： うん.連続用紙つてあるじゃない.

コウは1行目で「こ:こはね::」と言ってターンを取得し、自身がいる場所の話をこれから語ることを予告する。ヒナは3行目で「うん」とコウに話を続けるように催促する。ここで、コウは自身がいる場所の話をしているため、その話はヒナにとって「ニュース」として受け止められることが理解されるだろう。

コウは4行目で「すごいよ:」と「ご」を強く発音し、また「よ」を少し引き延ばすことを通して、1行目で言った「ここ」への評価、つまり「すごい」という特徴を際立たせている。また、そうすることによって、受け手にこれから「何がすごいか」という説明が続くことを予告している。実際、コウは「すごいよ」を言った後、間髪を入れずに「としょ-」を言い、新たなTCUを産出し、「すごい」に関する説明を始めようとしている。ここで、コウは「図書館もすごいしね」と「図書館がすごい」ことを説明することで、自身が4行目の最初に言った「(ここは)すごい」ことの根拠を述べているように見える。また、ここで、「し」が用いられているため、続きで他の「すごい」ことも挙げられていくことが投射されている。実際、7行目でコウは「サービスがすごいんだよ」と、「サービス」をもう1つの「(ここは)すごい」こととして挙げている。ここで、コウによる「サービスがすごいんだよ」という報告は、特に具体的にどのようなサービスがすごいかというのが報告されていないため、この発話はこの後「どのようなサービスがすごいか」という説明がなされる「予告」として聞こえることに注意したい¹³。受け手ヒナもそのように理解を示して、コウの報告がなされた後に自身からすぐに反応を示さず、コウが続けて「どのようなサービスがすごいか」と説明を待っている。しかし、コウはすぐに報告を続けないため、8行目で0.3秒の間合いが生じている。そこで、ヒナは「へー」を用いて、それまで報告されたニュースをひとまずここで受け止めている。

そして、ここで「へー」が用いられる理由は以下のように考えられる。コウは1行目からヒナに自身がいる場所のことを「ニュース」として報告しているが、4行目の最初に「すごい」という評価を際立たせたいと、続いて「図書館もすごい」と「サービスがすごい」ことを挙げ、「すごい」と言うことの根拠を述べている。また、その中で、「すごい」という評価が3回も繰り返されている。そのようなやり方を通して、コウは自身がいる場所の「すごさ」を強調していることがわかる。これらから、ヒナはコウの強調的スタンスを理解し、9行目で「へー」を用いてこの強調的スタンスに同調を示していると思われる。そして、コウは10行目で「うん」とヒナの「へー」という反応を承認する。その承認の行為から、コウがヒナの「へー」という反応を適切な反応として扱っていることもわかる。

次に、注目したいのは、「へー」が産出された後のヒナとコウの行為である。先述したように、「へー」の産出によって、それまでの「ニュースの報告-ニュースの受け取り」連鎖は収束可能な位置に至っていることが公然化され、次に新たな連鎖に移行する機会が作り

¹³ この「予告」で投射していることは断片の19-29行目の発話の中で明らかになる。

出される。コウはそのことを理解し、ヒナの「へー」が産出された後に、「例えばさ」を言い、自身が7行目で「予告」していた「サービスがすごい」ことについて具体的な例を出すことで、この続きを産出しようとしている。この行為からも、コウの7行目の発話はあくまでも「予告」として産出されていることが裏付けられる。

しかし、ヒナもそこで、ごく短い吸気をし、発話を続けようとしていることを示す。そのうえで、「あっお部屋は何人」(9行目)と「あっお部屋は」を大きい声で発音し、新しいTCUを産出している。そのため、2人の間でターンを取得する競合が一時的に起きており、2人の発話が重なっている。しかし、ここではヒナが大きい声で新しいTCUを産出しているため、コウは自身の発話を中止し、ヒナにターンを譲っている(Schegloff, 2000)。

ヒナが「へー」を産出した直後、自身のターンスペースを確保したうえで次の新しいTCUを産出していることから、ヒナは「へー」の産出で作られている新たな連鎖へ移行してもいい機会を利用していると考えられる。つまり、「へー」の話者ヒナは、「へー」が産出された後という位置において、何か新たなことを開始することが可能であるという認識を示しているといえる。

また、「へー」を言った後に、ヒナが新しいTCUを通して何をしているかに着目したい。断片(5)~(7)では、「へー」が産出された後に「へー」の話者が次に聞き出そうとしているのは、第一部分で強調されたニュース性にかかわることであった。しかし、断片(8)の場合は、「へー」の話者(ヒナ)が聞き出しているのは、第一部分のニュース性と直接にかかわることではない。ヒナが「へー」を言った後に聞き出そうとしている「お部屋は何人?」は、コウが1行目で言っていた「ここ」(コウが滞在している場所)に関連することとして考えられるものの、第一部分で強調されている図書館やサービスが「すごい」ことを踏まえたうえで産出されているようには見えない。つまり、ヒナがここで聞き出そうとしていることは、話題上第一部分と関連させつつも、第一部分で強調されるニュース性にはかかわらないことである。

では、なぜヒナがここであえて第一部分のニュース性にかかわらないことを聞き出しているのだろうか。先述したように、「お部屋は何人?」という質問は、それまで語られているニュースとは直接に関連していないが、ヒナ自身のコウに対する関心を示すものとして理解される。このコウの基本的な生活環境にかかわるような質問は、本来ならば、(図書館のサービスなどに先立って)もっと早い時点で聞くべきであっただろう。それは、ヒナが質問を持ち出す前にわざわざ「今ここ」で何かを思い出したことをマークする「あっ」(田窪・金水, 1997)を用いていることから示されており、質問を行う緊急性を際立たせていると

考えられる。また、そうすることによって、第一部分のニュース性にかかわらないことを聞き出すことの正当性を主張している。

また、この「お部屋は何人？」に対する答え(15行目)が得られた後、ヒナはそれに対して18行目で「あっよかったね.すごいね」と評価し、自身が開始した質問-応答連鎖を収束させている。そして、コウは19行目で「もう図書館ね」と言い、10行目で中断されたことの続きを再開している。このことから、ヒナの9行目の「あっお部屋は何人？」という質問は前の連鎖の軌道から逸脱していることがわかる。

最後にもう1つ断片を見てみたい。断片(9)では、受け手は報告者によって勧められたことを明示的に拒否することを避けるために、「へー」を利用して第一部分のニュース性にかかわらないことを聞き出している。その詳細を見てみよう。

(9)[callfriend_1841_9:32](友人同士であるヨシとレナは「シャイニング」という恐怖映画(ホラー映画)の話をしている。ヨシはその映画を見たが、レナはその映画をまだ見ていない。断片の前でヨシはレナに映画の内容と良さを伝えている。そして、断片の直前では、ヨシは映画を「すごい面白かった」と評価している。))

- 1 ヨシ: ちょっと今度ビデオで見るといいよ.
- 2 レナ: .hhh うん:ビデオ持ってないんだわたし:. hehh [he.h he.h he.h .he.he .hhh
- 3 ヨシ: [ahaha あそうなの?
- 4 レナ: そうなの.heh[hh .h.h hehe .hhhh
- 5 ヨシ: [hehe そんな人いるの世の中に.
- 6 レナ: いるわよ.いっぱい.でもアユミちゃんちでみしてもらえればいいん
- 7 だけどね.
- 8 (0.3)
- 9 ヨシ: ん:::[:そうだね.
- 10 レナ: [でも見たがんないかもしれないな.アユミ[ちゃん.
- 11 ヨシ: [シャイニングはでもね
- 12 有名なやつだから見るといいよ.
- 13 (.)
- 14 レナ: あそう?
- 15 ヨシ: うん
- 16 レナ: ん:::[:::

- 17 ヨシ： [恐怖映画では有名な映画だよ。
 18 (0.2)
 ———→((緩やかな上昇調))
 19 →レナ： へ………でもヨシさん恐怖映画なんか見ないんじゃないの。
 20 (0.2)
 21 ヨシ： 僕あんまり見ないけどね、シャイニングはだからちょっと
 22 興味があつてみたんだけど。
 23 レナ： ふん：[……
 24 ヨシ： [その(.)なんていうのキューブリック監督が作る恐怖映画ってどう
 25 なんだらうって思つてさ。

ヨシは1行目でレナに「ビデオで(『シャイニング』)を見る」ことを勧めている。その勧めに対して、レナはまずビデオデッキを持っていないことを理由として、見るができないことを説明する(2行目)が、6,7行目でまた自ら「アユミ」のおうちで見ることができると説明し、自分がビデオデッキを持っていないことがその映画を見ないことの理由としては十分でないという認識を示す。しかし、10行目でレナはまた「アユミちゃん」が「見たがらんないかもしれない」ことを持ち出し、それを理由に「映画を見ない」、つまり、ヨシの勧めを拒否することをほのめかしている。それに対して、ヨシは11,12行目で「シャイニングは有名なやつだから」と言って映画の知名度を伝えたくて、もう一度、「見るといいよ」と明示的にレナに対して映画を勧めている。ヨシの2度の勧めに対して、レナは14行目で「あそう」を上昇イントネーションで発話し、ヨシが11,12行目で提示した情報(「シャイニングは有名なやつ」)を疑うようなスタンスを示している。レナの疑いの発話に対してヨシは15行目で「うん」と肯定的に答えることで、レナに再度「勧め」に対する反応を示す機会を与えている。これに対して、レナは16行目で「ん」を長く引き延ばして言っているが、明確に勧めを受け入れるスタンスを示さない。そのため、ヨシは17行目でレナがまだ「ん」を発話している途中にもかかわらず、「恐怖映画では有名な映画だよ」と再び映画の知名度を言うことで、「勧める」行為を行っている。

ここで、ヨシの「恐怖映画では有名な映画だよ」という発話について少し記述しておきたい。ヨシは13-14行で一度「シャイニングは有名なやつだから」とレナに伝えている。ここでヨシは繰り返して「有名」であることを挙げていることから、映画の知名度の高さを強調していることがわかるだろう。また、前の文脈からわかるように、レナは話題になっている

映画を見たことがないため、この知名度の高さを知らない可能性がある。それは、ヨシの報告中の発話末に、よりよく知っている認識的スタンスを示す「よ」(Hayano, 2011)が用いられていることから観察可能である。従って、映画の知名度の高さにかんする話はレナにとって「ニュース」として聞かれうる。また、上述したように、この発話はその映画の知名度の高さを伝えると同時に、その映画を見るべき理由を強調するもの、すなわち、映画を見ることを勧める行為の一部として理解可能である。

「勧める」行為がなされた次の位置で、受け手は勧められたことに対して、受け入れるか拒否するかを示すことが期待される。そのような期待がされている位置において、レナは19行目で「へー」とまずヨシによって提供された「映画の知名度」に関する話をニュースとして受け止め、また、ヨシによって示されている強調的スタンスも理解したことを示している。このように、レナは、ヨシの19行目の発話を「ニュース」として受け止めたことを示しているが、ヨシの「勧める」行為には応えていない。では、レナはヨシの「勧める」行為にどのように対応しているのだろうか。「へー」が産出された後のレナの発話に注目したい。

レナは、「へー」を産出した直後、ターンを維持したまま、すぐさま「でもヨシさん恐怖映画なんか見ないんじゃないの」という質問を産出している。ここでレナは、「へー」の産出によって作り出されている新たな連鎖に移行する機会を利用して、次の新しいTCUを産出していることが観察される。相手の「勧め」に対して受け入れか拒否が期待されている中で、レナは、ヨシの「勧め」に対する応答ではなく、「でもヨシさん恐怖映画なんか見ないんじゃないの」という質問を産出する。つまり、断片(8)と同様、レナが新しいTCUにおいて為していることは、これまでの時点で予示されることから外れるものである。そのことを理解したうえで、レナは、質問の前に「でも」を用い、予測される行為から逸れることを標示していると考えられる。では、レナはこの新しいTCUを通して何を達成しているのだろうか。上記で述べたように、「へー」が産出された後、レナはヨシの「勧め」に対応することが期待される。ここでレナは、「ヨシさんが恐怖映画を見るか見ないか」という質問を通して、話題上は第一部分で報告されている「恐怖映画」と関連させつつ、第一部分において強調される「映画の知名度」に関連付けられた「勧め」行為に直接に応えないといった形をとることで、相手からの勧めに対する明示的な拒否を避けることが可能になっている。

断片(8)と(9)では、「へー」の話者は、「へー」を産出することによって作り出されている次の新たな連鎖へ移行する機会を利用することで、第一部分のニュース性にかかわらないことを聞き出すことを可能にしている。また、分析を通して、「へー」の話者が「第一部分のニュース性にかかわらないことを聞き出す」ことには相互行為的な理由があることがわ

かった。断片(8)では、「へー」の話者は、「今ここ」で思い出した「もっと早い時点で聞くべき」ことを聞き出すために、第一部分のニュース性にかかわらないことを聞き出している。そして、断片(9)では、「へー」の話者が相手によって勧められたことを受け入れるか拒否するか明示的に表明することを避けるために、第一部分のニュース性にかかわらないことを聞き出している。

上記の分析から、第二部分において「へー」を使用することは、報告者のニュース性を強調するスタンスに対して同調を示すことのみならず、同調を標示することで連鎖の収束可能性が生じることから、第二部分の産出者(「へー」の話者)が続けて新たな連鎖を開始して、第一部分のニュース性にかかわることを質問したり、また、第一部分のニュース性にかかわらないことを聞き出すことを可能にしていることが分かる。このように、「へー」は、第一部分の報告がなされた次のターンにおいて、次なる連鎖を生み出す手立てとして利用可能な相互行為的資源の1つであると言える。

4.4 まとめ

本章では、「ニュースの報告ーニュースの受け取り」連鎖の第二部分に用いられる「へー」を検討した。第一部分で報告されたニュースを受け止める際に、「あ本当」「あそう」「ふーん」などのような言語形式が用いられうるが、「へー」は特に報告者がニュースを報告する際のニュース性のあることを強調するスタンスに対して、受け手が同調を示すために用いられることが検証された(4.2節)。

また、「へー」の産出によって、それまでの「ニュースの報告ーニュースの受け取り」連鎖は収束可能な位置に至ることが公然化され、次の新たな連鎖へ移行する機会が作り出される。ニュースの受け手、すなわち「へー」の話者は、そのような機会を利用し、「へー」を用いて報告されたニュースを受け止めたことを示した後に、「へー」の母音の引き延しや音調の調整、あるいは吸気をするなどといった手続きを利用して、そのままターンを維持したうえで、第一部分のニュース性にかかわることの質問や、第一部分のニュース性にかかわらないことを聞き出すことを可能にしていると論じた(4.3節)。

第1章で述べたように、「へー」は何らかの新たな情報を受け止めたことを示す標識であり、「情報を提供する」行為と深くかかわっている。また、会話の中で、情報提供者が自発的に情報を提供する場合と、相手に質問にされて、その質問に答える形で情報を提供する場合が見られる。

本章では、情報提供者が自発的に情報を提供する場合、つまり「ニュースの報告」を受け

第4章 基本連鎖の第二部分に用いられる「へー」

止める際に用いられる「へー」を検討した。次章では、質問に答える際に情報が提供される場合、その提供された情報を受け止めるために「へー」がどのように用いられるか検討していく。

第5章 質問－応答連鎖の第三の位置に用いられる「へー」

5.1 はじめに

本章では、「質問－応答」という基本連鎖の次のターン、つまり「第三の位置」(Third Position)に用いられる「へー」を取り上げ、その相互行為上の働きを明らかにしていく。

第1章で述べたように、「情報を提供する」行為を達成するには2つの可能性が考えられる。1つは、情報を提供する話者が自ら情報を提供する場合、そしてもう1つは、他の会話参加者に質問されて、その質問に答える形で情報を提供する場合である。第4章では、前者、つまり、情報を提供する話者が自ら何らかの事柄に関する情報をニュースとして報告する場合に、「へー」がどのように用いられるかを検討した。本章では、後者、つまり、他の会話参加者の質問に答える形で情報を提供する場合に、「へー」がどのように用いられるかを検討する。

質問－応答連鎖の第一部分における「質問」の形式として、疑問詞疑問文、極性疑問文、選択疑問文などといった様々なタイプが考えられる。本研究で収集したデータから、「へー」は、「極性疑問文」型質問¹(以下「Y/N 質問」)－応答連鎖と、「疑問詞疑問文」型質問²(以下「WH 質問」)－応答連鎖の第三の位置に用いられていることが観察され、それぞれの連鎖環境における「へー」の事例数としては、Y/N 質問－応答連鎖で35例、WH 質問－応答連鎖で6例が観察されている。

本章では、まず5.2節で、事例数が多く観察される「Y/N 質問－応答」連鎖における「へー」を検討し、次に5.3節で「WH 質問－応答」連鎖における「へー」を検討する。また、それぞれの連鎖環境において、「ふーん」との比較を通して「へー」の働きへの理解を深めることとする。

分析に入る前に、まず先行研究における第三の位置に用いられる「へー」についての記述を概観しておく。従来の先行研究では、第三の位置に用いられる「へー」を取り上げて系統的に分析したものは見当たらないが、Hayashi(2001)とMori(2006)では「へー」に対する記

¹ 「極性疑問文」型質問とは、ある命題に関して受け手に肯定または否定の応答を求める質問である。本文にもある通り、本章では「極性疑問文」型質問を「Y/N 質問」を呼ぶこととする。

² 「疑問詞疑問文」型質問というのは、「なに」「いつ」「だれ」「どう」「なんで」などのいわゆる疑問詞を用いた質問を指している。本文にもある通り、本章では「疑問詞疑問文」型質問を「WH 質問」を呼ぶこととする。

述が見られる。Hayashi(2001)によれば、「へー」は応答の部分の中に新たな情報が含まれていることを示し、先行する質問-応答連鎖を収束させる働きを持っている(Sequence Closing Third: SCT)³。また、Mori(2006)では、応答が産出された後、特定の韻律特徴を持っている「へー」が用いられることによって、応答についてさらなる説明が求められると応答者に認識され、「へー」の後に応答者が応答を修復することがあると述べている。しかし、上記の先行研究はいずれも1つの長い語りの中に挿入されている連鎖を対象として記述を行ったものであり、基本連鎖(質問-応答連鎖)の第三の位置に用いられる「へー」についてはこれまで十分に検討されていない。そこで、本章では、質問-応答連鎖の第三の位置に用いられる「へー」を分析対象とし、この特定の位置に「へー」がどのように用いられ、また「へー」の使用によって相互行為上どのようなことが達成されるかを明らかにすることを目的とする。

5.2 Y/N 質問-応答連鎖の第三の位置に用いられる「へー」

本節では、Y/N 質問-応答連鎖の第三の位置に用いられる「へー」について検討する。

まず、Y/N 質問-応答連鎖の性質について少し述べておきたい。ヘリテッジ(2008)によれば、質問の形式からは、質問者が質問している事柄についてどのぐらい知識を持っているかという認識的スタンスを読み取ることができる。例えば、“Who were you talking to?”⁴ という WH 質問は、質問者が誰かと話したことは知っているが、その相手に関しては全く知識のない立場から聞いているという認識的スタンスを表している。それに対して、“Were you talking to Manny?” という Y/N 質問は、質問者が話していた相手に関する候補がすでにあり、それを確認するという認識的スタンスを表している。このように、WH 質問に比べて、Y/N 質問からは、質問者が質問している事柄についてどのように認識(想定)しているかをある程度読み取ることができる。また、このような性質を持つ Y/N 質問-応答連鎖の分析を通して、質問者が第一部分の質問において示している認識が第二部分の応答によってどのように変化するか観察することが可能である。

本節では、Y/N 質問-応答連鎖の第三の位置に用いられる「へー」が産出されるまでの過程、つまり、質問者が Y/N 質問を通してどのような認識的スタンスを表し、またその認識が応答の部分によってどのように変化するかという過程に着目することで、「へー」の相互

³ 「へー」が SCT として使用されていることは、高木・細田・森田(2016: 135)においても言及されている。

⁴ 例文はヘリテッジ (2008: 15)より引用している。以下も同様である。

行為上の働きを明らかにしていく。

5.2.1 「想定外」の応答への反応として用いられる「へー」

本節では、事例分析を通して、「へー」が応答者によって提供された「想定外」のことへの反応として使用されていることを示していく。ここでいう「想定外」というのは、分析者による判断ではなく、発話者の質問に組み込まれている想定に対して、それとは食い違う反応が産出されていることに話者自身が志向していることが観察可能であるということである。具体的にどのようなことを指しているのか、まずは断片(1)を見てみよう。

(1)[callhome_2053_2:14]((日本在住の母親(ハル)とアメリカに在住の娘(マイ)との電話会話である。断片の前で、マイはハルにハルの最近の睡眠状況について聞いていた。その会話が終わった後に、ハルは1行目で「何か思い出す」際に使用する言語標識「あ」(田窪・金水,1997)を用いて、マイの兄弟「ナオキ」の就職に関する話題を導入している。))

1 ハル： あナオキがね

2 マイ： うん

3 (0.5)

4 ハル： あ:決まったやっぱり.

((35行、約30秒の内容省略。マイがハルに「ナオキ」が具体的にいつから働き始めるかについて尋ねた後、ハルによって「ナオキ」がまた引っ越すことが話されている。))

40 ハル： もうやえずのね,

41 マイ： うん.

42 ハル： [はずれのほう.

43 (0.8)

44 マイ： ほんとう.

45 ハル： うん.

46 マイ： 小さいとこ_

47 (0.9)

48 ハル： 大きいよ.総合病院だもん.

————→ ((緩やかな上昇調))

49 →マイ： へ:.....

50 ハル： と思うよ.[keke((咳声))]総合だもんだから.

公然化されている。言い換えると、ハルの応答では、質問者マイにとって、「想定外」のことが提示されているのである。そのような状況の中で、質問者マイには、応答の次のターン、つまり、第三の位置において、何らかの形でその想定外のことを受け止めることが期待される。このようにして、質問者は第三の位置において「へー」を用いることによって、応答の部分を想定外のこととして受け止めたことを示し、それと同時に、自身の認識が更新されたことを標示していると考えられる。

また、「へー」によって応答が受け止められたことに伴い、46行目から始まる質問-応答連鎖はいったん収束可能な位置に至ったと認識される。つまり、この「へー」はそれに先行する質問-応答連鎖を収束させているものとして用いられていると理解される(SCT)。しかし、それにもかかわらず、ハルは50行目で自ら「と思うよ.総合だもんだから。」と自身の48行目の答えのターンを部分的に「延長」(increment: Schegloff, 1996)し、48行目で言ったことを繰り返すことで、マイによって提示された想定を否定するための理由を強調している。それに対して、マイは53行目で49行目と同様の反応である「へー」を用いている。ここでも、質問者のマイは「へー」を用いることによって、応答者のハルによって提示された情報を想定外のものとして受け止めたことを示している。

断片(2)においても、質問者が「へー」を用いて、応答者を想定外のこととして受け止めたことを示すことが観察される。その詳細を見てみよう。

(2)[callhome_1966_0:0]((友人同士のユリ(アメリカ在住)とキナ(日本在住)の電話会話である。断片の会話は録音がされた直後のものである。))

- 1 ユリ: あお願いします.
- 2 キナ: あっ会話あの録音を(.)大丈夫です.
- 3 (.)
- 4 ユリ: he.hh[こちらでも会話の録音を:h(0.2)承諾します.
- 5 キナ: [hehe
- 6 (0.2)
- 7 ユリ: あ:大丈夫です.これから話します.
- 8 (0.2)
- 9 ユリ: 元気でしょうか?[hehe
- 10 キナ: [¥元気.¥[haha .h .h でもそんな
- 11 ユリ: [hahah

- 12 キナ： ことゆって、くだらない話してて[いいの?]
- 13 ユリ： [↑あっ]それはね全然かまわないの。
 → ((平板調))
- 14 →キナ： へ…[……]]
- 15 ユリ： [うん.なんか音]声の:
- 16 キナ： うん
- 17 ユリ： 研究みたいで: .hh
- 18 (0.2)
- 19 キナ： ↑今はポコンポコンとか(言って[° る°).
- 20 ユリ： [そうそうそうそう.

1-7行目において、ユリとキナは互いに電話の録音状況について確認している。その確認のやり取りが終わった後に、ユリは9行目「元気でしょうか」と電話の開始部によく観察される「様子伺い」をしている(Schegloff, 1986; Hopper, 1992 など)。そして、その挨拶をした後に、ユリは自ら笑いを産出している。ユリの挨拶に対して、キナは「元気」と答えている。そして、ユリの笑いに対して、キナも笑いで返している(Jefferson, 1979)。

笑いの後、キナは12行目で「でも」と言い、これから何か異なる性質のことを言うことを投射したうえで、「そんなことゆって、くだらない話してていいの」と電話の掛け手であるユリに2人が交わした「相手の様子を探ねる」という会話の話題でいいかどうかについて質問する。

ここで、キナの質問について詳しく見てみたい。ユリは電話録音の協力者の一員であるため、録音するときの可能な話題などについてユリはよく知っていると思われる。ここでキナがユリに「話題」について確認するような質問をするのはまさにそれを志向していると考えられる。また、質問の中で、「くだらない話」という評価語が用いられていることから、キナはユリと交わした「相手の様子を探ねる」のような話題を「くだらない」話題、つまりあまり「よくない」話題として認識していることがわかる。言い換えれば、キナはここで「相手の様子を探ねる」ような話題が「よくない」と想定したうえでユリに確認しているのである。

そのような確認に対して、ユリは13行目で「あっそれは全然かまわないの」と応答することで、「相手の様子を探ねる」ような話題でも「かまわない」、つまり「いい」ことを示している。このように、応答の部分によって、質問者が質問を通して示している自身の想定は

外れていることが公然化される。断片(1)と同様に、質問者キナは、14行目で「へー」を用いて、ユリによって提示された「想定外」のことを受け止めたことを示し、それと同時に、自身の認識が更新されたことを標示しているといえる。

断片(1)と(2)では、質問者はY/N質問の形式を用いて質問し、その質問に対して応答者は明示的に「いいえ」「いや」のような否定的な形式を用いていないが、結果的に質問者が示している「想定」と異なった情報を提示する。そして、質問者は質問-応答連鎖の第三の位置において、「へー」を用いて、応答者によって提示された「想定外」のことを受け止めたことを示している。次の断片(3)においても、質問者にとって「想定外」のことを受け止めたことを示すために「へー」が用いられるが、応答の部分は断片(1)(2)と異なるやり方で行われている。その詳細を見てみよう。

(3)[Y&B_M店_5:45]((断片の前で、2人はS店の「客足が遠のいている」ことについて話していた。話題になっているS店もM店も飲食店であり、両方とも日本各地に店舗があるチェーン店である。))

1 B: つかM店がさ;

2 Y: うん

3 B: なんかお客さんが遠のいてるってよく言ってるよね.

4 (0.5)

5 Y: あ↑そうなの?

6 (.)

7 B: ん::なんか客の対応が客じゃないや,店員の対応が悪すぎて.

8 (0.2)

9 Y: へ:::

10 (0.6)

11 B: って言ってたけど,そうそれもよくわかんない.

12 (0.5)

13 Y: 別に特にそんなすごい店員と出会ったことはないけど,

14 B: ° ん::[:::°

15 Y: [ある?無愛想な店員.

16 (0.2)

17 B: ない.

- 18 (0.8)
- 19 B: でもなんか(0.5)くつろいでると早く出てってくださいみたいな
- 20 (0.2)
- 21 B: こと言われたりするんだって.
- 22 (0.4)
- (平板調)
- 23 →Y: へ……=あでもそれ都会だとあるかも.
- 24 (0.4)
- 25 Y: なんか勉強してたら怒られるとかある.
- 26 (0.3)
- 27 B: やっぱくそ田舎だと違うのかな.

Bは1-3行目において、「M店のお客さんが遠のいている」ことについてYに報告している。それに対して、Yは5行目で上昇イントネーションを伴った「あそうなの?」と意外性を表し、その報告をそのまま受け入れられないスタンスを示している。そのため、0.1秒の間合い(6行目)の後、Bは7行目で、「なんか店員の対応が悪すぎて」と説明を付け加え、それを通して、Yに自身が報告したことをもう一回受け入れる機会を作り出している。それに対して、Yは9行目で緩やかな上昇調の「へ……」を用いて、Bによって付け加えられた説明を新たな情報を提供するものとして受け止めている⁶。

ここで、Yの9行目の身体的ふるまいに注目したい。Bの7行目の報告が終わった後、Yは「へ……」と反応しているが、「へ……」という言葉が発すると同時に、Bを見つめながら、目を大きくし、そして上半身をやや後ろに倒している。このふるまいから、Yは「へ……」を言うことでBの報告を受け止めているものの、その報告に対して「驚き」や「懐疑」も提示しているように見える。実際、Bもそのように理解し、0.6秒の間合いの後、11行目で「っと言ってたけど」と言い、7行目の報告を「自分の経験ではなく、あくまでも他人から聞いたことである」と明言したうえで、「そうそれぞれもよくわかんない」と言うことで、「店員の対応が悪すぎて」に関してこれ以上情報を提供することができないことを明示している。

⁶ 9行目の「へ……」という発話は、第三の位置に用いられるものと同様のものに見えるかもしれない。しかし5行目のYの「あそうなの?」は、Bの1-3行目の発話への反応として用いられているため、「基本連鎖」の第一部分ではないものとして理解されるだろう。そのため、9行目の「へ……」は、本章で検討している第三の位置に用いられる「へー」と区別して捉えている。

つまり、BはここでYが示している「驚き」や「懷疑」に対しては、これ以上対応することができないと示しており、話題を終わらせようとしている。その後、会話参加者が誰もターンを取らないため、0.5秒の間合いが生じている。

Bの報告に対してYが「驚き」や「懷疑」を提示していることは、Yの13行目の発話からもわかる。Yは13行目で、「そんなすごい店員」を用いてBによって報告された「対応の悪い店員」を指して、そのような店員に出会ったことがないと自身の経験を語っている。そうすることによって、YはBの7行目の説明に対して実は完全には納得していないことを示す。そして、続けて15行目でYはBに「ある?無愛想な店員。」とBの経験について聞いている。その質問に対して、Bは17行目で「ない」と答えている。その答えに対して、Yは特に何らかの「受け止める」反応を示さず、Bをただ見つめている(18行目)。そして、Bは19-21行目で自ら「でもなんかくつろいでると早く出てってくださいみたいなこと言われたりするんだって」と新たな情報を付け加えている。その付け加えられた情報に対して、Yは23行目で「へー」と反応を示している。

ここで、13行目~21行目で行われているやりとりをもう少し詳しく見てみたい。Bは1-7行目において「M店の店員の対応が悪すぎる」という情報を提供し、Yはそれに対して「へ…」と受け止めているが、その報告を完全に受け入れたとは言い難い。それを裏付けるのは、Y自身によって語られている「別に特にそんなすごい店員と出会ったことはない」(13行目)という経験である。つまり、Yは「対応が悪い」店員に出会ったことがないため「M店に無愛想な店員がいる」という想定がなく、Bの報告を完全には受け入れられないと考えられる。そして、15行目でYはBに「ある?無愛想な店員。」とBの経験について尋ねているが、それと同時に「M店に無愛想な店員がない」という自身の認識についてBに確かめようとしていることとして理解される。そのような質問はBによって「ない」(17行目)と答えられると、「M店に無愛想な店員がない」という認識が確かめられる。そのため、Yもその応答に対して特に明示的に何かそれを受け止めたことを示さずに、ただBを見つめている。しかし、Bによって「でもなんかくつろいでると早く出てってくださいみたいなこと言われたりするんだって」という情報が新たに提示されると、Yの認識は「M店に無愛想な店員がない」から、「くつろいでると早く出てってくださいみたいなこと」を言うような「無愛想な店員がいる」という認識に更新されることになる。つまり、Yの認識はBの情報提供によって更新されていることが公然化されている。このことから、YはBによって「想定外」のことが提供されていることがわかる。そのように、質問者Yは23行目で「へー」を用いてBによって提示された「想定外」の情報を受け止めたことを示し、そ

れと同時に、自身の認識が更新されたことを標示していると考えられる。

また、Yは「へー」を言った後に、間髪を入れずに続けて「あでもそれ都会だとあるかも」と新たなTCUを産出し、Bが19-21行目で言ったことに賛同を示している。そして、続けて25行目でYは「なんか勉強してたら怒られるとかある」と言い、具体的に店員に怒られる行動を挙げることによって、Bが言った「くつろいでると早く出てってくださいみたいなこと言われたりする」ことに賛同を示している。YがこのようにBによって提供された情報に賛同を示すことは、Yの認識がすでに更新されていることの裏付けとして理解される。

断片(3)においては、応答者の応答(17行目と19-21行目)によって、質問者の反応はそれぞれ異なっている(18行目と23行目)ことが確認できる。このことから、「へー」という反応は任意に産出されるわけではなく、応答者によって提供された想定外のことに応じたからこそその反応であると言えよう。

最後に、もう1つの事例を見てみよう。断片(1)~(3)では、質問者の質問に対して、応答者は質問者が示している想定と異なっている側面を提示し、質問者にとって想定外のことを提供している。以下の断片(4)における応答の部分では、質問者が示している想定と異なる側面を提示しているというよりも、質問者の想定を肯定しているように見える。しかし、応答の次のターンで質問者は「へー」(10行目)を産出している。では、なぜそこで「へー」が用いられるのだろうか。断片の詳細を見てみよう。

(4)[C&K_担任_5:34]((断片の前で、Cは2人の共通の友人が先生になった話をKに報告した。1行目のCによる「先生めっちゃ先生やってる」という発話は、友人が先生になったことへの評価と理解される。そして、その評価の後、Cは「担任を持って」と言い、友人が「先生になった」だけではなく、「担任を持っている」と新たに情報を提供している。))

- 1 C: 先生めっちゃ先生やってる.[担任持って.]
- 2 K: [すごい]
- 3 K: へ:すごい.
- 4 C: すごっすごいよな.
- 5 K: うん.
- 6 C: と-卒業してすぐに先生になって担任持つん(0.2)だと思ったけど,
- 7 >持つもん[なの<?]
- 8 K: [ある]持つものじゃない.
- 9 (0.3)

→ (緩やかな上昇調)

- 10 →C: [へ……]
- 11 K: [そ-そつ]でも.
- 12 (0.5)
- 13 C: 普通はなんかこう副担任とか,
- 14 K: あ……[:]
- 15 C: [教科]担任だけ(.)から始まるんかと思っと思った.
- 16 K: .hh(0.2)わかんないな.中学とかだと知らないけど.
- 17 (0.3)
- 18 K: [あでも]全然知らないわ¥やっぱ[教師のこ(h)と(h)¥.
- 19 C: [あ::] [heheheha

Cによって報告されている1行目の「(友人が)担任を持って」という新たな情報に対して、Kは3行目「へ:すごい」と評価している。その評価に対して、Cも4行目で「すごっすごいよな」とCの評価に同意を示している(Pomerantz, 1984)。また、Cの評価はKによって「うん」(5行目)と承認されている。それによって、Cによる「友人が先生になっている、担任を持っている」という報告が受け止められ、そのことについての評価が一致して、連鎖が収束に向かうことが可能な位置に達したといえる。つまり、順番交替していい位置に至っていると認識される。しかし、Cは6行目で「卒業してすぐに先生になって担任持つん(0.2)だなと思ったけど」と感想を述べる形で、友人が「卒業してすぐに担任を持つ」ことに対して肯定的評価を示したうえで、Kに「持つもんなの?」と、「卒業してすぐに担任を持つ」ものとして理解していかどうか質問する。その質問に対して、Kは「持つものじゃない」と端的に、肯定的に答えている。その答えに対して、Cは10行目で「へー」と反応している。

では、10行目の「へー」がどのように用いられているか見てみたい。先述したように、Cは6行目で「卒業してすぐに先生になって担任を持つん(0.2)だなと思ったけど」と述べることによって、「卒業してすぐに担任を持つ」ということに対して、「意外に感じた」ことを明確に示している。そして、それに続くCによる「持つもんなの?」という質問は、Cが意外に感じていることについて、Kに確認を求めるものとして理解される。これに対するKの答えは、Cが意外に感じた「卒業してすぐに担任を持つ」ことが事実であるという確認を与えるものである。つまり、Kの答えは、Cにとって「想定外」の事実を明示的に認めるものである。これに対して、Cは「へー」を用いて、Kの応答を受け止めている。さらに、13-

15行目において、Cは、「卒業して担任を持つ」かどうかということに対して、「普通はなんかこう副担任とか、教科担任だけから始まるんかと思っと思った」と認識が更新される前の自身の考えを「過去の考え」として述べている。このことを通して、Cは自分がなぜ「卒業してすぐに担任を持つ」ことに対して意外に感じていたかを明らかにし、「想定外」の事実を知らされて認識が更新されたことを公然化している。

以上、断片(1)～(4)で分析したように、Y/N 質問を通して示されている質問者の認識が、応答の部分において提供された「想定外」のことによって更新されたことが明らかになった場合、応答の次のターン、つまり Y/N 質問－応答連鎖の第三の位置において、質問者は「へー」を用いることによって、「想定外」のことを受け止めたことを示し、それと同時に、自身の認識が更新されたことを標示している。このように、質問－応答連鎖において、「へー」は応答者によって提示された「想定外」の情報を受け止めた際に用いられる資源であると言えよう。

5.2.2 Y/N 質問－応答連鎖の第三の位置に用いられる「ふーん」との比較

前節では、質問－応答連鎖において、「へー」は応答者によって提示された「想定外」のことを受け止めた際に利用できる言語資源の1つであることを検討した。これをよりよく理解するために、本節では、Y/N 質問－応答連鎖の第三の位置に用いられる「ふーん」の事例を分析したうえで、「へー」との比較を行う。では、まず Y/N 質問－応答連鎖の第三の位置に「ふーん」が用いられている断片(5)を見てみよう。

(5)[callhome_1041_5:09]((アメリカにいる父親テツと日本にいる息子ヒロとの電話会話である。))

1 テツ： あの::ケンちゃん遊びに来たの?

2 (0.3)

3 ヒロ： うん.

4 テツ： 一緒に遊んだ?

5 (0.2)

6 ヒロ： うん.

7 →テツ： ふ……ん.お祭りは?

8 (.)

9 ヒロ： ん?

- 10 テツ： お祭りどうだったのよ。
11 (0.4)
12 ヒロ： 楽しかった。
13 テツ： ふん……。
14 (0.6)
15 テツ： な-何が楽しかったの？
16 (0.9)
17 ヒロ： ん::と:ね,
18 テツ： うん。
19 (2.7)
20 ヒロ： .hhh(0.4) ん……
21 (1.7)
22 テツ： なんか買ったの?
23 (0.2)
24 ヒロ： うん買った。
25 →テツ： ふ……ん.何買ったのよ。
26 (2.2)
27 テツ： .hh(0.2)忘れちゃった？
28 ヒロ： うん。
29 (0.7)
30 テツ： あヒロ,通知表すごかったね,よかったね。
31 (0.6)
32 ヒロ： うん。
33 テツ： ね::
34 (0.3)
35 ヒロ： うん。
36 テツ： 羊さん元気でのいる？
37 (0.2)
38 ヒロ： うん。
39 (2.1)
40 テツ： 餌いっぱい食べる？

- 41 (0.3)
- 42 ヒロ： なに?
- 43 テツ： え-[餌いっぱい食べてる?]
- 44 ヒロ： [うん]
- 45 ヒロ： うん.
- 46 →テツ： ふ……ん!ほうか.
- 47 (0.3)
- 48 ヒロ： うん.
- 49 テツ： お父さんの声そっちでどのぐらい聞こえる?普通の電話のように聞こえる?
- 50 ヒロ： うん.
- 51 →テツ： ふ……ん.不思議でしょう.
- 52 ヒロ： うん
- 53 (.)
- 54 テツ： ね∴.
- 55 (.)
- 56 テツ： [これ海を越えてくんだよ.]
- 57 ヒロ： [うん]

断片(5)において、Y/N 質問-応答連鎖の第三の位置に用いられる「ふーん」は、7行目、25行目、46行目、51行目の4箇所を確認される⁷。以下では、この4箇所「ふーん」がどのように用いられているかを分析していく。

まず、7行目の「ふーん」が産出されるまでの経緯を見てみよう。テツは1行目でヒロに「ケンちゃん遊びに来た」かどうかについて質問している。その質問はヒロによって「うん」と肯定される(3行目)。その質問を踏まえて、テツは続けて4行目で「(ケンちゃんと)一緒に遊んだ?」と質問する。それに対して、ヒロは6行目で端的に「うん」と言い、肯定的に答える。そして、その答えに対して、テツは7行目で「ふーん」と反応している。

ここで、「ふーん」が用いられている質問-応答連鎖の特徴について考察してみたい。上述したように、4行目のテツによる「一緒に遊んだ?」という質問は、テツがヒロに「ケン

⁷ 13行目においても「ふーん」が用いられている。しかし、この「ふーん」が出現される連鎖環境は Y/N 質問-応答連鎖ではなく、WH 質問-応答連鎖であるため、ここでは検討する対象から除外している。

ちゃん遊びに来た」ということを確認したうえで産出されている。つまり、「ケンちゃん遊びに来た」と確認できた時点で、テツは自分の息子が「ケンちゃんと一緒に遊んだ」ということを想定していると思われる。そのため、「一緒に遊んだ?」という質問に対しては、肯定的な答えが想定されていると理解可能である。実際、その質問は、ヒロによって肯定的に答えられている。そのように、第三の位置において、質問者テツは「ふーん」を用いて、自身が想定した通りの答えを承認しているのである。

他の三箇所の第一部分の質問、22行目の「なんか買ったの?」、43行目の「餌いっぱい食べてる?」と49行目の「普通の電話のように聞こえる?」に関しても、テツが質問をする時点において、息子から肯定的な答えが返ってくることが想定される。実際、それぞれの質問に対して、息子ヒロによって肯定的に答えられると、テツは「ふーん」を用いて、息子の想定通りの答えを承認していると理解される。

断片(1)～(4)では、応答の部分において、質問者にとって想定外のことが提供されるため、第三の位置において、質問者は「へー」を用いて、その想定外のことを受け止めたことを示す。それに対して、断片(5)では、応答の部分において、質問者にとって想定通りのことが答えられているため、第三の位置において、質問者は「へー」ではなく、「ふーん」を用いてその答えを承認していることを示している。

5.3 WH 質問－応答連鎖の第三の位置に用いられる「へー」

5.2節で、Y/N 質問－応答連鎖の第三の位置に用いられる「へー」を検討した。また、分析を通して、「へー」は応答者によって提供された「想定外」のことを受け止めた際に用いられる資源であることが確認された。5.2節の冒頭で説明したように、Y/N 質問－応答連鎖に比べて、WH 質問－応答連鎖からは、質問者が質問している事柄に対してどのような想定を持っているかを読み取ることが難しい。では、WH 質問－応答連鎖において、「へー」はどのように用いられているのだろうか。以下、その詳細について見ていきたい。

5.3.1 応答者がある情報を強調するスタンスに同調を示す「へー」

まず、断片(6)を見てみよう。

(6)[callfriend_1773_9:33]((アメリカに滞在している友人関係にあるルナとリクの電話会話である。))

1 リク： >あおれも車買った:<

- 2 (0.3)
- 3 ルナ： え::?
- 4 リク： うん
- 5 (0.6)
- 6 ルナ： うそ.なに?
- 7 (0.5)
- 8 リク： 買った買った.うれしい.
- 9 (0.6)
- 10 リク： 安くてよかった:みたいな.
- 11 ルナ： 何[買ったの?
- 12 リク： [(安くて)
- 13 リク： ん?
- 14 (.)
- 15 リク： スポーツカーみたいな.
- 16 ルナ： うそ.なに?教えてよ.[カマロとか?
- 17 リク： [(ま-)
- 18 リク： あ:そんなそゆうの買わない.ガスゲツ-ガス()日本車日本車.
- 19 (.)
- 20 ルナ： なに[:?
- 21 リク： [三菱のスタリオンていうね.
- 22 ルナ： ↓え::[:::
- 23 リク： [三菱車の初めてのスポーツカーみたいな.
- 24 (0.2)
- 25 ルナ： いくら:?
- 26 リク： 安かった.それをね,<30>ぐらい.
- 27 (.)
- (緩やかな上昇調)
- 28 →ルナ： へ:::[:::
- 29 リク： [うん.よかった.:ちょうどいい.[みつけ-
- 30 ルナ： [ちょっとウエストバージニアまで
- 31 走ってきたら?

32 (0.3)

33 リク： や:それ[は:]..

34 ルナ： [¥遠いって¥ hehe

まず、28行目の「へー」が産出されるまでの経緯を簡単に見ておきたい。リクは1-10行目において、車を買ったと報告している。その報告が終わった後、ルナは11行目で「何買ったの?」と質問し、その質問に対して、リクは15行目で「スポーツカーみたいな」と答える。その答えを聞いたルナは、16行目でまず「うそ」とリクの答えに驚きを示した後、「なに?教えてよ。」と明示的にリクにどの車種を買ったのかを答えてもらうように促している。ルナのこの行為から、15行目のリクの答えは、ルナの「何買ったの?」(11行目)という質問に対して不十分であることがわかる。ルナの促しに対して、リクは17行目で「ま-」と言い、答えようとするが、そこでルナも「カマロとか?」とリクの発話と重なってリクに答えの候補を提示することによって、さらに答えを促している。ルナが提示した候補に対して、リクは18行目で、「あそんなそゆうの買わない」とルナの候補を否定し、また続けて「日本車」を買ったと答える。その答えを聞いたルナは20行目でまた「なに?」とリクに具体的にどのような日本車を買ったかについて質問する。その質問に対して、リクは21,23行目で具体的に「三菱車のスポーツカーであるスタリオン」と答える。

0.2秒の間合い(24行目)の後、ルナは25行目で「いくら?」と、リクが買った車の値段について質問する。その質問に対して、リクは26行目でまず「安かった」と値段の安さを評価したうえで、「それをね,<30>ぐらい」⁸と具体的な金額を提示することで答える。また、ここで、リクは「30」という金額をゆっくりとしたスピードで発音しており、「30」という金額の「安さ」を際立たせている。そのように、リクは自身が買った車の値段の安さを強調して答えている。受け手ルナはリクが答えを通して示している「値段の安さを強調している」というスタンスに理解をし、「へー」を用いてリクが示しているスタンスに同調を示していると思われる。

断片(6)のように、第一部分の「いくら?」という質問からは、質問者が質問している値段についてどのように想定しているか(安いと想定しているか、あるいは、高いと想定しているかなど)を読み取ることが難しいが、第二部分の応答者の答え方に対して、質問者は第三の位置において「へー」を用いて敏感に反応している。この断片(6)では、質問者は「へー」

⁸ この「30」は、「30万円」の意味で用いられていると推測される。

を用いて応答者が強調している値段の安さに同調を示している。

以下の断片(7)においても、「へー」は応答者によって強調されることに同調を示すために用いられていることが確認される。ここであらかじめ、断片(7)の WH 質問(14行目)は基本連鎖の第一部分というより、その質問に先行する発話に依存する形で産出されていることを述べておきたい。この意味で、断片(7)の WH 質問を基本連鎖の第一部分として扱うことについては検討の余地があると思われる。そのため、ひとまず断片(7)の14行目の発話を、実質的に Y/N 質問ではない応答を要求する質問であるという意味で捉えて分析を進めていく。以下、断片(7)の詳細を見ていきたい。

(7)[callhome_2199_5:13]((アメリカにいるケイコ(K)と日本にいるマユミ(M)との電話会話である。断片の前で、Kは自身の彼氏のことを話しており、「一番上の息子だから、期待が大きい」ということを話した。))

- 1 K: だからその親の期待にね;
- 2 (0.2)
- 3 M: ん[:
- 4 K: [にそられ:浴うような感じの:h 生き方をね彼はしていかなきゃ
- 5 いけないね::,(.)[な:んととなくね:私重荷になってしまうというね.
- 6 M: [うん
- 7 (0.2)
- 8 M: あああ[::()
- 9 K: [う:んわかる_↑ やっぱ .hh [やっぱ<一番>上の息子と
- 10 M: [>わかる.<
- 11 K: 結婚するのはね:,.h 私は(.)ちょっと反対なのね.¥二番目三番目
- 12 四番目 hehehh[五番目でも¥
- 13 M: [のほうがいいよ.でも::
- 14 K: わたしは:?
- 15 (.)
- 16 M: ererer わたくしの旦那は長男よ.
- 17 K: うそ(h):(h). .hh [たいへ
- 18 M: [長男で,.h なおかつ 7人兄弟よ.
- 19 (0.3)

→ (上昇調)

- 20 →K: ↑ へhehehh う[そみたい。
 21 M: [he
 22 (0.2)
 23 M: .hh[hh ね]:
 24 K: [ほんとに:?]
 25 M: うん…:
 26 (.)
 27 M: [だけど…:
 28 K: [(家)
 29 K: うん
 30 M: こっちにいるのは兄弟は誰もいないの、みんな東京にいるの。
 31 (0.3)
 32 K: ほんとに…?:
 33 M: うん…:

ケイコは1-11行目において、自身の経験を述べたうえで、「一番上の息子と結婚するのはちょっと反対」(11行目)と自身の意見を述べている。その意見に対して、マユミは13行目でケイコの発話がまだ終わらない位置で「のほうがいいよ.でも…:」と賛同を示している。

そして、ケイコは14行目で「わたしは:？」を用いて、マユミの状況について質問する。「何番目の息子と結婚する」と話された後のケイコの「わたしは:？」という質問は、マユミが何番目の息子と結婚したかということを知っていると理解される。実際、マユミもそのように理解し、16行目で「わたくしの旦那は長男よ。」と答えている。その答えを聞いたケイコは、17行目で笑いながら「うそ」と意外性を示している。そして、ケイコが「たいへ」⁹を用いてマユミが「長男」と結婚していることに対して評価しようとするところに、マユミは自ら「長男で、なおかつ 7人兄弟よ。」と16行目で答えた「長男」を繰り返したうえで、自身の答えを延長している。また、ここで、マユミは「7人兄弟」を強く発音することで、自身の旦那が「長男」であるうえに、「7人兄弟」でもあることを際立たせている。そして、ケイコはマユミが強調することを理解し、20行目で「へー」とマユミによって強調された

⁹ ここの「たいへ」は「大変」を示すものと推測される。

「7人兄弟」に同調を示している。

断片(6)と(7)で分析したように、WH 質問－応答連鎖において、質問者は第三の位置で「へー」を用いることによって、応答者が応答の部分である情報を強調するスタンスに対して同調を示している。この働きは、第4章で検討した「ニュースの報告－ニュースの受け取り」連鎖の第二部分に用いられる「へー」の働きと一致している。このことから、「へー」が用いられる位置と関係なく、情報を提供する話者が情報を提供する際に何かを強調するスタンスを示していれば、情報を受け止める話者が「へー」を用いてその強調するスタンスに同調を示すことができるといえる。

5.3.2 WH 質問－応答連鎖の第三の位置に用いられる「ふーん」との比較

では、WH 質問－応答連鎖の第三の位置に「ふーん」はどのように用いられているのだろうか。次の断片(8)を見てみたい。断片(8)は高木・細田・森田(2016:136)より引用している事例である。

(8)[M&T]

- 1 M : いま:は何してんの::?
- 2 T : いまはちょっと:(1.0)ネットしている.
- 3 →M : ふ:::ん.
- 4 ()
- 5 M : じゅんび::?

1行目のMの「いま何してんの?」という質問に対して、Tは2行目で「いまはちょっとネットしている。」と質問によって求められている情報を答える。そして質問者Mは3行目で「ふーん」とTの答えを新たな情報を提供したものとして受け止めている。

断片(6)、(7)と異なり、質問者からされた質問に対して、断片(8)の応答者は質問者が求めている情報を提供しているが、特に情報に関する何かを強調しているわけではない。このように、「ふーん」が用いられている連鎖環境と「へー」が用いられている連鎖環境はそれぞれ異なっている。そして、それぞれの連鎖環境において、質問者は、第三の位置において、それぞれの応答に敏感に反応する形で異なった反応を示しているのである。

最後に、WH 質問－応答連鎖の第三の位置に「ふーん」が用いられている例をもう1つ見てみたい。

(9)[callhome_1586_0:8]((アメリカに滞在する娘マオと日本に在住する母モリとの電話会話である。3行目の「水田さん」は、これからアメリカに行く予定の人であり、日本からマオの荷物をアメリカに持っていくことを頼まれている。))

1 モリ： ほでそれで;

2 マオ： うん

3 モリ： あのう水田さんが行く時,それで,あのう 700,800 円とかね;

4 マオ： うん

5 モリ： あのういっばい買ったよ.

6 (0.7)

7 モリ： [お土産よ.

8 マオ： [あっそ:う.

9 モリ： うん.

10 (0.2)

11 マオ： でその 15,000 円のがいっこ…?

12 モリ： ええ一個.

((約 1 分 30 秒間の会話省略。「15,000 円」の話をした後、モリは具体的にどのような「700、800 円」のものを買ったかを説明する。))

13 マオ： 私がさそういう飾り物もらったってうれしくないからさ全然.

14 (0.4)

15 マオ： [実用的なもんじゃないと….

16 モリ： [そ…う?

17 モリ： だからペン立てだから実用的だよ.

18 (0.8)

19 マオ： ふん[ペン立てだってなんて使えないも…ん.

20 モリ： [あれは.

21 モリ： そ…う?

22 マオ： う…:…:…:ん

23 (.)

24 モリ： そいでまああなたにつぼんの:独特のあの…:=

25 マオ： =ま[あね:

26 モリ： [木細工だからね:

- 27 マオ： う::ん. .hh それは(.)な-なな 800 円ならいいけど::[:::]
- 28 モリ： [う::ん]
- 29 モリ： これ 12 個買ってるよ.
- 30 (.)
- 31 マオ： ああそう.
- 32 モリ： う:ん.
- 33 (0.2)
- 34 モリ： ほで:,h あのう,.hh 小銭入れをね,浮き絵の描いた.
- 35 (.)
- 36 マオ： う:::[:ん]
- 37 モリ： [これこれを五つ買ってる.
- 38 マオ： それいくら::?
- 39 (0.6)
- 40 モリ： これ?
- 41 マオ： うん.
- 42 モリ： え:とね,(.)これ 720 円.
- 43 (0.5)
- 44 →マオ： ふ:::[:ん]. .h で[木細工も 1000 円ぐらい?[700 ぐらい?
- 45 モリ： [うん. [うんこれ 800 円からね.
- 46 マオ： うん
- 47 モリ： うん大体 800 円から er うんあのう 750 とかこういうの.
- 48 →マオ： ふ:::[:ん]
- 49 モリ： [700 円とか.
- 50 (.)
- 51 マオ： そっかそっか:[ふ:ん.
- 52 モリ： [う:ん.
- 53 マオ： .hh じゃその(.)熊さんの木彫りはまた考えるよ.

1-37 行目において、モリはマオに、マオのためにどのようなお土産を買ったかを報告している。その中で、34-37 行目において、モリは「浮き絵の描いた小銭入れを五つ買ってる」と報告している。その報告が終わった後、マオは 38 行目で「それいくら?」とモリが報告し

た「小銭入れ」の金額について質問する。その質問に対して、モリは42行目で「え:とね,これ720円」と答える。その答えに対して、マオは44行目で「ふーん」と受け止めている。

ここで、なぜマオが「ふーん」を用いて反応するかについて考察してみたい。お土産全体の金額について、モリは3行目ですでに「700,800とか」のように報告している。そのため、マオはその時点からお土産の金額について大体把握している。それから、13-32行目においてなされている「木細工」のお土産に関するやり取りでは、マオは「木細工」というお土産を好まないが、金額が「なな800円ならいい」と自身の認識を明確に示している。つまり、マオの中では、お土産の金額についてある程度の想定があることがわかる。さらに、42行目のモリによる「え:とね,これ720円」という答えは、マオにとって想定通りの金額であることが理解可能である。したがって、44行目の「ふーん」は想定通りの答えを受け止めるために用いられていると考えられる。次の44-47行目においてなされている「木細工」の金額に関する質問－応答連鎖からも、同様の現象が観察される。つまり、応答の部分において、質問者マオにとって想定通りの答えが提供されているため、48行目で「ふーん」が用いられていると言える。

断片(9)で分析したように、WH 質問がなされる前に、質問者は質問する事柄、ここでは「お土産の値段」について自身の想定を示している。そのため、質問－応答連鎖を通して、質問者の想定が応答者の応答からどのように影響を与えられるか観察することができた。また、断片(9)においても、質問者の質問に対して、応答者は応答の部分で単に質問者が求める情報を提供しており、情報に関する何かのことを強調しているわけではない。そのため、質問者は、「へー」ではなく「ふーん」と応答を受け止めている

以上、断片(6)～(9)を分析してわかるように、WH 質問－応答連鎖の第三の位置において、「ふーん」は単に応答の部分を受け止めたことを示すために用いられるが、「へー」は応答者がある情報を強調するスタンスに同調を示すために用いられる。

5.4 まとめ

以上、本章では、Y/N 質問－応答連鎖および WH 質問－応答連鎖の第三の位置に用いられる「へー」を分析し、またそれぞれの連鎖環境において、「ふーん」との比較も行った。分析を通して、以下のことがわかった。Y/N 質問－応答連鎖の第三の位置において、「へー」は「想定外」の応答への反応として用いられるが、「ふーん」は「想定通り」の応答への反応として用いられる。また、WH 質問－応答連鎖の第三の位置において、「へー」は応答者がある情報を強調するスタンスに同調を示すために用いられるが、「ふーん」は単に応答の

部分を受け止めたことを示すために用いられる。

第3章の話し手がTCUを産出する途中に受け手によって用いられる「へー」、第4章の基本連鎖の第二部分に用いられる「へー」、本章の質問-応答連鎖の次のターンに用いられる「へー」は、いずれも先行発話の中で提供された新たな情報に対する反応として使用されているものである。このように「へー」が使用されている一方で、先行発話の中で特に何か新たな情報が提供されていないにもかかわらず使用される「へー」も観察される。そのような場合「へー」はどのように使用されているのだろうか。次章では、その問題を取り上げる。

第6章 一連の連鎖が収束可能な位置に至った後に用いられる「へー」

6.1 はじめに

第3章、第4章、第5章では、それぞれ話し手がTCUを産出している途中、「ニュースの報告—ニュースの受け取り」連鎖の第二部分、そして「質問—応答」連鎖の次のターンに用いられる「へー」を観察してきた。上記の3つの位置に用いられる「へー」は、すべて先行発話の中で何らかの新たな情報が提供され、その新たな情報への反応として使用されているものである。

しかし、先行する発話の中で特に何か新たな情報が提供されていないように見える場合においても、「へー」がしばしば用いられる。本章は、そのような、「へー」の直前の発話の中で特に何か新たな情報が提供されておらず、一見「へー」の産出が奇異に見えるが、「へー」が産出されるまでの経緯をたどっていくと、連鎖組織上関連付けられているひと連なりの連鎖(本章で「一連の連鎖」¹と呼ぶ)全体とかがかかわっている「へー」を取り上げる。

本章では、一連の連鎖が収束可能な位置に至った後に産出される「へー」を分析対象とし、なぜ「へー」はそういった一連の連鎖が収束可能な位置に至った後に産出されうるか、また、「へー」の産出によって相互行為的にどのようなことが達成されるかを明らかにすることを目的とする。

また、前述したように、Mori(2006)において、「へー」の働きは「へー」が産出されているプロソディーと深くかかわっていると指摘されている。本章で扱う「へー」は全て平板調のイントネーションで、かつ音が引き延ばされて発音されているものとなっている。本章で取り上げる事例に関して、トランスクリプト上では、「へー」の音調の表記を掲載しないこととする。

6.2 「一連の連鎖」とは

本節では、以下の断片(1)を例に、「一連の連鎖」が具体的にどのようなものを指しているか説明していく。

¹ 「一連の連鎖」が具体的にどのようなものを指しているかは6.2節で詳述する。

(1)[N&S_住宅手当_26:21]((会話収録時、NとSはそれぞれ就職する会社の内定を得ている。断片の前では、会社の寮が話題になっており、Sは「寮に住みたくない」と言った。))

- 1 N: え:でもあれでしょ,住宅手当は出るでしょ.
 2 (0.2)
 3 S: 住宅手当が(.)独身のうちは出ないんだよ.
 4 N: あそうなの.[=じゃ早く結婚するしかないね.
 5 S: [うん
 6 S: そう.
 7 (1.2)
 8 N: え::[:あじゃ独身のやつ寮入れ[みたいな感じなんだ.
 9 S: [そうなんだよね. [そうそうそうそう.
 10 (0.4)
 11 S: 独身のやつ寮に入るか,自宅から通えるやつは通わないといけない.
 12 (0.3)
 13 N: えでももし一人暮らししたいってなったら,自費で[できるでしょ.
 14 S: [そうそうそう.
 15 (0.8)
 16 N: でも安いんじゃない○○ら辺.
 ((○○はSが入社する予定の会社の所在地))
 17 S: うん,多分△△と変わらないよね.
 ((△△は2人が住んでいる市の名前))
 18 (1.3)
 19 →N: へ:::[:
 20 S: [や:ばかったよ.(0.3)なんもなかった.

まず、「へー」の直前のやり取りを見てみよう。16行目のNの発話は、N自身が推測した「○○ら辺(Sが入社する予定の所在地の家賃)が安い」ことをSに確認するものとして理解できる。また、ここで「じゃない」という形式が用いられているため、このNの推測はNにとって確信の高いものとして理解できる。それに対して、Sは17行目でまず「うん」と同意を示し、2人が住んでいる市と変わらないことを挙げ、「安い」根拠を述べる。つまり、16-17行目において、Nが自身の推測についてSに確認を求め、そしてその確認がSに

よって肯定されるというやり取りが行われている。このようなやり取りから、19行目の「へー」の話者Nにとって特に驚くべき新情報が提供されているわけではないことがわかるだろう。しかし、このやり取りの後、Nは「へー」を産出している。では、なぜこの位置で「へー」が産出されるのだろうか。それを解明するためには、断片全体を見る必要がある。

Nは1行目でSに「住宅手当」について、自身の推測したこと、つまり「(入社してから、)住宅手当が出る」ことについてSに確認を要請する。この推測に対して、Sはすぐに答えを産出せず(2行目)、3行目で「独身のうちは出ない」と「独身」を際立たせてNの推測を部分的に否定した答えを産出することで、Nの推測に対する「不同意」を示す。このやり取りから、「住宅手当」が出るかどうかということについてNとSの間に認識の相違が生じていることがわかる(Heritage, 2012a, 2012b)。このことは、3行目の発話末の「よ」によって「住宅手当」に関してSの方がよりよく知っているという認識的スタンスが示されている(Hayano, 2011)ことによっても観察可能である。

Sの3行目の答えに対して、Nは4行目でまず「あ」と自身の認識の変化を示した(Endo, 2018)後、「そうなの」とSの答えを意外な情報が含まれているものとして受け止めている。また、その後Nはすぐに「じゃ」と発し、Sの3行目の答えを踏まえてそれに関する理解候補を述べようとすることを投射する。実際、「じゃ」を言った後、Nは「早く結婚するしかないね」と、「独身のうちは(住宅手当が)出ない」ことに対して自身の理解を示す。また、ここでNは「ね」をつけることによって、Sから「協調」を引き出そうとしている(森田, 2008)²。それに対して、Sは6行目で「そう」と協調を示している。ここまで来て、1行目より開始された連鎖は収束可能な位置に至ったと認識され、そのような位置において、会話参加者誰もが次の発話順番を取らないため、7行目で1.2秒の間合いが生じている。

Heritage(2012b)によると、会話参加者の間に生じる認識の差は連鎖の展開を促進する力となる。実際、7行目の間合いの後、NはSとの認識の差を解消するために、「住宅手当」についてよりよく知っているSに連続して3つの質問を行い(8、13、16行目)、Sはそれぞれに応答している(9-11、14、17行目)。これにより、3つの質問-応答連鎖が組み立てられている。ここで、この3つの質問-応答連鎖は互いに独立したものではなく、連鎖組織上密接に連なっていることに注意されたい。以下では、この3つの連鎖は組織上どのように連

² 森田(2008)では、「ね」は次のターンで相手の協調が適切であることを示すこともあるが、当該のターンで行われる行為が、その前の行為に呼応するものであること、協調的行為であることを示す(p.47)と述べている。このことから話者は「ね」を使用することによって、当該のターンと前のターンに関連を持たせていることがわかる。

なっているかを検証していく。

順番交替可能である連鎖環境の中で、Nは8行目で「え…」と発し、次の発話順番を取っている。また、ここで、Nはそれまでの連鎖と全く関係のない連鎖を開始しているのではなく、「え…」を用いて再度3行目のSの答えに対して驚きの反応を示す³(田窪・金水, 1997)ことによって、Sの3行目の発話に関連付けていると考えられる。そして、その後、Nは「独身のうちは出ない」ことについて、「あじゃ独身のやつ寮入れみたいな感じなんだ」と次の質問をする。また、ここで「あじゃ」が用いられていることに注目されたい。上述したように、「あ」は話者の認識が更新されたことが示す(Endo, 2018)際に用いられる標識であり、「じゃ」は話者が前の発話を踏まえてそれに関する理解候補を述べる時に用いられる標識である。実際、Nは「あじゃ」を発した後、3行目で強調された言葉「独身」を繰り返して、ほかならぬ、3行目の発話を踏まえたうえでの理解を「～感じなんだ」と示す。つまり、Nはここでも「あじゃ」という形式で発話を開始し、また「独身」という言葉を繰り返すことによってSの3行目の発話と関連付けている。この質問に対して、Sは9行目で「そう」を4回繰り返した形で強く同意を示した後、11行目で自ら「独身のやつ寮に入るか、自宅から通えるやつは通わないといけない」と情報を付け加える。

この付け加えられた情報に対して、Nは13行目で「え」と自身の前もってあった予想から逸脱した情報を受け止めたことを示している(Hayashi, 2009)。そのため、Nは続けてその逸脱することについてさらに追及することが予測される。実際、Nは「え」を言った後、すぐに「でも」を用いて先行発話と対立的関係にある内容を予告し(陳, 2008)、Sが11行目で言及した「寮に入る/自宅から通う」という2つの選択肢に対して、「自費で一人暮らし」ができるかという新たな選択肢を取り上げ、Sに確認を要請する。SはNが提示したこの選択肢を、13行目の発話が完結する前の早い位置で「そうそうそう」(14行目)と承認を与える。それによって、13-14行目の質問一応答連鎖はいったん収束可能な位置に達したと思われる(15行目)。しかし、その次のターン(16行目)でNは再び「でも」を用いることによって、それに先行するやり取りを踏まえて、先行する部分とは対立する内容が次に来ることを予示する。そのうえで、Nは「自費での一人暮らしのほうが高くつく」という一般的な推測に反する、Sの会社が所在する「〇〇」付近の「一人暮らしは安くつく」という自身の推測について確認を求める。その確認に対して、Sは17行目で肯定的に応答する。また、そ

³ 「驚き」を示すという点において、「えー」と「へー」は共通する部分があると考えられる。「えー」と「へー」の使い方について、両者がどのように共通するか、またどのように異なるかは今後の課題として検証していきたい。

の応答に対してNは18行目でうなずきを用いて承認する。16-17行目の連鎖はここまで来て収束可能な位置に至っており、「へー」はその後に産出される。

以上、8-17行目において行われている3つの質問-応答連鎖を詳細に分析することを通して、それぞれの連鎖は互いに独立したものではなく、連鎖組織上密接に関連付けられていることがわかった。また、「関連付けられている」というのは単に「内容的に」関連しているだけではなく、ターンのデザインとして前の発話に関連付けられ、ひと連なりの連鎖を生み出している。断片(1)の分析では、特にそれぞれの連鎖の第一部分となる「質問」の冒頭で使用される言語資源に着目し、話者がその言語資源を使用することで、どのように先行する部分と関連付けているかを検証した。

また、上述したように、8行目の質問はそもそも1-6行目の連鎖でNとSの間の認識の相違が明らかになったことから産出されているため、1-6行目の連鎖も8行目以降の3つの連鎖とも関連付けられていることがわかる。つまり、1-6行目の連鎖において生じた認識の相違を契機として、話者が8-17行目の連鎖において認識の差を解消させるように努めている(Heritage, 2012b)。このように、断片(1)において、1行目から17行目まで産出されている複数の連鎖は一つずつ独立した連鎖ではなく、一つのまとまりを為す連鎖として理解できる。また、16-17行目の連鎖が収束可能な位置に至ったことに伴い、その時点までの質問-応答連鎖のひと連なりも収束可能な位置に至ったと思われる(18行目)。そして、その後に「へー」が産出されている(19行目)。

本章が着目するのは、断片(1)のような連鎖組織上関連付けられているひと連なりの連鎖全体が収束可能な位置に至った後に産出される「へー」である。また、本章では、「連鎖組織上関連付けられているひと連なりの連鎖」を「一連の連鎖」と呼ぶこととする。本研究に用いられたデータを観察した限りでは、「へー」は以下の2つの「一連の連鎖」が展開される環境の中で用いられる。

- ① 会話参加者の間に生じた認識の相違によって展開される一連の連鎖
- ② 「へー」の受け手によって報告されるニュースを契機に展開される一連の連鎖

以下では、この2つの環境において、「へー」はどのように産出されるか、また「へー」の産出によって、相互行為上どのようなことが達成されるかについて詳細に分析する。

6.3 会話参加者の間に生じた認識の相違によって展開される一連の連鎖と「へー」

断片(1)で観察したように、会話参加者の間に生じた認識の相違が明確になったことを契機として、話者間の認識の差の解消がやり取りを促進する力となり、一連の質問-応答連鎖が展開される(Heritage, 2012b)。本節では、そのような一連の連鎖が収束可能な位置に至った後、話者は「へー」を用いることで相互行為的にどのようなことを達成しようとするか明らかにする。

もう一度断片(1)の19行目の「へー」に至る連鎖を振り返ってみよう。16-17行目の質問-応答連鎖が収束可能な位置に至ったことに伴い、それまでの連鎖組織上密接に関連付けられている一連の連鎖も収束可能な位置に至ったと理解可能であることを観察した。それは、あくまでも収束「可能」な位置であって、18行目の間合いの後に、それまでの一連の連鎖と関連する何かの連鎖がさらに拡張される可能性が排除されているわけではない。しかし、この時点で、Nは19行目で「へー」を用いることによって、それまでの一連の連鎖を明示的に収束させている。実際、Sはそのことを理解し、20行目でNの「へー」の後半と重なった形で、「や:ばかったよ」と言い、何か自身が経験した「やばい」ことをこれから語ることを予告して、新たな語りの連鎖を開始しようとしている。つまり、「へー」の産出によって一連の連鎖が収束されていることが会話参加者双方の間で公然化されているのである。

また、Nが「へー」を用いて一連の連鎖を明示的に収束させようとしていることは話者の身体的ふるまいからもわかる。Nは17行目までSの聞き手としてふるまっており、視線および身体の姿勢をSに向けているが、18行目の時点で、Sの17行目の答えをうなずきで承認すると同時に、上体を後ろに引く。この身体の姿勢の調整は、NがSの聞き手としてふるまうことから撤退しているように見える。さらに、19行目でNは「へー」を言った瞬間に、それまでSに向けていた視線をそらし、右の方向に向け始めた。このような視線の移行からも、Nはここで「へー」を発すると同時に、先行する連鎖をこれ以上展開させないスタンスを示していると考えられる。

このように、一連の連鎖が収束可能な位置に至った後、話者は「へー」という言語形式と身体的資源を用いて、それまでなされている一連の連鎖を明示的に収束させている⁴。また、

⁴ 「へー」が連鎖を収束させるデバイス(sequence closing device)として働くことはHayashi(2001:326)とMori(2006)において既に指摘されている。しかし、本章の目的は「へー」の新たな働きを明らかにすることではなく、「へー」は具体的にどのような連鎖環境の中で使用

ここでいう「一連の連鎖を明示的に収束させる」というのは、単に形式上連なっている複数の「連鎖」を収束させているだけではなく、会話参加者がその複数の連鎖を通して行っている「活動」も収束させていることも意味する。断片(1)では、Nは「住宅手当」に関する認識の相違が明確になったのを契機に、一連の連鎖を通してSが就職した場合の住居費についてSとの間の認識の差を解消することに努めている。Nが「へー」を用いて明示的に一連の連鎖を収束させるということは、最初に明確化された認識の相違とそれを契機に導かれるSとの認識の差が解消され、このことに関するやり取りをこれ以上行う必要がないということも標示しているのである。そして、このような、いわば「納得」を標示する「へー」の産出によって、次の新たな連鎖に移行する機会も生み出されているのである。

次の断片(2)からも、断片(1)と同様の現象が見られる。

(2)[N&S_貯金_22:03]((卒業間際のNは最近、前より毎月の出費が多くなっており、お金がなくて心配していると言った。しかし、その後、Nはまた自ら「定期の貯金」を持っていることをSに告げ、「(生活は)大丈夫だ」と言った後に、「しかも働き出したらお金がめっちゃもらえる」と主張した。1行目の発話はその続きである。))

- 1 N: すげ貯まるらしいよ。
2 (0.6)
3 S: でも:(0.4)あの:(0.3)アメフトのノハラはどんなに働いても全く
4 貯まらん[つ(h)って(h)た(h)よ. hehehehe
5 N: [hh hehehehe hhhhhh
6 N: .hhh 銀行だっけ?
7 S: そう.
8 (.)
9 N: なんで?
10 (0.3)
11 S: ○○証券とか(の中に).
((○○はノハラが勤める銀行の名前))
12 (0.2)
13 N: なんで貯まんない[の.

され、そこでどのようなことが達成されているかを明らかにすることである。

- 14 S: [わかんない.
 15 N: なにに使う?
 16 (.)
 17 S: でも飲み会が多いじゃないやっぱこういうところは.[お客さんとの=
 18 N: [° うん°
 19 S: =飲み会だったり先輩との飲み会だったり.
 20 N: でも毎日飲み会だとして:(0.3)大人だと一万いっくら使うのかな.
 21 (0.2)
 22 S: そんなに:?
 23 (0.3)
 24 N: キャバクラとか行ったら[使うのかな.
 25 S: [あ……:
 26 (0.6)
 27 N: [若いのにね出してもらえないんだね.[あんまり.
 28 S: [() [ね:そう.おごってもらえないんだ意外と.
 29 (1.1)
 30 →N: へ……:
 31 (2.6)
 32 N: で(0.7)△△会社行ったときに,
 ((△△会社はNが内定を得ている会社名))

Nは1行目で働き出したらお金が貯まると主張する。これに対して、Sは3-4行目で友人ノハラの話「反例」として挙げ、異論を提示する。このやり取りから、「働き出したらお金が貯まる」かどうかについて、NとSの間には認識の相違が見られる(Heritage, 2012a, 2012b)。また、4行目の発話末に「よ」がつけられていることから、「ノハラ」のことに關してSはよりよく知っている立場にあることが観察可能である(Hayano, 2011)。さらにSは笑いながら反例を提示しているので、「ノハラが働いても(お金が)貯まらない」ことを面白いことだという認識的スタンスを示している。それに対してNは、5行目で笑いを産出し、Sのスタンスに同調する。

「反例」が提示された場合、その次のターンではそれを「受け入れる」かどうかを明らかにする反応が期待されるだろう。しかし、6行目でNは「受け入れる」かどうかを表明せ

ず、「ノハラ」の就職先について、「銀行だっけ?」と質問をする。このような確認の質問が産出されることから、NはSの主張をすぐに受け入れられない何らかの理由があると考えられる。実際、Nは「ノハラ」の就職先を確認した後、続いて9行目で「なんで?」と明示的にSの反例に対して疑問を提示する。この「なんで?」の質問に対する応答が期待される11行目で、Sは6行目の質問(「銀行だっけ?」)に対する答えの続きを産出するが、9行目のNの質問に応じる答えを産出していない。そのため、Nは13行目で「なんで貯まらないの」と9行目の質問をより特化した形でやり直し、Sに説明を要求する。それに対して、Sは14行目で「わかんない」と答え、「ノハラがなんでお金が貯まらないか」の理由について説明できないと示す。

しかし、それにもかかわらず、Nは15行目で「ノハラはお金が貯まらない」ことについて、質問の形式を変え、さらに「なにに使う?」とお金の使い道について尋ねる。この質問に対して、Sは17-19行目で「飲み会が多い」ことを挙げて答える。それを聞いたNは20行目で「でも」と言い、Sの答えを理解したうえで自身の最初の想定に対して別の視点から何か述べようとしていることを予示する。さらに、Sの答えにある「飲み会」という言葉を繰り返し、飲み会での一日使用する金額について予想(「一万円いっくら」)を述べる。これに対して、Sは22行目で「そんなに?」と上昇するイントネーションで発話し、驚きの反応を示す。そのような反応を受けたNは、24行目で20行目において自身が提示した金額の用途について、「キャバクラに行く」という別の候補を出して答える。そしてSはそれを「あ……:」と受け止め、「理解した」ことを示す。

ここまで来て、NとSの間に生じた認識の相違がNの一連の質問(6、9、13、15、20、24行目)を通して少しずつ解消されていることがわかる。そして、それを裏付けるのはNの27行目の発話である。27行目でNは、「なぜノハラは働いてもお金が貯まらない」理由についてさらに質問するのではなく、それまでのやり取りを踏まえて、「若いのにね出してもらえないんだね」と「お金が貯まらない」ことについての自身の理解を示す。つまり、ここまで来て、Nの中に生じていた疑問はすでに解消されていることから、Sによって出された「反例」についてこれ以上追及しないことが考えられる。また、Nが示した意見に対してSは28行目で同意を示し、それによって、27-28行目の「意見表明ー同意」連鎖が収束可能な位置に至る。

ここで強調しておきたいのは、断片(2)も断片(1)と同様に、断片で生じている一連の「質問ー応答」連鎖および「意見表明ー同意」連鎖は互いに独立したものではなく、連鎖組織上密接に関連付けられているということである。1-4行目で生じた話者間の認識の相違が契機

となり、Nはその後一連の質問を発することによって、Sとの認識の差を解消しようと努める(Heritage, 2012b)。また、上述したように、一連の質問は互いに無関係のものではない。Nは自身の疑問を解消するために、まず議論の対象となっているノハラの勤め先を確認した(6行目)うえで、明示的に質問を行った(9行目)が、その質問に適切な応答が来なかった。そのため、その後Nはさらに質問を特化した形でやり直したり(13行目)、質問の内容を変更したり(15行目)、Sの答えを踏まえて自身の考えを述べたり(20行目)して答えを追及している。このように、Nは前の質問を踏まえて次の質問を産出している。そういった一連の質問-応答連鎖を通して、話者間の認識の差が解消されたと言える。そして認識の差が解消された後に、Nはそれまでの質問-応答連鎖を踏まえたうえで自身の理解を表明し、その理解が受け止められたことに伴って、それまでの一連の連鎖は、収束可能な位置に至ったと思われる。そのような位置で、Nが30行目で「へー」を産出するというのは、それまでなされている一連の連鎖を収束させることを明確に示していると考えられる。また断片(1)と同様に、Nはここで収束させているのは単に形式上連なっている複数の「連鎖」だけではなく、Sとの認識の相違が明確化されたことを契機に展開したやり取りをこれ以上続ける必要がないことを標示していると言える。すなわち、Nは「へー」を用いてSによって提示された異なる認識を納得した形で受け入れたスタンスを示している。また、「へー」の産出によって、次の新たな連鎖に移行する機会が生み出される。実際、31行目の2.6秒の間合いの後に、Nは32行目で「で」を言い、ターンを取得したうえで、別の話題(「△△会社」に行った時のこと)を開始している。


相互行為上、話者間に認識の相違が明らかになった場合、会話参加者はまず互いにその相違を解消するためにふるまうことが容易と考えられる。そして、その相違が解消されたことを会話参加者が相互に認識可能な事態に達するためには、一連の連鎖が収束されることを明確に示す手続きが必要である。そのような連鎖環境の中で、話者は何か新たな情報を受け止めたことを標示する「へー」を用いることによって、相手によって提示された異なる認識を納得した形で受け入れたスタンスを示すことで、それまでの一連の連鎖を明示的に収束させていると考えられる。また、そうすることによって、次の新たな連鎖に移行する機会が生み出されるのである。

6.4 「へー」の受け手によって報告されるニュースを契機に展開される一連の連鎖と「へー」

6.3節では、会話参加者の間に認識の相違が明らかとなり、その相違を解消するために一

連の連鎖が展開される事例を分析した。本節では、「へー」の受け手によって報告されるニュースを契機に一連の連鎖が展開される事例を検討する。断片(3)を見てみよう。

(3)[callhome_2053_2:14]((日本在住の母(ハル)とアメリカ在住の娘(マイ)との電話会話である。断片の前、マイはハルにハルの最近の睡眠状況について聞いていた。その会話が終わった後に、ハルは01行目で「何か思い出す」際に使用する言語標識「あ」(田窪・金水, 1997)を用いて、マイの兄弟「ナオキ」の就職に関する話題を導入している。))

- 1 ハル: あナオキがね,
 2 マイ: う:ん.
 3 (0.5)
 4 ハル: あ:決まった.やっぱり.
 5 (0.5)
 6 マイ: あほんとう.[一月一日から?
 7 ハル: [一日って
 8 ハル: うん.
 9 マイ: ほんとう..hhh
 10 ハル: うん.hehe
 11 マイ: で:一月一日からはたらかんといかんの?
 12 (0.5)
 13 ハル: あそれはまだちょっとわかんないけど.
 14 マイ: う:ん.
 15 (0.9)
 16 →マイ: 
 17 (0.3)
 18 ハル: う:ん,大変だわ.
 19 (0.5)
 20 マイ: う::ん.
 21 (0.2)
 22 ハル: またひっこ(h)し(h)

まず、16行目の「へー」の直前のやり取りを確認する。マイは11行目で「(ナオキは)一

月一日からはたらかんといかんの?」と質問する。その質問に対して、ハルは13行目で明示的に「わかんない」と答える。つまり、マイの質問に対して、ハルは応答の部分において特に驚くべき新情報を提供しているわけではない。そして、マイはハルの応答を「う:ん」と承認する(14行目)。このような「質問-応答-承認」連鎖の後に用いられる「へー」は、直前のターンへの反応として使用されるのではないことがわかる。「へー」が産出される理由を探るために断片全体を見てみよう。

1-4行目でハルはマイにナオキの就職先が決まった話をしている。それに対して、マイは6行目で「あほんとう」を用いてハルの報告をニュースとして受け止める。それによって、1行目から開始された「ニュースの報告-ニュースの受け止め」連鎖はいったん収束可能な位置に至ったことが会話参加者に認識される⁵。そのような位置で、マイは自身の発話順番を確保するために、間髪を入れず、「一月一日から?」と、1-4行目で語られた「ナオキが決まった」ことに関連する質問をし、次の連鎖を新たに開始する。また、この質問は、マイがハルによって報告されたニュースについてさらに「ナオキの勤務開始日」に関して詳細に引き出そうとするものとして理解される。それに対して、ハルは8行目で「うん」と肯定的に答える。6行目の質問に対して答えが得られた後の位置、つまり9行目でマイはまた「ほんとう」を用いてハルの答えをニュースとして受け止めたと示す。それに対して、ハルは10行目で「うん」と肯定的に答える。ここまで来て、6行目のマイの質問によって開始された連鎖は収束「可能」な位置に至ったと認識される。それに伴い、1行目より開始される連鎖組織上関連付けられている一連の連鎖も収束「可能」な位置に至る。そのような位置で、マイは11行目でターンの冒頭で前の連鎖に戻る際に使用される言語標識「で:」(伊藤, 2018)を用い、「一月一日からはたらかんといかんの」と、6行目の質問で用いられていた「一月一日から」の言葉を使用し、明示的に6行目に戻っていることを示したうえで、その日から働く必要性について新たに質問をし、確認を要請する。その確認要請に対して、ハルは「あそれはまだちょっとわかんないけど」と明示的に答える。そして、マイはその答えを14行目で「う:ん」と承認する。15行目で0.9秒の間合いが生じていることから、ハルはこれ以上情報を提供しないことが読み取れる。マイは6行目よりナオキが着任する日付が働き始める日付と一致するののかということについて尋ねるが、これについてはマイも「わからない」ことが公然化される。つまり、このことについてはさらに連鎖を展開する必要がなくなり、

⁵ Mはそのことを認識し、7行目で「一日って」と言い、1-4行目のニュースの続きを言おうとしている。

これまでの一連の連鎖が収束可能な位置に至ったと認識可能である。そのような位置で、マイは16行目で、「へー」を用いて、もう一回ハルが1-4行目で報告したことを新たな情報として、つまりニュースとして受け止め直すことによって、1-14行目のやり取りを、ニュースの報告と受け止めがなされた活動として特徴付け、明示的にそれまでの一連の連鎖を収束させていると考えられる。そして、そのことはハルにも理解され、18行目でハルは「うん、大変だわ」と感想を先に述べる形で語りを予告し、ナオキの引っ越しのことを語り始めようとしている。

次の断片(4)も、断片(3)と同様の現象が見られる。

(4)[callhome_0862_13:33]((日本在住の母(マチ)とアメリカ在住の娘(ハナ)との電話会話である。断片の前にハナは「高原の保養地」に行った話をマチに報告していた。その話が終わった後、マチは1行目で先述の「何か思い出す」際に使用する言語標識「あ」(田窪・金水, 1997)を用いて、「コンロを拾ってきた」ことを新たな話題として導入している。))

- 1 マチ： あっお母さんね、
- 2 ハナ： うん
- 3 マチ： hehe.h コンロ拾ってきた.[hahaha[あのね
 ((17行, 約30秒間分省略. マチはどこでどのようなコンロを拾ってきたかを説明している))
- 21 ハナ： へ:::hh あれもあるんじゃない. シャン-シャンなんとか° ていうの° .hhh
- 22 マチ： ん?
- 23 ハナ： なんだっけ,(0.4)昔の(0.9)ん:と:(.) なんだっけ?(.)かば焼きとか作るやつ.
- 24 (0.7)
- 25 マチ： どこにあるの?
- 26 ハナ： うちになかったっけ?
- 27 (0.7)
- 28 ハナ： なんとかガンとかていう.
- 29 (1.1)
- 30 マチ： てっきょうのこと?
- 31 (0.2)
- 32 ハナ： ううん.なん-なんだっけ?(0.4)なんとかなんとか(.)忘れ
- 33 ちゃった.hehe[.hh he.hhe

- 34 マチ： [あそう.あのね,
35 (0.4)
36 ハナ： [なんとかサン-サン-サンリン?
37 マチ： [あの…
38 (0.9)
39 マチ： ん:バーベキューコンロじゃなくんね?
40 ハナ： うん.
41 (0.5)
42 マチ： ふ……:ん
43 ハナ： [なかったっけ?
44 (0.4)
45 マチ： わか・わかんない[けれど.
46 →ハナ： [へ……
47 マチ： うん.
48 マチ： [あの……:(0.9)ゴミも捨ててもいいなと思っ[てね,
49 ハナ： [うん. [うん.そうだね焼き物とか

マチは1~20行目で「コンロ」を拾ってきたことを語っている。その語りに対して、ハナは21行目で「へ……」と新たな情報として受け止めたと示している。そして、吸気した後に、ハナは「あれもあるんじゃない」と言い、「コンロ」から想起された実家にあるものを話題として挙げる。しかし、ハナはそのものの名前を正確に思い出せず、「シャン-シャンなんとか」とものの名前の一部を提示することで相手に助けを求める。ハナはここから「言葉探し」(word search; Schegloff, Jefferson and Sacks, 1977)の活動を開始している。その活動は28行目まで続いており、マチは30行目でハナによって出されたヒントに対して、「てっきょう?」を名前の候補として挙げている。その名前の候補に対して、ハナは32行目で「ううん」と否定した後に、「なんだっけ?なんとなんとか」と言い、自問するようにして名前を思い出そうとする。そして、そういった活動を行っている時に、マチは特に何も反応を示さない。「言葉探し」の努力をしたが、それでも名前を思い出すことができないマチは32-33行目で自ら「忘れちゃった」と思い出す可能性が低いことを宣言する。その言葉を聞いたマチはハナの「言葉探し」の活動がもう終了したと理解し、34行目で「あそう」と承認し、そしてすぐに「あのね」と言い、次の新たなことを開始しようとしている。しかし、その発

話がハナの笑いと重なっているため、マチはその続きを中止し、それによって、35行目で0.4秒の間合いが生じる。間合いの後、マチはまた「あの」と言い、34行目の発話の続きを再開しようとするが、ハナはマチの「あの」とほぼ同じタイミングで36行目でまた「なんとかサン・サン・サンリン?」と言葉探しを再開している。それによって、マチは自身の発話を中止し、39行目でもう一回「バーベキューコンロじゃなくんね」と答えの候補を挙げてハナに確認する。その確認がハナの「うん」によって与えられると、マチは42行目でさらに他の答えの候補を挙げるのではなく、「ふ……ん」を用いて現行の話題から離れようとしている(Tanaka, 2010)スタンスを示している。つまり、ここでマチはハナの「言葉探し」の活動を収束させようと提案しているように見える。しかし、それにもかかわらず、ハナは43行目でまた「なかったっけ?」と対象物の名称についての「言葉探し」そのものは断念したものの、その存在について再びマチに確認を求める。これに対して、マチは45行目で「わかんない」と明示的にこれ以上答えを出すことができないと示す。ハナはマチの「わかんない」という答えを聞いた瞬間、「へー」という反応を産出する(46行目)。

では、ハナはなぜこの位置で「へー」を産出するのだろうか。ハナは21行目からニュースによって想起されるものの名前を思い出すために、「言葉探し」の活動を開始し、何回も質問を繰り返してマチに助けを求めているが、最終的にマチに「わからない」と言われ、適切な答えを得られていないことがわかる。つまり、「言葉探し」の対象となったものに関連する一連の質問-応答連鎖はマチによって「わからない」と言われた時点で、収束せざるをえない位置に至る。ハナはマチの「わかんない」という答えが産出された直後に、「へー」を用いて、「言葉探し」活動が開始される前のマチの語り(「コンロを拾ってきた」こと)に戻り、1-45行目のやり取りを、ニュースの報告とその受け止めとして特徴付けている。そのことによって、ハナは「へー」を用いて明示的に自身が開始したニュースに関連する「言葉探し」の活動をこれ以上行わないスタンスを示しているのである。さらに、そのことはマチの「うん」(47行目)によって承認される。それによって、新しい連鎖に移行する機会が生み出され、実際、マチは48行目で「あの……」と言うことで、34、37行目で重なりによって中断された発話を再開しようとし、「ゴミも捨ててもいいなと思ってね」とコンロとは別の話題を提示して、新たな連鎖を開始している。

最後にもう1つの事例を紹介する。断片(3)(4)では、「へー」の受け手によってニュースが報告された後に、「へー」の産出者はまず「あほんとう」(6行目)と「へ……」(21行目)を用いてそれぞれのニュースに対して反応を示している。以下の断片(5)は断片(3)(4)と異なり、ニュースが報告された後、「へー」の産出者はニュースを受け止める反応を示さず、その代わ

りに「反対の意見」を出しており、それによって、一連の連鎖が展開される。しかし、最終的に、断片(3)(4)と同様に、「へー」の産出者は「へー」を用いて、「へー」の受け手によって報告されたニュースに反応を示し直すことによって一連の連鎖を収束させる。

(5)[Y&B_S 店_5:00]((断片の前に、生野菜の衛生問題が話題になっている。YはS店の野菜が新鮮でおいしいと言った。その流れで次の断片の会話が始まる。断片に出ているS店とM店は飲食店の名前であり、いずれも日本各地に店舗があるチェーン店である。))

1 Y: ↑最近なんかさ:あのうS店の[客足が遠のいてるらしいってアベちゃん

2 B: [うん°

3 Y: = に聞いて¥さ:(h)私すごいショックだった¥.

4 (0.6)

5 B: .hhh[he えっでもいっぱいいるじゃんいつも.

6 Y: [.hhh

7 (0.7)

8 Y: ん:::えでも〇〇だけなのかなそういう.

((〇〇は2人が居住している市の名前))

9 (0.3)

10 B: ()アベちゃんのソースはなんなの?

11 (0.3)

12 Y: でもさ[夜ご飯時しかいなくない?人.(.)昼間とかさ,

13 B: [うん

14 (0.4)

15 B: ま確かに[昼間ガラガラ

16 Y: [全然いなくない?

17 (0.3)

18 Y: そうそうそう.だからそういうことじゃない.

19 (0.2)

20 B: ひ-昔は昼間もいっぱいいたの?

21 (0.7)

22 Y: 知らないけど s:::さ,[都会のほうとかだと結構(.)出先でS店行く人とかは=

23 B: [うん

- 24 Y: =いるから,[昼ご飯とかS店混んでたよめっちゃ.
 25 B: [うん:
 26 (0.2)
 27 B: うん.つかどこも混んでない?都会だと.
 28 (0.3)
 29 Y: そうかな.[あま確かに.でもそれが最近そうでもないじゃないだから.
 30 B: [うん
 31 (0.3)
 32 →B: へ……:
 33 (2.5)
 34 B: つかM店がさ,
 35 Y: うん.
 36 B: なんかお客さんが遠のいてるってよく言ってるよね.

Yは1-3行目で友人(アベちゃん)に聞いたS店の客足が遠のいていることをニュースとして報告し、そしてそのニュースに対する感想(「すごいショックだった」)を述べている。その報告されたニュースと感想に対して、Bはすぐに反応を示しておらず、4行目で0.6秒の間合いが生じる。そのことから、BはYの語ったニュースをすぐに受け入れられない何らかの理由があることが予測される。実際、5行目でBは前の発話が自身の予想と逸脱していることを標識するマーカー「えっ」(Hayashi, 2009)を発した後、「でもいっぱいいるじゃんいつも」とYのニュースを受け入れられない理由を示す。このBの反対の意見に対して、Yは8行目で「(S店に客がいっぱいいるのは)2人が住んでいる場所だけ」を理由として挙げて反論している。このやり取りから、2人の意見が一致していないことがわかる。そのような状況の中で、Bは10行目でニュースの発信者である「アベちゃん」がどこからその情報を入手したかについて質問する。しかし、Yはこの質問に答えておらず、12、16行目で5行目のBの意見に対してさらに反論を産出している。Yの反論に対して、Bは15行目で「ま確かに」と同意を示す。その同意が18行目でYに「そうそうそう」と承認される。また、Yはここで「だから」と言い、これまでの話をまとめあげ、その次に前方照応指示詞を用いて「そういうことじゃない」と言うことによって、1-3行目で提供したニュースに戻ろうとしている。そして、ここでYは「じゃない」という言語形式を用いてBに賛同を求め。しかし、それに対して、Bは20行目で賛同するかどうかを示さず、その代わりに、「昔

は昼間もいっぱいいたの?」と質問することで、さらに事実を追及しようとしている。その質問に対して、Yは22-24行目で、まず「知らないけどさ」と言い、確信度が低いことを示したうえで、「都会」を例として出して、「S店が混んでいた」ことを答えている。それに対してBは27行目で「う:ん」という反応を示しているが、Yの意見を完全に受け入れていないスタンスを示しているように聞こえる。それはその次に、「転覆的用法」として「つか」(若松・細田, 2003)が使用されていることから裏付けられる。つまり、Bはここで、「つか」を用いて「もう1つの可能性となる要素が続く」(若松・細田, 2003: 36)ことを予示し、その続きで「どこも混んでいない?都会だと」と質問することによって、Yの答えに納得できない理由を示す。その質問に対して、Yは29行目で「そうかな」と一度完全には受け入れられないスタンスを示した後、「あま確かに」と同意を示しているが、続けて、先行する発話に対立する発話を予示する「でも」(陳, 2008)を用いて、「それが最近そうでもないじゃないだから」と言っている。ここで、Yは1行目の「最近」という言葉を繰り返していることと、「だから」を使用することによって、再度1-3行目でYが語ったことに戻っているように見える。それに対して、Bは32行目で「へー」と反応している。ここも、断片(3)(4)と同様に、話者は「へー」を用いて1-3行目でYによって報告されたことをもう一回ニュースとして受け止め直すことによって、明示的にそれまでの一連の連鎖を収束させていると考えられる。言い換えれば、ここで、Bは「へー」を用いることによって、「S店の客足が遠のいている」ことについて、Yとの間でこれ以上議論をしないスタンスを示している。さらに、そのことは会話参加者双方に理解され、実際、「へー」が産出された後、誰もターンを取らないために33行目で2.5秒の長い間合いが生じている。その後34行目でBは「つかM店がさ」と言い、ターンを取得したうえで、「S店」ではなく、別の飲食店の話題を開始している。

上記の3つの断片では、「へー」の受け手によってニュースが報告された後、「へー」の産出者はそのニュースに関する詳細を引き出したり、ニュースに関連する「言葉探し」の活動を開始したり、そしてニュースをすぐに受け入れず反対の意見を出したりするような行為を行うことによって、一連の連鎖を展開させている。また、「へー」の受け手による報告を契機になされるひと連なりの連鎖が続いても、問題が解決されない(ニュースの詳細をこれ以上引き出すことができない、言葉探しが解決しない、同意に至らない)ことが公然化されている。そのような状況において、会話を進行させるために、それまでの一連の連鎖を明示的に収束させる必要がある。「へー」はそのような環境の中で、受け手による報告をもう一度ニュースとして受け止め直すことによって、それまでのやり取りを、ニュースの報告と受

け止めがなされた活動として特徴付け、明示的に一連の連鎖を収束させる手続きとして使用されているのである。また、上述したように、ここでいう一連の連鎖を収束させるというのは、単に形式上連なっている複数の連鎖を収束させているわけではなく、複数の連鎖を通して会話参加者が行っている「ニュースの詳細を引き出す」活動、ニュースに関連する「言葉探し」の活動、そして「反対の意見」を出し合う活動を同時に収束させているということである。

6.5 「へー」と新たな話題の開始

以上、「へー」が産出される一連の連鎖の2つの環境を分析し、「へー」の産出によって、それまでの一連の連鎖が明示的に収束されることが公然化されることを論じてきた。これを踏まえて、本節では、「へー」の話者が次の新たな話題を開始するにあたって、いかに「へー」の働きを利用しているかを詳述する。まず、断片(6)を見てみよう。

(6)[D&T_小学校の教育実習_2:37]((友人同士のDとTの電話会話である。Dは小学校で教育実習をしている。断片の前に、Dはその教育実習の大変さをTに伝えた。1行目の発話はTがDを励ます発話として理解される。))

- 1 T: hehe ちゃんと子供と触れ合って:.hhh
2 D: や::もう無理だ無理だ.(.)なんかね,
3 (0.3)
4 T: うん.
5 (0.4)
6 D: 1人1人にこうわかんないこと教えるのは楽しいなって思う° のね° .
7 (0.2)
8 T: うんうん::.
9 (0.4)
10 D: <集団>ってなるとうるせ::みたいな.
11 (0.4)
12 T: 確かにな,ちっちゃい子:.hh やでも普通に大変.なんか(.)ある意味では高校とか
13 のほう楽かもしれないね.
14 (0.9)
15 D: 楽だとは思うよ.(0.2)でも高校ってすごい当たりはずれあるからね.

- 16 (0.3)
 17 T: そっか[:.
 18 D: [みたい.
 19 D: うん.
 20 (1.5)
 21 T: そうだよね,確かに,それあるだろうな:.
 22 (0.3)
 23 D: そうそうそう.
 24 (1.0)
 25 →T: へ……=え D ちゃんいつ帰るんだっけ?

D は T の励ます発話に対して、「や::もう無理だ無理だ」と否定的な態度を示す(2 行目)。そして、その態度を示した後に、D は「なんかね」と言い、その次に「なぜ無理なのか」に対する理由が来ることを投射する。実際、D は 6-10 行目において自身の悩みを語る形で理由を述べている。それに対して、T は 12 行目でまず「確かにな,ちっちゃい子」と D の説明を肯定的に受け止めた後、「やでも」と言い、T が語った悩み(問題)が特異なものであるという認識を否定し(安井, 2012)、さらに「高校」を例として挙げて、小学校での教育実習の大変さを際立たせることによって理解と共感を示す。また、T は「ね」をつけること(13 行目)によって相手から「協調」を引き出そうとし(森田, 2008)、それに対して、D は 15 行目で「楽だとは思うよ」と T の言葉(「楽」)を繰り返すことによって協調を示す。0.2 秒の間合いの後、D は「でも」と言い、自身の前の発話と対立するような内容をこれから語ることを予告し(陳, 2008)、続けて「高校ってすごい当たり外れあるからね」と異なる側面について言及する。それに対して、T は 17 行目で「そっか[:」と受け止めるが、D によって提示された側面に同意するかしらないかというスタンスは特に示していない。そのため、続いて 21 行目で T は「そうだよね,確かに,それあるだろうな」と D の意見に対して明示的に「同意」を示す。T の同意に対して D が「そうそうそう」(23 行目)と強調的に承認を与えることによって、会話参加者の認識の一致が達成された(Tanaka, 2013)と思われる。それに伴い、先行する一連の連鎖が収束可能な位置に至ったことが認識可能である。また、24 行目で 1.0 秒の間合いが生じているから、D も T もこれ以上意見を出さないことが読み取れる。その後、T は 25 行目で「へー」を産出し、D によって提示された異なる認識を納得した形で受け入れたスタンスを示すことを通して、それまでの一連の連鎖を収束させることを明確にしてい

る。

ここで、Tが「へー」を産出した後に取った行為に注目する。Tは「へー」を発した直後、間髪を入れず、「え D ちゃんいつ帰るんだっけ?」とこれまでのやり取りと関係のない新たな話題を導入している。また、次の発話が前の話と逸れることを標識するマーカー「え」(Hayashi, 2009)が用いられていることから新たな話題が開始されたと裏付けられる。では、なぜここで、話者Tはこのようにターンを組み立てているのだろうか。先述したように、この断片においても、TとDの間で認識の相違が生じている。その相違が解消されたことが公然と認識可能となった時点で、相手によって提示された異なる認識を受け入れるかどうかのスタンスを示すことが期待される。「へー」はまずそのように相手によって提示された異なる認識を受け入れたことを標示するものとして用いられていると思われる。また、話者間の認識の相違が解消されたことが公然化される時点に至ると、一連の連鎖がこれ以上展開しないということが会話参加者の間で相互に認識可能となる。そのような時点で、話者は「へー」を用いて、それまでの一連の連鎖を明示的に収束させている。このように、「へー」が用いられると、それまでの一連の連鎖が収束されることが公然化されるため、会話参加者が次に直面するのは順番交替の問題となる。ここで、Tは「へー」を産出した後、自身の順番を確保するために、間髪を入れずに次の話題を開始していると思われる。言い換えれば、話者Tはここで、「へー」を産出することによって、一連の連鎖を収束させることになるため、Dが新たな連鎖を開始する可能性に志向して、Dが順番を取る前に即座に自ら次の新たな話題を開始しているのである。次の断片(7)においても、話者が「へー」の働きを利用して次の新たな話題を開始することが観察される。

(7)[callhome_1201_3 : 53]((アメリカ在住のダイとその友人で日本在住のミオとの電話会話である。会話から、ミオはアメリカに滞在したことがあると判断される。断片の前で、ミオは冬にアメリカに行った時の天候について、「雪が降っていた」ことに言及し、ダイはそれに対して、「冬は寒かったよ」と言った。その会話が終わった後、断片の会話が始まる。))

1 ミオ： そっち暑いの?

2 (0.4)

3 ダイ： いや.あのね:(.)あ(0.2)ついときと涼しいときがあつて;

4 (.)

5 ミオ： う::ん.

6 ダイ： まあ平均すると;(0.4)まあ(0.4)30度ぐらいかな::って感じかな.

- 7 (0.4)
- 8 ダイ： 日中.
- 9 ミオ： へ:::=じゃ結構暑いんだね.
- 10 ダイ： うん.
- 11 ミオ： .hh ↑湿気があんだよね.結構ね.
- 12 ダイ： そうなんだよね.=
- 13 ミオ： =日本みたいな感じなんだよね.
- 14 ダイ： うん.
- 15 (0.5)
- 16 →ミオ： へ:::.....=もうが-慣れた?学校どう?
- 17 (0.5)
- 18 ダイ： もうあの::慣れちゃって hhh.hh

ミオは1行目で「そっち暑い?」と気候について質問し、新たな話題を開始する。その質問に対して、ダイは3行目でまず「いや」と言って「暑い」ことを否定し、続けて「あのね」と言い、その次に否定した理由を述べようとする。肯定の応答を想定するデザインのミオの肯否質問に対しては、当然ながら、肯定の応答が期待されると言える。しかし、上述したように、ダイは否定の応答だけではなく、その理由も述べている。そのため、ミオにとってダイの答えは予期していない新しいものとして理解される。ミオは9行目で「へ:::」とダイの答えを新たな情報として受け止めたと示している。そして、ミオはその後、すぐに「じゃ」とダイの答えを踏まえて、「結構暑いんだ」と自身の理解を示すと同時に、「ね」をつけることによってダイに確認を求める。これに対してダイは10行目で「うん:」とその確認を与える。ここまで来て、1行目から開始される2つの質問-応答連鎖は収束可能な位置に至る。そのような位置(11行目)でミオは吸気をし、その次に何かを言おうとしていることを投射する。実際、吸気の後、ミオは少し声の音程を上げて、前の連鎖の話題「気候」に関連する「湿気」についての確認を要請する。その確認が12行目でダイの「そうなんだよね」と肯定される。そして、その答えが産出された直後、ミオは13行目ですぐに「気候」の話題に関して、再び「日本みたいな感じなんだよね」と確認を要請する。その確認要請に対して、ダイは14行目で「うん」と肯定的に答える。それによって、ここまで産出されている「気候」に関する一連の質問-応答連鎖はいったん収束可能な位置に至ったことが認識可能となる。また、15行目で0.5秒の間合いが生じていることから、話題になっている「気候」

に関してミオもダイもこれ以上意見を出さないことが読み取れる。つまり、一連の連鎖はここまで来るとこれ以上展開しないことが公然化される。そのような位置で、ミオは16行目で「へー」を用いてそれまでの一連の連鎖を明示的に収束させることを明確にしている。また、断片(6)と同様、「へー」の話者ミオは、「へー」の産出によって作り出される新たな連鎖へ移行可能な機会を利用し、「へー」を産出した直後に、これまでの「気候」の話題とは全く関係のない「学校」の話題を導入している。

このように、「へー」が産出された直後に、それに先行する一連の連鎖と全く異なる新たな話題が開始されることは、「へー」の産出によってそれまでの一連の連鎖が明示的に収束されることを裏付けている。

6.6 まとめ

上記の事例分析を通して、新たな情報を受け止めたことを標示する「へー」は、必ずしも直前のターンへの反応として使用されるわけではなく、連鎖組織上関連付けられているひと連りの連鎖(「一連の連鎖」)全体とかかわっていることがわかった。

本章では、以下に示す2つの「一連の連鎖」に関連した環境で用いられる「へー」を分析した。①会話参加者の間に生じた認識の相違が明らかになってから、話者は一連の質問-応答連鎖を通してその相違を解消させた後、「へー」を用いて相手によって提示された異なる認識を受け入れたスタンスを示すことで、一連の連鎖を明示的に収束させる。②「へー」の受け手によって報告されるニュースを契機に、関連する一連の連鎖が展開されるが、会話で起きている問題がそれ以上解決できないと認識された後、話者は「へー」を用いてもう一回受け手によって報告されたことをニュースとして受け止め直すことで一連の連鎖を明示的に収束させる。この2つの連鎖環境は異なるものの、いずれの環境においても、話者は「へー」を用いることによって、それまでの一連の連鎖を明示的に収束させ、会話を前進させることが確認された。さらに、本章で主張する「一連の連鎖」を明示的に収束させるということは、「へー」が単に形式上連なっている複数の連鎖を収束させていることを指すだけではなく、会話参加者が複数の連鎖を通してそれぞれ行っている「活動」も同時に収束させていることを標示することについても論じた。

このように、「へー」は、何らかの未知の事柄が提示された直後にそれを受け止めたことを示す標識であるというだけでなく、一連の連鎖を明示的に収束させたうえで、次の新たな連鎖に移行する際に利用可能な手続きであり、連鎖を組織するための手立てとして利用可能な相互行為の言語資源である。

第7章 終章

7.1 はじめに

本研究では、会話分析の手法を用いて、日本語会話においてよく用いられる認識更新標示の1つである「へー」に着目し、とりわけ、「へー」が用いられる連鎖上の位置を体系的に取り上げることによって、「へー」が会話の中でどのように用いられ、また、「へー」が用いられることによってどのようなことが達成されるかを明らかにしてきた。

本章では、各章で論じてきたことをまとめ(7.2節)、本研究から得られた成果を述べる(7.3節)。最後に本研究に残された課題を述べ(7.4節)、本研究のまとめとする。

7.2 各章の概要

ここで、各章で論じてきたことをまとめる。

第1章では、本研究の背景、受け手による「認識更新標示」、「へー」に関する先行研究の概観、本研究の目的、本論文の構成および概要について述べた。

第2章では、本研究で用いる分析手法である会話分析および本研究にかかわる会話分析の基本概念を本研究の分析と関連付けながら説明を行った。また、本研究で扱う会話データの詳細およびトランスクリプトの記号を紹介した。

第3章では、話し手のTCUの途中で受け手によって用いられる「へー」を取り上げた。まず、「へー」が単独で使用される場合を検討した。分析を通して、受け手が「へー」を用いて、話し手の特定の情報をニュース性のあるものとして捉えたことを標示することによって、話し手にTCUの続きを産出してもらうよう機会を与えていることがわかった。次に、「へー」を他の言語要素と一緒に使用する場合も検討した。話し手がTCUを産出している途中で、受け手は、「へー」を他の言語要素と一緒に使用することによって、「一時的」なターン交替を引き起こすことが可能になる場合がある一方、ターン交替まで引き起こさない場合もあることを論じた。いずれの場合においても、受け手がどのように「へー」を産出するか、そして、話し手がどのように「へー」を理解するかによって、相互行為の連鎖の展開が異なることを示した。

第4章では、「ニュースの報告ーニュースの受け取り」という基本連鎖の第二部分に用いられる「へー」を取り上げた。第一部分で報告されたニュースを受け止める際には、「あ本

当」「あそう」「ふーん」などの言語形式が用いられうるが、「へー」は特に報告者がニュースを報告する際、そのニュース性を強調するスタンスに同調を示すために用いられることを検証した。また、「へー」の産出によって、それまでの「ニュースの報告—ニュースの受け取り」連鎖は収束可能な位置に至ることが公然化され、次の新たな連鎖へ移行する機会が作り出される。ニュースの受け手、すなわち、「へー」の話者は、その機会を利用して、「へー」を用いて報告されたニュースを受け止めたことを示した後に、「へー」の母音の引き延し、音調の調整、吸気などの手続きによってターンスペースを確保したうえで、第一部分のニュース性にかかわる質問や、第一部分のニュース性にかかわらないことについて聞き出すことを可能にしている。

第5章では、質問—応答連鎖の第三の位置に用いられる「へー」を取り上げた。特に Y/N 質問—応答連鎖および WH 質問—応答連鎖の第三の位置に用いられる「へー」を分析し、それぞれの連鎖環境において「ふーん」との比較も行った。分析を通して、以下のことがわかった。Y/N 質問—応答連鎖の第三の位置において、「へー」は「想定外」の応答への反応として用いられるが、「ふーん」は「想定通り」の応答への反応として用いられる。また、基本連鎖の第二部分に用いられる「へー」がニュース性を強調するスタンスに同調を示すのと同様に、「へー」は WH 質問—応答連鎖の第三の位置においても応答者がある情報を強調するスタンスに同調を示すために用いられる。一方で「ふーん」は単に応答の部分を受け止めたことを示すために用いられる。

第6章では、「一連の連鎖」(連鎖組織上関連付けられているひと連なりの連鎖)全体が収束可能な位置に至った後に用いられる「へー」を取り上げた。本章では、以下に示す2つの「一連の連鎖」に関連した環境で用いられる「へー」を分析した。①会話参加者の間に生じた認識の相違が明らかになってから、話者は一連の質問—応答連鎖を通してその相違を解消させた後、「へー」を用いて相手によって提示された異なる認識を受け入れたスタンスを示すことで、一連の連鎖を明示的に収束させる。②「へー」の受け手によって報告されるニュースを契機に、関連する一連の連鎖が展開されるが、会話で起きている問題がそれ以上解決できないと認識された後、話者は「へー」を用いてもう一回受け手によって報告されたことをニュースとして受け止め直すことで一連の連鎖を明示的に収束させる。上記の2つの連鎖環境は異なるものの、いずれの環境においても、話者は「へー」を用いることによって、それまでの一連の連鎖を明示的に収束させ、会話を前進させることが確認された。さらに、本章で主張する「一連の連鎖」を明示的に収束させるということは、単に形式上連なっている複数の連鎖を収束させていることを指しているだけでなく、会話参加者が複数の連鎖

を通してそれぞれ行っている「活動」も同時に収束させていることを標示していることも論じた。

7.3 本研究の成果

以上、各章の概要をまとめた。本節では、本研究で得られた成果について述べる。

第一に、第1章で述べたように、「へー」に関して、従来の言語学の研究では、「へー」自体の機能に焦点を当てた記述が中心で、この形式が実際に使用されている会話データを用いた研究は少なく、十分に「相互行為環境」という意味での文脈を踏まえたものはほとんどなかった。そのため、これまで「へー」の様々な意味機能の一般化がなされる一方で、具体的にどのような状況でどのように用いられ、理解されるかということについては明らかにされていなかった。それに対して、本研究は、実際の会話データを用いて、「へー」が用いられる連鎖上の「位置」を体系的に観察することによって、具体的な相互行為環境において「へー」がどのように用いられ、理解されるかということを明らかにした。また、本研究の分析を通して、用いられる連鎖上の位置によって、「へー」の相互行為上の働きが異なっていることを示した。

ここで、連鎖上の位置によって「へー」の相互行為上の働きが異なることについて理解を深めるために、第3章の話し手がTCUを産出する途中に受け手によって用いられる「へー」と、第4章の基本連鎖の第二部分に用いられる「へー」を取り上げて再度考察したい。

第3章で検討した「へー」と第4章で検討した「へー」は、いずれも、直前に提示された「新たな情報」を受け止めるために用いられる反応である。そして、分析からわかったように、話し手がTCUを産出している途中に、受け手は「へー」を用いて、自分にとってニュース性のある情報として受け止めたことを標示する。また、「ニュースの報告—ニュースの受け取り」という基本連鎖の第二部分において、話者は「へー」を用いて、ニュースの報告者が第一部分でニュース性を強調するスタンスに同調を示す。話し手のTCUの途中と基本連鎖の第二部分で、何らかのニュース性のある情報を受け止めるために用いられているという点に関しては、これらの「へー」は共通しているように見える。しかし、話し手のTCUの途中では、「へー」は単にニュース性のある情報として受け止めたことを標示するが、本能的には現行話者がTCUを継続して語り続けることを支持するものとして産出され、また、そのように受け止められる。一方、基本連鎖の第二部分では、「へー」は単にニュース性のある情報を受け止めたことを示すだけではなく、ニュースの報告者がニュース性を強調するスタンスにも同調を示しているため、第一部分で開始された行為が十分かつ適切に

受け止められたという理解を可能にし、そこで連鎖を収束してもよいとみなされる機会を生み出す。それゆえ、「へー」を産出した話者が、新たな連鎖を生み出す行為に移行することも可能となる。このように、新たな情報を受け止めたことを示す「へー」は、それぞれの位置において、相互行為上それぞれ異なる働きをしていることがわかる。

認識更新標示が用いられる「位置」によって、相互行為上の働きが異なること自体は、第1章で述べたように、「oh」に関連する一連の研究から既に示唆されている(Heritage, 1984, 1998, 2002; Schegloff, 2007 など)。また、そのことは「へー」を取り上げている Mori(2006)でも検証されている。本研究は、認識更新標示に関するこれらの研究の流れを受け継いだものとして位置付けられる。しかしながら、本研究は、「へー」の位置を体系的に観察することを通して、連鎖位置による「へー」の相互行為上の働きの違いをより鮮明に示すことができた。さらに、この成果から、今後、日本語または他の言語における認識更新標示を考察する際に、その位置を体系的に見ることが重要であることが示唆される。

第二に、本研究の分析を通して、「へー」の使用により、「へー」に後続する行為連鎖が特定の方向へ導かれていくことを明らかにした。このことを深く理解するために、第4章の基本連鎖の第二部分に用いられる「へー」と、第6章の一連の連鎖が収束可能な位置に至った後に用いられる「へー」を取り上げて再度考察したい。

第4章では基本連鎖の第二部分、また第6章では一連の連鎖が収束可能な位置に至った後、「へー」が使用されることによって次の新たな連鎖へ移行する機会が作り出されることを明らかにした。実際、それぞれの位置において、「へー」の話者は次の新たな連鎖へ移行する機会を利用して、次の新たな連鎖を開始していることが観察される。この点に関しては、上記2つの位置で産出される行為連鎖はさほど変わらないものに見えるが、それぞれの位置で実際に起こっている行為連鎖を詳細に分析すると、その違いが見えてくる。基本連鎖の第二部分で、「へー」の話者は、「へー」を用いて、第一部分でニュース報告者が示したニュース性を強調するスタンスに同調を示した後、「第一部分のニュース性にかかわることの質問」を聞き出すことを可能にしている。すなわち、参加者の一人が何らかの報告をし、もう一人がそれを受け止めるという活動の枠組みの中にとどまり、「へー」は、直前に述べられた事柄を、確かにニュース性のあるものとして受け止めたということを示すことにより、報告とその受け止めという活動を促進しているとも言える。それに対して、一連の連鎖が収束可能な位置に至った後で、「へー」の話者は、「へー」を用いて、それまでの一連の連鎖を明示的に収束させた後に、新たな話題を持ち出すこと、すなわち、新たな活動を開始することを可能にしている。このように、特定の相互行為環境において、「へー」の使用により、そ

れに後続する行為連鎖が特定の方向へ導かれていくことが検証された。ここから、「へー」は特定の相互行為環境において、行為連鎖を組織するために利用可能なリソースと言える。

第三に、「へー」における相互行為を詳細に観察することを通して、人々の相互行為の組織の仕方の理解を深めることができた。本研究の研究対象である「へー」は、「へー」の産出者の「認識」が更新されたことを「標示」するものである。本研究の分析を通して、「認識」が更新されたことを「標示」することが具体的に何を意味するのかが明らかになった。つまり、「へー」によって受け止められる「ニュース性のある情報」、「想定外の情報」や「異なる認識」などは、極めて相互行為的な現象である。ニュースの受け手(「へー」の産出者)に実際に認知的な変化が生じたかということとは別に、相互行為的にそれが標示され、受け止められることによって、「ニュースとして受け止められた」という事実が参加者の間で確立される。この点から、「へー」はどのような情報をどのように受け止めたかということの標示に関わる言語資源であると言え、これは会話参加者間の社会的関係にも影響を及ぼす可能性がある。

最後に、本研究は、「へー」が用いられる位置を、①話し手がTCUを産出する途中、②基本連鎖の第二部分、③質問-応答連鎖の第三の位置、④一連の連鎖が収束可能な位置に至った後のように体系的に分類し、観察を行った。そして、上に示しているように、ある認識更新標示の位置を体系的に観察することは、その認識更新標示の相互行為上の働きを全面的に解明することに繋がると考える。また、上記の4つの「位置」というのは、「へー」に限らず、例えば本研究で比較した「ふーん」のように他の認識更新標示も繰り返して使用される位置である¹。そのため、今後、他の認識更新標示を取り上げて分析を行う際、この4つの位置に用いられるものを取り上げることが有効と考える。その意味で本研究は、認識更新標示全体の体系的な解明に向けた、1つのモデル研究と言える。

7.4 今後の課題

以上、本研究の成果について述べた。また、本研究にはいくつかの課題も残されている。

第一に、本研究は、①話し手がTCUを産出する途中、②基本連鎖の第二部分、③質問-応答連鎖の第三の位置、④一連の連鎖が収束可能な位置に至った後といった4つの位置に用いられる「へー」を中心に検討してきた。しかし、実際の会話の中では、この4つの位置

¹ 認識更新標示の言語形式によって、それぞれが用いられる「位置」は異なるものと考えられる。ここでは、あくまでも1つの言語形式の位置を網羅的に挙げると想定した場合について述べている。

以外にも「へー」が使用されることが観察される。例えば、以下の断片(1)の7行目の「へー」は、質問-応答連鎖(1-3行目)が拡張された後の位置に用いられるが、これまで見てきた「第三の位置」と「一連の連鎖が収束可能な位置に至った後」と異なっている。今後、上記の4つの位置以外で、「へー」がどのように用いられるか、そして、本研究で明らかにしたこととどう関連するかを引き続き検討していきたい。

(1)[callhome_1201_4:10]

- 1 ミオ： もうが-慣れた?学校どう?
 2 (0.5)
 3 ダイ： もうあの::慣れちゃって hhh[.hh
 4 ミオ： [あそ::
 5 ダイ： うん.
 6 (0.3)
 7 →ミオ： へ……………
 8 (0.4)
 9 ダイ： なんか彼女いるんだよね.

第二に、本研究は、日本語会話に用いられる認識更新標示の1つである「へー」を取り上げて分析しているが、他の認識更新標示については取り扱っていない。今後、「へー」を含めた日本語の認識更新標示を扱う体系的な研究を行う必要がある。

第三に、これは第二の点とも関連するものであるが、同様の位置で生じている異なる言語形式の認識更新標示について、十分明らかになっていない。本研究は、基本連鎖の第二部分および、質問-応答連鎖の第三の位置において、「へー」と「ふーん」を比較することで、「へー」の相互行為上の働きをより詳細に理解することができた。日本語の認識更新標示に関する先行研究では、「あっ」と「ああ」について比較を行った Endo(2018)以外に、同様の位置で生じる異なる言語形式の認識更新標示の比較研究はほとんど見当たらない。今後、異なる言語形式の間での比較を行うことによって、日本語の認識更新標示の一つ一つについてより精緻な記述が可能となり、相互行為の参加者がどのような局面でどのように認識更新標示を用い、それがどのように相互行為を組織するのか明らかにすることができると考える。

第四に、本研究は、日本語の認識更新標示の一つを取り上げたにすぎない。第1章で紹介

したように、英語や他の言語においては、認識更新標示についての研究は既に多くなされている。今後、日本語と他の言語の比較を行うことを通して、相互行為における認識更新標示について言語間の普遍的な側面を捉えると同時に、日本語という言語資源に特有の性質を見出し、相互行為における認識更新標示の使用の重要性についてさらに理解を深めることが必要である。

参考文献

【英語文献】

- Aoki, Hiromi. (2010) On the use of the interjection *huun* in Japanese spoken discourse. In: Iwasaki, S., Hoji, H., Clancy, P.M., Sohn, Sung-Ock, (Eds.), *Japanese/Korean Linguistics* 17: pp.409-422. Stanford: CSLI.
- Baldauf-Qulliatre, Heike. (2016) “*pf*” indicating a change in orientation in French interactions. *Journal of Pragmatics* 104: pp.89-107.
- Betz, Emma., and Golato, Andrea. (2008) Remembering relevant information and withholding relevant next actions: the German token “*achja*”. *Research on Language and Social Interaction* 41: pp.58-98.
- Bolden, Galina. (2006) Little words that matter: discourse markers ‘so’ and ‘oh’ and the doing of other-attentiveness in social interaction. *Journal of Communication* 56: pp.661-688.
- Endo, Tomoko. (2018) The Japanese change-of-state *a* and *aa* in responsive units. *Journal of Pragmatics* 123: pp.151-166.
- Emmersten, Sofie., and Heinemann, Trine. (2010) Realization as a Device for Remediating Problems of Affiliation in Interaction. *Research on Language and Social Interaction* 43(2): pp.109-132.
- Gardner, Rod. (2001) *When Listeners Talk: Response Tokens and Listener Stance*. Benjamins, Amsterdam/Philadelphia.
- Golato, Andrea. (2010) Marking understanding versus receipting information in talk: *Achso* and *ach* in German interaction. *Discourse and Studies* 12(2): pp.147-176.
- Golato, Andrea. (2012) German *oh*: marking an emotional change of state. *Research on Language and Social Interaction* 45(3): pp.245-268.
- Golto, Andrea., and Betz, Emma. (2008) German *ach* and *achso* in repair uptake: resources to sustain or remove epistemic asymmetry. *Zeitschrift für Sprachwissenschaft* 27: pp.7-37.
- Goodwin, Charles. (1984) Notes on story structure and the organization of participation.

- In: Atkinson, J.M., Heritage, J. (Eds.), *Structures of Social Action*. pp.225-246. Cambridge: Cambridge University Press.
- Goodwin, Charles. (1986a) Audience diversity, participation and interpretation. Text 6: pp.283-316.
- Goodwin, Charles. (1986b) Between and within: alternative treatments of continuers and assessments. *Human Studies* 9: pp.205-217.
- Goodwin, Charles. (1996) Transparent vision. In: Ochs, E., Schegloff, E.A., Thompson, S.A., (Eds.), *Interaction and Grammar*. pp.370-404. Cambridge: Cambridge University Press.
- Goodwin, Marjorie H., and Goodwin, Charles. (2000) Emotion within situated activity. In: Budwig, N., Uzgiris, I.C., Wertsh, J.V. (Eds.), *Communication: An Arena of Development*. pp.33-54. Ablex, Stamford, CT.
- Hayano, Kaoru. (2011) Claiming epistemic primacy: *yo*-marked assessments in Japanese. In: Stivers, T., Mondada, L., Steensig, J. (Eds.), *The Morality of Knowledge in Conversation*, pp.58-81. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hayashi, Makoto. (2001) Postposition-initiated utterances in Japanese conversation: An interactional account of a grammatical practice. In: Selting, M., Couper-Kuhlen, E. (Eds.), *Studies in Interactional Linguistics*, pp.317-343. John Benjamins, Amsterdam.
- Hayashi, Makoto. (2009) Marking a 'noticing of departure' in talk: Eh-prefaced turns in Japanese conversation. *Journal of Pragmatics* 41(10): pp.2100-2129.
- Heinemann, Trine. (2016a) From 'looking' to 'seeing': Indexing delayed intelligibility of an object with the Danish change-of-state token *nå*. *Journal of Pragmatics* 104: pp.108-132.
- Heinemann, Trine. (2016b) Registering revision: the reduplicated Danish change-of-state *nå*. *Discourse and Studies* 18(1): pp.44-63.
- Heinemann, Trine., and Koivisto, Aino. (2016) Indicating a change-of-state in interaction: Cross-linguistic explorations. *Journal of Pragmatics* 104: pp.83-88.
- Heritage, John. (1984) A change-of-state token and aspects of its sequential placement. In: Atkinson, J.M., Heritage, J. (Eds.), *Structures of Social Action*. pp.299-345. Cambridge: Cambridge University Press.

- Heritage, John. (1998) Oh-prefaced responses to inquiry. *Language in Society* 27: pp.291-334.
- Heritage, John. (2002) Oh-prefaced responses to assessments: a method of modifying agreement/disagreement. In: Ford, C.E., Fox, B.A., Thompson, S.A. (Eds.), *The Language of Turn and Sequence*. pp.196-224. New York: Oxford University Press.
- Heritage, John. (2012a) Epistemics in action: Action formation and territories of knowledge. *Research on Language and Social Interaction* 45(1): pp.1-29.
- Heritage, John. (2012b) The epistemics engine: Sequence organization and territories of knowledge. *Research on Language and Social Interaction* 45(1): pp.30-52.
- Hilmisdóttir, Helga. (2016) Responding to informings in Icelandic talk-in-interaction: A comparison of nú and er það. *Journal of Pragmatics* 104: pp.133-147.
- Hopper, Robert. (1992) *Telephone conversation*. Bloomington: Indiana University Press.
- Iwasaki, Shoichi. (1997) The Northridge earthquake conversations: The floor structure and the 'loop' sequence in Japanese conversation. *Journal of Pragmatics* 28(6), pp.661-693.
- Jefferson, Gail. (1978) Sequential aspects of storytelling in conversation. In: J. Schenkein (Ed.), *Studies in the Organization of Conversational Interaction*, pp.219-248. New York: Academic Press.
- Jefferson, Gail. (1979) A technique for inviting laughter and its subsequent acceptance/declination. In: G. Psathas (Ed.), *Everyday Language: Studies in ethnomethodology*, pp.79-96. New York: Irvington Publishers.
- Jefferson, Gail. (1984a) Notes on a systematic deployment of the acknowledgement tokens 'yeah' and 'mmhm'. *Paper in Linguistics* 17: pp.197-216.
- Jefferson, Gail. (1984b) Notes on some orderliness of overlap onset. In: V.D'Urso and P.Leonardi (Eds.), *Discourse Analysis and Natural Rhetoric*, pp.11-38. Padua, Italy: Cleup Editore.
- Jefferson, Gail. (1993) Caveat speaker: Preliminary notes on recipient topic-shift implicature. *Research on Language and Social Interaction* 26: pp.1-30.
- Kasterpalu, Riina., and Tiit, Hennoste. (2016) Estonian *aa*: A multifunctional change-of-state token. *Journal of Pragmatics* 104: pp.148-162.
- Koivisto, Aino. (2013) On the preference for remembering: acknowledging an answer

- with Finnish *ai nii(n)* (“oh that’s right”). *Research on Language and Social Interaction* 46(3): pp.277-297.
- Koivisto, Aino. (2015a) Displaying now-understanding: the Finnish change-of-state token *aa*. *Discourse Process* 52(2): pp.111-148.
- Koivisto, Aino. (2015b) Dealing with ambiguities in informings: Finnish *aijaa* as a “neutral” news receipt. *Research on Language and Social Interaction* 48(4): pp.365-387.
- Koivisto, Aino. (2016) Receipting information as newsworthy vs. responding to redirection: Finnish news particles *aijaa* and *aha(a)*. *Journal of Pragmatics* 104: pp.163-179.
- Lerner, Gene H. (1992) Assisted story telling: Deploying shared knowledge as a practical matter. *Qualitative Sociology* 15: pp.247-271.
- Local, John. (1996) Conversational phonetics: Some aspects of news receipt in everyday talk. In E. Couper-Kuhlen & M. Selting (Eds.), *Prosody in Conversation: Interactional Studies*, pp.177-230. Cambridge: Cambridge University Press.
- MacWhinney, B. (2007) The Talk Bank Project. In J. C. Beal, K.P. Corrigan, and H.L.Moisl (Eds.), *Creating and Digitizing Language Corpora: Synchronic databases*, Vol.1, pp.163-180. Houndmills: Palgrave-Macmilan.
- Mori, Junko. (2006) The workings of the Japanese token *hee* in informing sequences: An analysis of sequential context, turn shape, and prosody. *Journal of Pragmatics* 38(8): pp.1175-1205.
- Morita, Emi.(2012) “This talk needs to be registered”: The metapragmatic meaning of the Japanese interactional particle *yo*, *Journal of Pragmatics* 44(13): pp.1721-1742.
- Persson, Rasmus. (2015) Indexing one's own previous action as inadequate: On *ah* prefaced repeats as receipt tokens in French talk-in-interaction. *Language in Society* 44(4): pp.497-524.
- Pomerantz, Anti M. (1984) Agreeing and disagreeing with assessments: some features of preferred/dispreferred turn shapes. In Maxwell J. Atkinson, and John Heritage (Eds.), *Structures of Social Action: Studies in Conversation Analysis*, pp.57-101. Cambridge: Cambridge University Press.

- Sacks, Harvey, Schegloff, Emanuel, and Jefferson, Gail. (1974) A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation. *Language* 50: pp.696-735. (西阪仰訳(2010)[訳]「会話のための順番交替の組織—最も単純な体系的記述」『会話分析基本論集—順番交替と修復の組織』,pp.7-153.世界思想社.)
- Schegloff, Emanuel A. (1982) Discourse as interactional achievement: some uses of “Uh huh” and other things that come between sentences. In: Deborah Tannen (Ed.) *Analyzing Discourse: Text and Talk*. (Georgetown University Roundtable on Language and Linguistics), pp.71-93. Washington, D. C.: Georgetown University Press.
- Schegloff, Emanuel A. (1984) On some questions and ambiguities in conversation. In: Atkinson, J.M., Heritage. J. (Eds.), *Structures of Social Action*. pp.28-52. Cambridge: Cambridge University Press.
- Schegloff, Emanuel A. (1986) The routine as achievement. *Human Studies* 9: pp.111-151.
- Schegloff, Emanuel A. (1996) Turn organization: One intersection of grammar and interaction. In: Elinor Ochs, Emanuel A. Schegloff and Sandra A. Thompson (Eds.) *Interaction and Grammar*, pp. 52-133. Cambridge: Cambridge University Press.
- Schegloff, Emanuel A. (2000) Overlapping talk and the organization of turn-taking for conversation. *Language in Society* 29: pp.1-63.
- Schegloff, Emanuel A. (2007) *Sequence Organization in Interaction: A primer in conversation analysis*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Schegloff, Emanuel A., Gail Jefferson and Harvey Sacks. (1977) Preference for self-correction in the organization of repair in conversation. *Language* 53: pp.361-382.
- Seuren, Lucas M., Huiskes, Mike., and Koole, Tom. (2016) Remembering and understanding with *oh*-prefaced yes/no declaratives in Dutch. *Journal of Pragmatics* 104: pp.180-192.
- Sorjonen, Marja-leena. (2001) *Responding in Conversation: A Study of Response Particle in Finnish*. Benjamins, Amsterdam.
- Stivers, Tanya. (2008) Stance, alignment, and affiliation during storytelling: When nodding is a token of affiliation. *Research on Language and Social Interaction* 41(1): pp.31-57.
- Stivers, Tanya., Rossano, Federico. (2010) Mobilizing responses. *Research on Language*

- and Social Interaction* 43(1): pp.3-31.
- Tanaka, Hiroko. (2010) Multimodal expressivity of the Japanese response particle *Huun*: Displaying involvement without topical engagement. In: Barth-Weingarten, D., Reber, E., and Selting, M., (Eds.), *Prosody in Interaction*. pp.303-332. Amsterdam: John Benjamins.
- Tanaka, Hiroko. (2013) The Japanese response token *Hee* for registering the achievement of epistemic coherence. *Journal of Pragmatics* 55: pp.51-67.
- Weidner, Matylda. (2016) *Aha*-moments in interaction: Indexing a change of state in Polish. *Journal of Pragmatics* 104: pp.193-206.
- Zinken, Jörg. (2013) The *weź*V2 (take-V2) double imperative in Polish interaction. In: Nadine, Thielemann., and Peter, Kosta. (Eds.) *Approaches to Slavic Interaction*. pp.35-61. John Benjamins, Amsterdam.
- Zinken, Jörg., and Ogiermann, Eva. (2011) How to Propose an Action as Objectively Necessary: The Case of Polish *Trzeba x* (“One Needs to *x*”). *Research on Language and Social Interaction* 44(3): pp.263-287.

【日本語文献】

- 伊藤翼斗(2018)『発話冒頭における言語要素の語順と相互行為』大阪大学出版会.
- 加藤陽子(2010)『話し言葉における引用表現—引用標識に着目して—』くろしお出版.
- 串田秀也(2002)「会話中の「うん」と「そう」—話者性の交渉との関わりで—」定延利之(編)『「うん」と「そう」の言語学』, pp.5-46. ひつじ書房.
- 串田秀也(2005)「「いや」のコミュニケーション学—会話分析の立場から—」大修館書店『月間言語』 34(11), pp.44-51.
- 串田秀也(2006a)「会話分析の方法と論理 談話データの「質的」分析における妥当性と信頼性」伝康晴・田中ゆかり(編)『講座社会言語科学 第6巻 方法』, pp.188-206. ひつじ書房
- 串田秀也(2006b)『相互行為秩序と会話分析—「話し手」と「共—成員性」をめぐる参加の組織化—』世界思想社.
- 串田秀也(2009)「聴き手による語りの進行促進—継続支持・継続催促・継続試行—」日本認知科学会『認知科学』 16(1), pp.12-23.
- 串田秀也・平本毅・林誠(2017)『会話分析入門』勁草書房.
- 小出慶一(2008)「発話行動における「で」の役割—「で」のフィラー化をめぐる—」埼玉大学教養学部『埼玉大学紀要 教養学部』 44(2): pp.27-40.
- 鈴木加奈(2000)「会話における「なんか」の機能に関する一考察」大阪大学言語文化学会『大阪大学言語文化学』 9: pp.63-78.
- 高木智世(2008)「相互行為を整序する手続きとしての受け手の反応—治療的面接場面で用いられる「はい」をめぐる—」社会言語科学会『社会言語科学』 10(2): pp.55-69.
- 高木智世・細田由利・森田笑(2016)『会話分析の基礎』ひつじ書房.
- 田窪行則・金水敏(1997)「応答詞・感動詞の談話的機能」音声文法研究会(編)『文法と音声』, pp.257-279.くろしお出版.
- 陳相州(2008)「日本語会話データに見られる対比談話標識の使用実態」名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本語文化専攻『言葉と文化』 9, pp.237-252.
- 土屋菜穂子(2000)「感動詞の分類—対話コーパスを資料として—」青山学院大学文学部『紀要』 41, pp.239-255.
- 富樫純一(2005)「「へえ」「ほう」「ふーん」の意味論 (特集 感動詞—未開拓の研究領域へ)」大修館書店『言語』 34(11), pp.22-29.
- 富樫純一(2012)「感動詞とコンテクスト」澤田治美編『ひつじ意味論講座 第6巻 意味と

- コンテキスト』, pp.199-214.ひつじ書房.
- 日本語記述文法研究会[編](2003)『現代日本語文法 4 第 8 部 モダリティ』くろしお出版.
- 日本語記述文法研究会[編](2009)『現代日本語文法 7 第 12 部 談話 第 13 部 待遇表現』くろしお出版.
- 西阪仰(2005)「複数の発話順番にまたがる文の構築—プラクティスとしての文法Ⅱ—」串田秀也・定延利之・伝康晴(編)『活動としての文と発話』, pp.63-90.ひつじ書房.
- 西阪仰(2008)「発言順番内において分散する文—相互行為の焦点としての反応機会場—」社会言語科学会『社会言語科学』10(2), pp.83-95.
- 西阪仰(2009)「活動の空間的および連鎖的な連鎖—話し手と聞き手の相互行為再考—」日本認知科学会『認知科学』16(1), pp.65-77.
- 西阪仰[訳](2010)『会話分析基本論集—順番交替と修復の組織—』世界思想社.
- 西阪仰・串田秀也・熊谷智子(2008)「特集『相互行為における言語使用：会話データを用いた研究』について」社会言語科学会『社会言語科学』10(2), pp.13-15.
- ヘリテッジ・ジョン(2008)「知識に関する眺望(epistemic landscape)を描き出すこととその眺望に働きかけつつその中を進むこと—yes/no 質問に対する yes/no 返答と繰り返し返答に込められる進行性と主体,抵抗—」日本社会学理論学会『現代社会学理論研究』2: pp.14-25.(川島理恵訳)
- ポリー・ザトラウスキー(1993)『日本語の談話構造分析—勧誘のストラテジーの考察(日本語研究叢書(5))』くろしお出版.
- 益岡隆志・田窪行則(1992)『基礎日本語文法—改訂版—』くろしお出版.
- 森田笑(2008)「相互行為上における協調の問題—相互行為助詞「ね」が明示するもの—」社会言語科学会『社会言語科学』10(2), pp.42-54.
- 森田笑(2017)「相互行為詞—行為と行為の間における相互行為の秩序の交渉を捉える」『日本語学 4 月特大号』36(4): pp.152-163.明治書院.
- 安井永子(2012)「接続詞「でも」の会話分析研究：悩みの語りに対する理解・共感の提示において」名古屋大学文学部『名古屋大学文学部研究論集』58, pp.89-102.
- 山口治彦(2009)『明晰な引用,しなやかな引用』くろしお出版.
- 山本真理(2013)「物語の受け手によるセリフ発話—物語の相互行為的展開—」社会言語科学会『社会言語科学』16(1): pp.139-159.
- 山本真理(2016)「相互行為における聞き手反応としての「うん／はい」の使い分け—「丁寧さ」とは異なる観点から—」国立国語研究所『国語研究所論集』, pp.297-313.

若松美紀子・細田由利 (2003) 「相互行為・文法・予測可能性—「ていうか」の分析を例にして—」 語用論学会『語用論研究』5, pp.31-43.

各章と既発表論文・学会発表との関係

第1章 序論

新規執筆

第2章 研究方法と研究データ

新規執筆

第3章 話し手のTCUの途中に用いられる受け手の「へー」

新規執筆

第4章 基本連鎖の第二部分に用いられる「へー」

新規執筆

第5章 質問-応答連鎖の第三の位置に用いられる「へー」

関玲(2019)「「へー」と連鎖の展開のかかわりについて—第三の位置に用いられる「へー」を中心に—」第43回社会言語科学大会,つくば,筑波大学.

第6章 一連の連鎖が収束可能な位置に至った後に用いられる「へー」

関玲(2018)「連鎖全体への反応として使用される「へー」の働き」第42回社会言語科学大会,広島,広島大学.

関玲(印刷中)「一連の連鎖を収束させる「へー」」社会言語科学会『社会言語科学』

第7章 終章

新規執筆

全ての既発表論文・学会発表に加筆および修正を施している。